

サイコアナリティカル

英 文 学 論 叢

—英語・英米文学の精神分析学的研究—

第 38 号

The Journal of Psychoanalytical Study
of English Language and Literature

No. 38

サイコアナリティカル英文学会

The Society for Psychoanalytical Study
of English Language and Literature

目 次

1. Melville の *Pierre* —— 父の愛をめぐるルサンチマン —— ……1
佐々木英哲
2. Alice の悲劇性 —— “Adventure” の精神分析的考察 —— ……19
平 恵理子
3. D・H・ロレンス『恋する女たち』をユング心理学で読み解く (I) ……39
—— 「自己」の探求としての「結婚」 ——
森岡 稔
4. *The Merchant of Venice* 再読
—— 人肉裁判の法廷で男装の Portia が説く「慈悲」の意味 —— ……67
堤 裕美子
5. メランコリーからの脱出
—— フロイト理論から見えるトウェインとエンジェル・フィッ
シュたちの関係 —— ……91
鈴木 孝
6. “The Bear” にみる少年の成長 ……111
有働 牧子
7. SYNOPSIS ……125
8. 執筆者紹介 ……132
9. サイコアナリティカル英文学会会則 ……134
10. 『サイコアナリティカル英文学論叢』投稿規程 ……138
11. サイコアナリティカル英文学会の図書出版に関する規程 ……141
12. 編集後記 ……142
小園 敏幸

SYNOPSIS

1. Melville's *Pierre*: Resentment over Father's Love125
Eitetsu Sasaki
2. The Tragic Nature of Alice
—— A Psychoanalytical Consideration in "Adventure" ——126
Eriko Taira
3. A Jungian Approach to D. H. Lawrence's *Women in Love* (I)
—— Searching for "the Self" through Marriage ——127
Minoru Morioka
4. An Essay on *The Merchant of Venice* Reconsidered:
The Meaning of 'Mercy' by Disguised Portia128
Yumiko Tsutsumi
5. Escape from Melancholia: A Freudian Analysis of Mark Twain's
Acquaintance with 'Angelfish'129
Takashi Suzuki
6. The Growth in "The Bear"131
Makiko Udo

Melville の *Pierre*

—— 父の愛をめぐるルサンチマン ——

佐々木 英哲

緒言にかえて

Herman Melville の問題作 *Pierre; or The Ambiguities* (1852) は、大地主である未亡人 Mary Glendinning の御曹司、Pierre が表向き主人公となっているかのように見える。¹ この Pierre に困難な、こう言ってよければエディプス的なダブルバインドが立ちはだかる。ひとつは亡き父親の面子を立て、亡き夫を信じる誇り高き母を守らねばならない、という親に対する欺瞞的な孝養心と忠義立てであり、ひとつは窮地に立つ異母姉 Isabel を救わねばならないという弟としての責務、しかし甚だ動機の怪しい責務である。イザベルとピエールは、近親相姦を犯してはならないという父 / 神が定めた掟を破り、いわば父殺しにも匹敵する重罪を犯す張本人になる懸念も顧みず、偽装結婚を敢行する。待ち受けていた結果は予想に違わず自己破滅である。以上がメインプロットの展開であり、このようなプロットはエディプス的状况を前提としている。

作品を検討する前に確認しておきたい歴史的事実がある。その歴史的事実とは、内容はさておき民主化が進む 19 世紀中葉のアメリカ北部では暴君的僭主たるフロイト的父の威厳は著しく削がれ、中産階級女性達が文化の担い手となった、という事実である。そのような状況にあっては、エディプス的疾患は一方では逆説的に昂進し、また他方ではむしろ抑制されるのではなかろうか。作品『ピエール』の場合もいわばアクセルとブレーキを同時に踏み込む展開になってはいまいか。エディプス的プロットの裏面で別のサブプロットが並走してはいないだろうか。²

ここでサブプロットの推進力を担う人物とは、メインプロットの立役者

であるピエールを破滅に導くイザベルではあるまいか。ピエールのメインプロットを破綻させ、主客転倒なる現象をもたらすのがイザベルのサブプロットではあるまいか。「父」を倒すことからくる葛藤ではなく、「父」からの愛情配分をめぐる兄弟（姉弟）間の葛藤がサブプロットのライトモチーフとなっでははいまいか。そもそも作品『ピエール』の一年前に出版された『白鯨』(*Moby-Dick: or, The Whale*, 1851)でさえ、「父」の物語と「兄弟の葛藤」を併存させてはいまいか。なぜなら Ahab という名前は、「父の兄弟」³を意味するのだから。

さて注目したい伝記的事実は、ピエールの父親（その名は嫡子 Pierre と同名の Pierre Glendinning）の人生が作家メルヴィルの父親 Allan の人生と被っていることである。フィリップ・ヤング (Philip Young)、ヘニグ・コーエン (Hennig Cohen)、ドナルド・ヤネラ (Donald Yannella) の研究調査によれば、⁴ アランはフランスから婦人用の雑貨を「取り寄せる」事業を手掛けており、婚前に現地女性と「関係」があったと考えられている。作品『ピエール』ではどうか。イザベルは、結婚前につきあったフランス人と思われるものの、人種的には白人とは考えにくい女性——またはフランス植民地からと思しき移民女性——との間にできた娘——と推察される。別言すれば、結果的にフランス（植民地）から婚外子をアメリカに「呼び寄せた」ことになるピエールの父親は、フランスから婦人用品を「取り寄せる」商売をしたアランのカリカチュアとして描かれている。

そもそもメルヴィルには、ガンズヴォート (Gansevoort) なる兄がいた。その兄は学業成績のみならず外見も優れていたため、両親からの期待を一身に背負っていた。その兄は弟にとってはいわば目の上の瘤のような存在となる。このようなメルヴィル家の兄弟間に厳然と存在する親から子への不均衡な愛情配分の問題は、作品『ピエール』にも影を落とし、嫡子として愛を注がれるピエールと、庶子として蔑まれるイザベルとの間に横たわる姉弟間の葛藤として再現されてはいないだろうか。兄弟間の葛藤に注目

した先行研究は、管見によれば評伝分野で先のコーエン、ヤネラ、そして作品との関連ではジェイムズ・アダムソン（James Adamson）である。⁵ 特筆すべきはアダムソンが精神分析的手法を取り入れて分析を試みている点である。アダムソンはハインツ・コフト（Heinz Kohut）を参照枠にし、次のような作業仮説を前提に分析作業を進めている。つまり、幼年期に被った親の偏愛をめぐって争う兄弟間のトラウマ的経験に、自己愛型的人格障害者は生涯に渡って繰り返し立ち返る、という作業仮説だ。幼少期は兄弟で愛情の差をつけた親によるモラル・ハラスメントの被害を受け、成人期はドメスティック・バイオレンスの加害者になったメルヴィルにはこの作業仮説は有効だ。

ただアダムソンが母親からの愛に重点を置いたうえで兄弟間の相剋を強調するのに対し、論者は父からの愛にむしろ視点を移したうえで考察を進め、父の掟を破る——父を倒す——というエディプスのメインプロットに沿って読み解くのではなく、第二子がいたために父の愛を得られなかった長子の苦しみを描いたサブプロットに照準を合わせたい。その際、聖書に描かれる兄弟間の葛藤問題にメルヴィルがさりげなく言及している事実も、見逃すことなく掬いあげることとしたい。周知のごとく、さりげない言及、ふとした口の滑りにこそ、発話者の抑圧された本音の表出であると理解するのは、精神分析では定石となっているからである。

本稿では作品を取り巻く以上のようなコンテクストを踏まえ、「父」の愛情に恵まれず、いやりビドーを備給する対象である「父親」を最初から奪われていたイザベルが異母弟ピエールに対して抱いたルサンチマンを読み取ることで、女性を中心としたセンチメンタル文化が席捲する19世紀アメリカ社会を生きるイザベルが、どのような戦略で復讐を果たそうとしたのか検証することを執筆目的としたい。ここで急いで付言するが、イザベルのルサンチマンとは、ヨーロッパ的精神を矮小化したとしてニーチェが嘲弄を浴びせる近代ヨーロッパ的ルサンチマンではなく、悪魔的な情動

の謂いである。以下の考察では、第1章に於いて、イザベルが「見えにくく」、親からの愛をめぐる兄弟間の確執とルサンチマンを主題とするサブプロットが浮上しにくい状況を分析することから作業を始める。次に第2章ではヒロインとしては「見えにくい」存在であるが、アンチヒロインとしては目立つイザベルが「悪魔的」な様相を帯びていることを確認し、第3章でそのイザベルがピエールを操ることで家族という神聖空間を呪うさまを確認していきたい。

1. 潜勢するサブプロット、見えにくいイザベル

そもそも作品『ピエール』では表向き主人公と思しき青年が作品タイトルと同名であることから、作品のサブプロットは日の目を見ることはない。そしてこのようなサブプロットを駆動する「他者」であるイザベルが、フロイト的な「不気味なもの」としてピエールの前に立ちはだかることとなる。イザベルのアイデンティティが判明するまでは、ピエールの面前に掴みどころのない臃げないイザベルの「顔」だけが、さながら霧のとばりがかかったかのような異次元空間に現出する。そのさまは、「あの不思議な、人に取り憑くような顔…… [ピエール] が三度に渡って見まいとしても、それは無駄な抵抗に終わった……あの黒く輝く哀願するかのような悲しげな顔、あまりに神秘的で血の気のない顔 (that mysterious, haunting face, which … [Pierre] thrice didst vainly try to shun … the dark-eyed, lustrous, imploring, mournful face, that so mystically paled (p. 37))」として描かれる。

メインプロットの中心人物ピエールが「主体 (Subject)」としてのポジションを占有しているすれば、表面に浮上しないサブプロットを駆動させるイザベルは「主体」に対する「他者 (Other)」となる。ここで「主体」とは、14世紀のルネサンスに端を発し、18世紀の啓蒙主義を経て19世紀のロマン主義に至るまで脈々と受け継がれてきた「人間中心主義」的な——こう言ってよければ「我思う、故に我あり」と宣言したデカルト的な——

「主体」である、と理解できる。エドワード・サイード (Edward Said) をはじめとするポストコロニアリストの指摘を俟つまでもなく、⁶「主体」の座を占めることができたのは富を有する中産階級以上の成人白人男性であるから、逆に「他者」のポジションに甘んじるのは非所有階級、被搾取階級に属し、非白人女性となる。実際イザベルは「浅黒くオリーブ色 (dark, olive (p. 46))」の肌で、「漆黒の豊かな柔らかい髪の毛 (immense soft tresses of the jettiest hair, (p. 118))」をもっていると描写され、その非欧米的でエキゾチックな容姿はホワイト・アメリカにあって異彩を放ち、衆目を浴びる。サブプロットの駆動者としての「見えない」ポジションに甘んじていたはずのイザベルが、逆説的にも中心に躍り出る。セルフ・オリエンタリズムの戦略的実践だ。「人々が [彼女の] 髪を美しいと、[彼女その人] についても美しい (the word beautiful, spoken of my hair, and beautiful, spoken of myself)」と「囁くのをふと耳にした (by chance overhear[s] them whispering (p. 123))」、とあるから、容姿に恵まれた自分が魔性の異邦人女としてピエールを手玉に取ることなど造作もない、とイザベル自身も自覚している。

普遍かつ啓蒙的な知ではなく、むしろ特定の状況で通用するローカルな知の重要性を説くフェミニストで前衛的文化人類学者のダナ・ハラウェイ (Donna Jeanne Haraway) に耳を傾けよう。すると、中産階級が支配的になる 19 世紀のホワイト・アメリカにあって、資産家の跡取りであるピエールが代表する「普遍 (形而上学) 的な知」を壊乱する「状況に置かれた [特殊な] 知 (situated knowledge)」⁷ を非白人として体現するのが、余所者イザベルであると判明する。このようなイザベルはピエールの理解の範疇を超える。イザベルが体現する「知」は、近現代欧米社会で支配的な (西欧の白人男性としての) 人間主体中心主義 (理性 / ロゴス中心主義) を生きるピエールには捕捉できない「知」に他ならない。

先ほどのハラウェイと同じフェミニズムに立脚しながらも、ハラウェイ

イとは異なり、記号学及び精神分析学的手法を取り入れたのはジュリア・クリステヴァ (Julia Kristeva) である。ここでクリステヴァの評言を借用してイザベルの戦略を敷衍すれば、⁸ イザベルは言葉 / 象徴に代わる音楽という「前-言語的 (前-象徴的)」な手段に訴えることで、「父 / 父の息子 (ピエール) / ログス」が構築した秩序を壊乱する、と理解される。ピエールは祖父、父、自分の三代に渡って同じ名前であるから、「ピエール」が代表する父権的秩序をイザベルは壊乱する。イザベルは言葉による説明の代わりに音楽でピエールを魅了し、ピエールの理性を麻痺させる。イザベルが掻き鳴らすギターは「前-言語的 (前-象徴的)」なコミュニケーション・ツールに他ならない。

忽然として美しくも悲しい不思議な [イザベルが掻き鳴らす] ギターの音色が部屋に響き渡る。その部屋にはなんとも言い難いが爽快な音色が広がった。ギターの音は部屋を踊るように軽快に駆け巡る。きらめく氷柱のように、音は部屋の隅から反響し揺らめく。そして響き渡る銀の鈴のように [ギターの音] はピエールの耳に届く。再び銀の鈴のような音色は天井に向かって引き寄せられると、また跳ね返ってゆらゆらと振動する。そしてまた銀の鈴のように彼の耳に音が戻ってくる。まるで蛍が羽音を立てているようだ。[雷鳴を響き渡らせる雷と異なり本来は音のしない] 夏の稲妻が、鮮やかに、それでいて柔らかに、音を出しているかのようだ。

Instantly the room was populous with sounds of melodiousness, and mournfulness, and wonderfulness; the room swarmed with the unintelligible but delicious sounds. The sounds seemed waltzing in the room; the sounds hung pendulous like glittering icicles from the corners of the room; and fell upon him with a ringing silveryness; and were drawn

up again to the ceiling, and hung pendulous again, and dropped down upon him again with the ringing silveryness. Fire-flies seemed buzzing in the sounds; summer-lightnings seemed vividly yet softly audible in the sounds. (p. 126)

成人たる資格は「言語」なる「象徴」を介在させ、互いの意思（欲望）を理解しあうことができるか否かにかかっている、とするラカン（Jacques Lacan）の説が正しいとすれば、イザベルが「前－言語的（前－象徴的）」なる音楽を異母弟との意思疎通手段として使うことは、成人となる前の段階、想像界なる段階に意図的、いや戦略的にイザベルが留まることを意味する。ラカンによれば象徴界は父親の存在を幼児が認めた後に精神の領域に現出する世界であるが、いみじくもイザベルは父を「知らない」まま育った。父が不在の世界で今まで過ごしてきた以上、「前－言語的（前－象徴的）」なるものを操ることに長けていることは、「さもありなん」といったところだ。実際、ピエールに向かって自らことをイザベルは「かわいそうなベル（Poor Bell）」と幼児語で呼び、「今だって子供のままだし、何時だっていつも子供のままであり続けるの（“I have always been, and feel that I must always continue to be a child ….” [p. 148]）」と、恥ずかしげもなく言っている。かたや幼児としてのイザベルがいて、かたや男を惑わす妖艶なる運命の女（femme fatale）としてのイザベルがいる。ダブル・アイデンティティズを巧みにまとい、ハラウエイ的な「状況化された知」を操るイザベルを前にしては、「普遍的知／ロゴス／言語」の領域を司るピエール——ちなみにピエールは成人の象徴界を作り上げる「言葉」を生業とする作家であることを想起したい——には成す術もない。つまりピエールにはイザベルの正体を同定することはかなわず、イザベルはいわゆるフロイト的な「不気味」な存在となる。ピエールにルサンチマンを抱くイザベルの仕業／戦略により、ピエールはデカルト的思考力、人間性の証である思

考を奪われる。ラカン的な象徴的現前の実定性を無効化し、「はじめに言があった。……言は神であった。すべてのものは、これによってできた。(ヨハネによる福音書 1:1,2)」とされる父/神が創造した世界を否定する悪魔的な人物がイザベルなのである。よってイザベルのルサンチマンとは、近代ヨーロッパ精神を軟弱化したとニーチェが容赦なく罵倒するような小市民的な負の感情ではない。つまり向うに回すことすらできない強者を前にした劣等者が、キリスト教的精神と市民道徳に訴えることで解消を図るという鬱屈した小市民的な劣情の謂いではなく、強者を震撼させる凄みを帯びた情念がイザベルのルサンチマンなのである。

2. 悪魔的存在としてのイザベル

第1章に於いて、「見えにくく(理解しがたく)」「不気味な」「他者」として同定されるイザベルの「戦略」について瞥見したので、第2章ではイザベルの「悪魔性」を検証する。なお西欧文化に於ける悪魔性に言及する以上、ユダヤ・キリスト教的な精神構造に踏み込む必要があり、聖書に足掛かりを求めて考察したい。

まずは、父権的な西欧社会にあって「他者」が「悪魔性」を帯びるメカニズムを確認することから作業を開始する。マイケル・ロジン (Michael Rogin) が指摘するように、⁹ イザベル (Isabel) なる名前の響きは、旧約聖書の列王記で言及のあるジザベル (Jezebel) を連想させる。ジザベルはアハブ (Ahab) 王の妃であり、アハブに由来する『白鯨』の捕鯨船ピーコッド号 (the Pequod) 船長エイハブ (Captain Ahab) は、片足をもがれたことで神の化身とも思しき白い (ノアルピノのノ奇形) の鯨に対して私怨をたぎらせる。エイハブ船長はもとより、邪教を広めようとしたジザベルも、またジザベルにほだされるアハブ王も、神を恐れぬ不埒者である。拡大解釈すれば、作品『ピエール』のイザベルもまたこういった不屈き者達の系譜に連なることになる。

この際、大胆にショートカットするならば、「神」とは「父」である。フロイト (Sigmund Freud) に従えば、「父 / 神」を崇拜すると同時に「父 / 神」を打倒したいとする欲望は、理性の力では処理できない。よって、このような二律背反的な欲望は無意識の領域に「抑圧」される。この抑圧されたものを体現するのがイザベル / ジザベルであり、エイハブ / アハブではなかろうか。だからこそイザベルと彼女にほだされたピエールは近親相姦を犯してはならないという父 / 神が定めた掟 / 法を破るのだ。こう言ってよければ父殺しにも匹敵する重罪を犯す張本人になる懸念も顧みず、偽装結婚を敢行するのである。結果的に父権的秩序は崩壊する。だからこそイザベルは悪魔性を帯びるのである。

父権制を崩壊に導くという意味で、イザベルの悪魔性は称賛に値する、とする一部のフェミニストの論調には、¹⁰ ジェンダー・スタディーズにも片足を入れる論者としても理解を示したいのはやまやまであるが、無条件の同意は精神分析に軸足を置く論者として躊躇する。メルヴィル作品を精神分析的に解釈したアダムソンがいみじくも指摘するように、「悪魔的特性」とは「生来的な悪 [——父権制の壊乱が『悪』なのかどうかの問はここでは差し控える——] に起因するのではなく、愛 [情の授受行為] が不首尾に終わったことに起因する」¹¹ からである。ピエールにエディプス的テーマを展開させこそせよ、イザベル本人は父の愛情に飢えている。だからこそ以下の言葉がイザベルから発せられる。

以前、あまりに普通からかけ離れた生活をしていただけだから、気持ちのなかで父という言葉は、子供達が普通に連想するようなイメージとは結びつかなかったんだと思うの。父という言葉は、私にとって一般的な愛とやさしさを表す言葉でしかなかったの——せいぜいそれくらいのもの。

I suppose, because of the extraordinary secludedness of my previous life—I did not then join in my mind with the word father, all those peculiar associations which the term ordinarily inspires in children. The word father only seemed a word of general love and endearment to me—little or nothing more … (p. 145)

さらにイザベルは母親の胸さえも知らずに育った、と言う。「ピエール、今、あなたに話しかけるこの唇は女性の（母の）胸に触れたこともないの（“Pierre, the lips that do now speak to thee, never touched a woman’s breast …” [114]）」。このようなイザベルが、嫡子として父と母から「絶対的に自足的なナルシズム」¹²を許された異母弟ピエールに対して、抑えがたいルサンチマンを抱かないわけではない。だからこそイザベルには悪魔的な妖気が漂うのである。いや悪魔性を纏うことは、自足的なナルシストで父と同名の弟ピエールに対して、あぶれ者¹³（イザベル）として認知を迫るイザベルのしたたかな戦略なのである。

メルヴィルの諸作品に登場する悪魔的人物のパーソナリティを分析しているのが、アダムソンである。そのアダムソンはミルトン（John Milton）に注目する。メルヴィルが若い時からミルトンの『失樂園』（*Paradise Lost*, 1667）に親しんできたことは、マートン・シールツ（Merton M. Sealts, Jr.）などの先行研究により明らかにされているが、¹⁴アダムソンは楽園から追放された悪魔が父なる神から寵愛を受ける人間（アダムとイヴ）を見て、嫉妬心を掻き立てられる箇所を照準を定めた。アダムソンは『失樂園』とメルヴィルの遺作『ビリー・バッド』（*Billy Budd*, 1924）とがテーマ的に重なることを読み込もうとした。すなわち父親的な人物で戦艦の艦長であるヴィア（Vere）からの愛をめぐり、悪魔的な中年男クラガート（Claggart）が無垢な美青年水兵ビリー（Billy）に対して抱いた嫉妬が、『失樂園』に見られるテーマとしての嫉妬、つまり人間に対して悪魔が抱

いた嫉妬と通底することを論じたのが、アダムソンであった。翻って『失樂園』及び『ビリー・バッド』の嫉妬問題は、『ピエール』に於ける悪魔的な私生児イザベル、正統なる嫡子ピエール、そして異母姉弟の今は亡き父との愛をめぐる問題を考察するうえでも参考になる。まずは『失樂園』の関連箇所を引用しよう。

ああ、地獄だ！悲嘆にくれたわたしが目にするものはなんだ？
 我々の至福の座に届くまで高められた
 被造物〔アダムとイブ〕は我々と質的に異なっている——
 おそらく土から生まれたのであって
 精神から生まれたのではないが、
 輝かしい天上的精神の高みまで引き上げられている

なんという忌々しくも狂おしい光景を
 〔二人の人間は〕見せつけるか！
 こうやって二人〔アダムとイブ〕は
 互いの腕の中で至福を味わっている、
 だからエデンの園はいつそう幸に溢れ、
 二人は喜びに次ぐ喜びを思う存分に満喫している
 一方、この私と言えば、地獄へと投げ込まれる始末、
 そこでは喜びも愛もなく、あるのはただ激しい欲望だけ、
 悲惨極まるもろもろの苦しみのなかにあって、
 欲望は満たされることなどなく、
 ただ思い焦がれる痛みを募らせるだけ

O Hell! what do mine eyes with grief behold?
 Into our room of bliss thus high advanced

Creatures of other mould—Earth-born perhaps,
Not Spirits, yet to Heavenly Spirits bright

Sight hateful, sight tormenting! thus these two,
Imparadised in one another's arms,
The happier Eden, shall enjoy their fill
Of bliss on bliss; while I to Hell am thrust,
Where neither joy nor love, but fierce desire,
Among our other torments not the least,
Still unfulfilled, with pain of longing pines …
(*Paradise Lost* 4.358-63)

悪魔でありかつ墮天使のルシファー (Lucifer) は、人間との関係を、楽園から追われた長子と第二子なる兄弟関係、すなわち父から忌み嫌われ呪われた長子と父 (神) の愛情を受ける第二子の関係に捉え直す。この過程で抑えがたいルサンチマンにより長子の悪魔化は弾みをつける。このようにアダムソンは解釈する。父 (なる神) と子供達への愛情配分をめぐる兄弟間の葛藤めぐって描かれた旧約聖書のエピソードとしては、カイン (Cain) とアベル (Abel)、イシュマエル (Ishmael) とイサク (Isaac)、エサウ (Esau) とヤコブ (Jacob) などが即座に脳裏をよぎるが、いずれの人物もメルヴィルの諸作品に於いて言及がなされており、イザベルとピエールの組み合わせもこのような聖書中の人物の系譜に連なるものと判断してよいだろう。

3. ピエールを操るイザベル

こうなると『ピエール』のサブプロットに於いて、作者メルヴィルによる共感のベクトルは父 (ノ神) による理不尽な処遇に甘んじる長子イザベ

ルに向かうものと推察されるが、メルヴィルはイザベルの不幸の原因を人知の及ばぬ神慮に求めようとしているのではない。いや逆に神慮に求めないからこそ、イザベルの悪魔性は否応にも高まるのであり、そこがメルヴィルの狙いとなるのだ。以上の想定を踏まえ、第3章では瀆神的なイザベルがピエールを巧みに誘導することでピエールを手駒として動かすさまを検証する。

この問題を考察するときに括目すべきは、母親の入れ知恵を聞き入れ、老いて盲目となった父親を騙し、兄のエサウを出し抜いて家督を相続したヤコブである。確かにこのヤコブとピエールには皮肉な類比較係が見てとれる。ヤコブは兄の嫉妬と憎悪から逃れるために一人砂漠に向かったのだが、「石」を枕にして寝入ってしまう。ヤコブが見た夢はヤコブが将来的に一族の族長となり、ヤコブの子孫達がイスラエルを支配するようになるだろう、と神から約束されるというものである。翌朝、目覚めたヤコブは、その石があった場所をヘブライ語で「神の家」を意味するベテル (Bethel) と名付けた (創世記 27:19)。現代英語でも *bethel* なる語は、「聖域」あるいは「聖所」を意味するから、ヤコブの「石 (岩)」とは「教会」、現世に於ける「神の家」を暗示すると言えよう。

このような「石 (岩)」と「教会」の類縁関係は、新約聖書でも繰り返し言及されている。たとえば、キリストは一番弟子のペテロ [英語式でピーター、フランス語式でピエール] に対して、このように語ったとされる。「お前に言っておこう。お前の名前はペテロであり、私はこの岩の上に私の教会を建てる。(King James Bible: And I say also unto thee, That thou art Peter, and upon this rock I will build my church …) (マタイ伝 16:18)」ちなみにフランス語で「石 (岩)」は *Pierre* であるから、「ピエール / 岩 (石) / 教会」の関係が一目瞭然に提示される仏語訳のルイ・スゴン聖書 (*La Bible de Louis Segond*) を紐解くと、“Et moi, je te dis que tu es Pierre, et que sur cette Pierre je bâtirai mon Eglise … (下線筆者)” のように記されている

ことがわかる。なお、先述したようにピエールの父が商売でフランスとアメリカを行き来しており、イザベルにも（おそらくは植民地出身の）フランス系女性の血が入っていることが仄めかされている以上、「ピエール / 石 / 教会」の連関は決して偶然ではない、と理解される。

翻ってメルヴィルにより造形されたピエールであるが、エリック J. サンドクイスト (Eric J. Sundquist) の評言を借りて説明しよう。「ピエールはその名の通り、自分自身が石であり石である自分が、崩れてしまった大理石の祭壇に祭られていた父親を押しよけ (Pierre, himself the stone, replaces the marble altar of the father)」、「[石である] 自分の上に冒瀆的な教会を建てるのだ。(Pierre is Peter, the rock of himself upon which he builds a blasphemous church.)」¹⁵ だからこそ『ピエール』の語り手は家族を捨てたピエールをキリストに準えて、「こうして義務を忠実に履行するなかにあつて、天が授けたキリストが誕生する。[キリストとしてのピエールは] 地上の親をもたず、あらゆる現世的な絆を断ち切るのだ。(Thus, in the Enthusiast to Duty, the heaven-begotten Christ is born; and will not own a mortal parent, and spurns and rends all mortal bonds (p. 106).)」と宣言する。エペソ人への手紙 2 章 20 節——「キリスト・イエスご自身が隅のかしら石 (礎石 the chief corner stone) なのだ」—— 仏語訳では “Jésus-Christ lui-même étant la Pierre angulaire (強調筆者).” —— をパロディとしたこの宣言は、耳障りな不協和音を読者の耳朶に響かせる。無論、このように「ピエール / 石 / 似非キリスト / 教会」の連関が明らかになり、ピエールが亡き父の聖性を減損させるのも、悪魔的なイザベルの導きがあつてこそである。こうしてピエールを操るイザベルによる復讐が実行に移されるのである。

ピエールは一人考え事に耽るとき、何時バランスを失い崩れてもおかしくない岩のすき間に寝そべることにしている。だが異母姉の存在を知った後のピエールは、ヤコブのように石を枕にして眠りに陥ることはなく、ヤコブのように夢のなかで神のお告げを聞くこともない。作品『ピエール』

の岩はメモノン (Memnon) の岩だと名付けられている。メモノンはギリシャ神話に登場する曙の女神エオス (Eos) の息子でエジプト王のメモノンに由来するが、エジプトにある実際のメモノンの岩からは、メモノンの呻き声にも似た風音が聞こえたという。しかしながらピエールが聞いたのはヤコブが夢で聞いたような神によるお告げの声ではなく、神に挑戦状を突きつけるような自分自身の声であった——「啞者たる巨石よ、私の上に落ちて来るがよい！……お前が押しつぶすにふさわしい人間は、今ここに寝そべってお前を挑発するこの私を措いて他に誰がいようか？ (“[D]o thou, Mute Massiveness, fall on me! … [F]or whom better canst thou crash than him who now lies here invoking thee?” (p. 134))」ピエールの姿は旧約聖書のヤコブとは真逆であって、神に対する不遜な態度を隠そうとはしないピエールをここに見ることができる。『ピエール』は、聖書的な兄弟間の確執物語から微妙な「ずれ」を見せているのである。しかし、この「ずれ」もイザベルによる作為があってこそ話である。メモノンの岩の下で神に挑戦状を叩きつけたのも、イザベルがピエールの目を見開かせることで、それまで「神」と同一視されていた「父」を彼岸の高みの位置から引きずり降ろし、「父」の現実的（此岸的）形象をピエールに認識させた結果に他ならない。ピエールが許嫁のルーシー・タータン (Lucy Tartan) に自分の口から結婚を申し込むため、タータン家の回転戸に手をかけようとしたまさにその瞬間を狙って、イザベルは人を介して自分の手紙をピエールに届ける。手紙でイザベルは異母姉としての素性を明かし、ピエールとルーシーとの結婚を破談させる。こうしてイザベルは家族という神聖空間を呪うのである。神に祝福され子孫繁栄を約束されたヤコブとは対照的に、イザベルに呪われたピエールはグレンディニング家を断絶させてしまうのである。

結語の試み

ハラウェイ的な「状況に置かれた知」をセルフ・オリエンタリズムの形で体现する異邦人イザベルは、戦略として悪魔性を纏い、「前一言語的（前—象徴的）」な「（非—）コミュニケーション」手段に訴えることで、異母弟ピエールの理性を混乱させ、疑似父権的家族を崩壊に導いた。本稿では聖書に散見される兄弟間の「父」の愛をめぐる葛藤が『ピエール』に於いて見出せることを確認したわけだが、聖書で言及されるはずの「救い」を作品に読み込むことは難しい。いや逆に言うと、そこに特異なメルヴィルの姿勢を垣間見ることができはしないだろうか。つまり、兄弟間の葛藤とは、俗人にははかりがたい父（なる神）の「偏愛」の成す業ゆえであるから諦めよとするユダヤ的な——こう言ってよければピューリタンのな——達観に至ることで、事の終息を見たくないとする、メルヴィルの反逆的な姿勢は、ピエールを操ることでグレンディング家を破滅に至らしたイザベルの悪魔性に確認できはしまいか。

そもそも、『ピエール』の一年前に発表した『白鯨』でも、「神」対「人間」、つまり「ピューリタニズムの神の化身である白鯨」対「人間の代表エイハブ船長」をテーマ（のひとつ）としたため、メルヴィルは悪魔的だと危険視されるようになっていた。その一年後の『ピエール』も、『白鯨』同様に売れなかった。おそらく、『ピエール』に見られるような兄弟間の争いは、ピューリタニズムという父権制が揺らぎを隠せなくなる 19 世紀アメリカに於いて、中産階級（中・上流階級）が「家庭の楽園（Domestic Eden）」として築きあげた女性中心の核家族が誘発した派生現象であろうことが推察されるのだが、当時の読者層を形成してた女性達——厳格な父権的ピューリタニズムに代わって福音主義を支持するようになった中産階級の女性達——には、このテーマは受けがよくなかった。

このような『ピエール』の発表前後をめぐる受け手側の状況に思いをめぐらせると、中産階級女性達と福音主義に対するメルヴィルの姿勢を明ら

かにすることが、作品理解のうえで重なる鍵となるように思われる。残念ながら、今回については紙幅が尽きたため、この課題については別の機会に譲って論じることとしたい。

Notes

- 1 本稿はサイコナリティカル英文学会第44回大会(2017年10月21日)の発表原稿に加筆修正を施したものである。引用は *Pierre; or, The Ambiguities* (Evanston, Ill.: Northwestern UP; Chicago: The Newberry Library, 1971) からとし、該当箇所は本文中に括弧内で示す。
- 2 『ピエール』のメインプロットに於けるエディプス的問題については以下の拙論で検討した。「メルヴィルのメタフィクション『ピエール』——偽りのキリスト、ダーク・マザー、ホーソーン——」『サイコナリティカル英文学論叢』31(2011.3): pp. 71-93.
- 3 “Ahab,” *Bible Study Tools*, <https://www.biblestudytools.com/dictionary/ahab/> (2017年8月10日) には Ahab の項目に “father’s brother” と記載されている。
- 4 以下を参照。Philip Young, *The Private Melville* (The Pennsylvania State UP, 1993); Hennig Cohen and Donald Yannella, *Herman Melville’s Malcolm Letter: “Man’s Final Lore,”* (New York: Fordham UP and The New York Public Library, 1992).
- 5 James Adamson, *Melville, Shame, and the Evil Eye: A Psychological Reading* (Albany: State U of New York P, 1997). 参照。
- 6 エドワード・W. サイド(『オリエンタリズム』 訳 今沢紀子(平凡社、1986))によれば、帝国主義時代にあつて従属者の位置に置かれたオリエントの者達は、事実上、自らを表現する権利を奪われていたという。
- 7 身体を持たないことを許されない女性として具現化された他者(embodied others)は、「歴史的偶発性」(365)を重視し、「どこにも位置を確定することができず、したがって無責任であるような… [形而上学的] 知の主張に対して反論する」とするダナ・ハラウェイ(『猿と女とサイボーグ——自然の再発明——』 訳 高橋さきの(青土社、2000))に従えば、イザベルはまさにハラウェイ的なフェミニズムを実践している。
- 8 クリステヴァは、父親的、言語的なるものと対蹠的な前言語的活動を「おぞ

ましきもの (Abjection)』としてカテゴライズし、そのような前言語的活動と、母親 (女性) 的、生命活動にかかわる摂食排泄行為なるものが連動することを指摘している。ジュリア・クリステヴァ、『外国人：我らの内なるもの』訳池田和子 (法政大学出版局、1990) 参照。

- 9 Michael Paul Rogin, *Subversive Genealogy: The Politics and Art of Herman Melville* (Berkeley: U of California, 1979), p. 169.
- 10 たとえば、ワイナウアー (Weinauer) は、悪魔的イザベルをゴシック的怪物と捉え、ピエールを混乱に陥れていると分析する。Ellen Weinauer, “Women, Ownership, and Gothic in *Pierre*,” *Melville and Women* eds., Elizabeth Schultz and Haskell Springer (Kent: Kent State UP, 2006), pp. 149-50.
- 11 Adamson, *op.cit.*, p. 46.
- 12 須藤調任 編『フロイト全集 17——1919-22年 不気味なもの、快原理の彼岸、集団心理学』(岩波書店、2006) p. 147.
- 13 「あぶれ者」なる表現については、日本ナサニエル・ホーソーン協会の岩田強氏の訳されたエリクソンによる著作『あぶれピューリタン逸脱の社会学』(現代人文社、1991) のタイトルから借用した。
- 14 Merton M. Sealts, Jr., *Melville's Reading: A Check-list of Books Owned and Borrowed* (Madison, U of Wisconsin P, 1966) を参照。
- 15 Eric J. Sundquist, *Home as Found: Authority and Genealogy in Nineteenth-Century American Literature* (Baltimore: Johns Hopkins UP, 1979), pp. 170-71.

Alice の悲劇性

—— “Adventure” の精神分析的考察 ——

平 恵理子

I. 序論

Sherwood Anderson (1876 - 1941) は、馬具製造業者の Irwin Anderson と Emma Anderson との間で、第三子として、9月13日に、Ohio 州の Camden で生まれた。手工業から機械工業へと移行していくその当時の社会状況の中で、物品が量産できるようになり、やがて他の人間を蓄財や立身出世のためにのみ利用することが、まるで自然であるかのように考えるようになった。

Anderson は、人間の他者を思い遣る気持ちが衰微し、やがては弱者に対する優しさや労りや愛を湛えた人間性が失われてしまうのではないかという危惧を覚えた。故に、Anderson は作品の中で、主人公が物質的な裕福さよりも精神的な安らぎを求めて、所謂、人間性の回復を求めて精一杯に生きていく素朴な人間の姿を写し出そうとしたのである。

今回の論文では、Anderson 文学の縮図とも言える作品 *Winesburg, Ohio* (1919) を取り扱う予定である。“Winesburg” という町は、Anderson が育った Clyde という町がモデルになっていて、Ohio 州内の架空の町であるというのが定説になっている。しかし、実は現実に存在する町である。¹

Winesburg, Ohio は 1919 年 3 月に出版されて、その 3 ヶ月後に Anderson 自身が Winesburg という町が実際に現存していることを知ったようである。即ち、Anderson が Ben Huebsch に宛てた 1919 年 6 月 14 日付の “Here is an interesting development. There is a Wineburg [sin] , Ohio. I’ll stay out of that town.”² という手紙がそれを証明している。因みに、Ohio 州の Winesburg という町は Clyde から 75 マイル、Elyria から 50 マイル離れた

ところに存在している。³

Winesburg, Ohio は 22 編の短編から構成された短編集であるが、同時に 1 編の長編小説として捉えることも可能で、つまり長編小説と考えるならば、その主人公は George Willard という青年である。しかし、当然ながら、それぞれの短編にはそれぞれの主人公がいる。そこで、今回の論文では、*Winesburg, Ohio* の中の 1 短編 “Adventure” に焦点を絞り、考察したい。この短編を選んだ理由は、他の短編との繋がりがなく、内容的にも独立した物語であるから。主人公の Alice Hindman が知らず知らずのうちに悲劇に陥っていくという物語である。彼女の悲劇の原因を探るために、彼女を精神分析学的に考察し、彼女の人間性に触れたい。

II. “Adventure”の粗筋

物語の粗筋を述べるにあたり、「II. “Adventure”の粗筋」と「III. 分析」との関係を理解しやすくするために、それぞれを ①～⑥のステージに分けて、それぞれの整合性を図ることが出来るようにしている。

① Alice Hindman は生まれてからずっとワインズバーグに住んでいて、現在 27 歳の女性である。Winney 衣料品店に勤めていて、再婚した母親と同じ家で暮らしていた。義理の父親は馬車塗装職人で酒飲みであった。

彼女は 16 歳の時に、Ned Currie という年上の青年に出会い恋仲になった。Ned は殆ど毎晩のように Alice に会いに来た。二人は連れ立って街路樹を散歩し、将来のことを何かと話し合った。Ned は、*Winesburg Eagle* 新聞社に雇われていた。しかし、Alice が 16 歳の年の晩秋に、Ned が都会の新聞社に職を変えて立身出世をしようと Cleveland に行ったとき、彼女も一緒に行きたいと思った。震える声で、彼女は自分の希望を彼に訴えた。

Alice の Ned に対する一途に思い詰めた大胆な態度に、Ned は戸惑いながらも非常に感動した。今までは、単に体の関係を結びたいと思っていた彼であったが、気持ちが変わって、彼女を保護し、面倒を見てやりたいと

思った。

⑧都会での新しい生活を始めるためにワインズバーグを去る前日に、Ned は Alice を訪ねた。彼らは1時間ほどあちこち通りを歩き回り、それから貸馬車屋で馬車を借りて、町の外へ出かけていった。月が昇り、二人は悲しくて口もきけなかった。そして Ned は Alice の扱いについて前に決めていたこと、即ち「今までは、彼女と単に体の関係を結びたいと思っていたのであるが、今後は彼女を保護し、面倒を見てやりたい」と、思っていたことを忘れてしまった。

長い牧草地がワイン・クリークの岸に向かってなだらかに傾斜したところで彼らは馬車を降り、仄明るい場所で愛の営みをした。(They got out of the buggy at a place where a long meadow ran down to the bank of Wine Creek and there in the dim light became lovers.)⁴ 真夜中に町に戻ってきたとき、二人とも心が弾んでいた。将来たとえどんなことが起こっても、先ほどの出来事の素晴らしさと美しさを消し去ってしまう様なことは、絶対に起こらないだろうと、二人には思えた。Ned は Alice と別れ際に、“Now we will have to stick to each other, whatever happens we will have to do that.” (p. 97) と言った。

⑨ Ned はクリーヴランドの新聞社に就職することが出来ずに、西のシカゴに行った。しばらくは寂しくて、毎日のように Alice に手紙を書いた。しかし、やがて都会の生活の虜になってしまい、友達も出来て、下宿先にいた女性の一人に気を惹かれ、ワインズバーグにいる Alice のことを忘れてしまった。1年たった頃には、手紙も出さなくなった。たまたま、もの寂しくなったときや、公園に散歩に出かけたときに、あの晩ワイン・クリークの牧草地で Alice と肉体的にも結ばれた時のような月の光が芝生を照らしている時などに、ふと Alice のことを考えるだけであった。

⑩一方、Alice は22歳になった。それまで専業主婦だった母親が父親の死去により働き始めると、それと同時に Alice は Winney 衣料品店に勤め

るようになった。それから何年かが経ったが、彼女は Ned が結局自分のもとへ戻って来ないだろうなどと思ったことは一度もなかった。勤め口があったことが彼女にはとても嬉しかった。毎日、店で忙しくしていれば Ned の帰りを待つことの長さや辛さが少しは和らげられるからだった。長時間働くことを厭わず、2、300 ドル貯まったら Ned に会いに行きたいという目的で貯金を始めた。そのうちに、欲しい服も我慢して買わずに、儉約し貯金をすることが癖になってしまった。

Alice は他の男性からの誘いも問題にしなかった。“I am his wife and shall remain his wife whether he comes back or not.” (p. 98) と彼女は独り言を言うのであった。だんだん年をとっていく Alice の胸の内に “We will have to stick to each other now.” (p.99) という Ned の言葉が繰り返し木霊した。この頃から Alice は年をとるとともに少しずつ Ned に欺かれたのではないかという気持ちと、孤独に怯え始めた。しかし、Alice は Ned を責める気はなかった。何を責めて良いのやらわからなかった。悲しみでうちひしがれてしまった。彼女は祈ろうとしたが、口から出るのは祈りではなくて抗議の言葉だった。「私の願いなど叶えられるはずはない。私は幸福には絶対になれそうにない。自分に対して嘘をついてみたって仕方ない」 (“It is not going to come to me. I will never find happiness. Why do I tell myself lies?” (p. 100))

⑤ Alice が 25 歳になった年に、彼女の母親がワインズバーグの馬車塗装職人と再婚したために、彼女は人生の孤独に一層怯え、ワインズバーグ・メソヂスト教会の一員になった。やがて、Alice はやはりその教会に属していて、薬屋に勤めている中年男性と知り合いになった。一緒に家まで歩いて帰りたいと申し込まれたとき、彼女は断らなかった。“Of course I will not let him make a practice of being with me, but if he comes to see me once in a long time there can be no harm in that.” (p. 101) Ned に操を立てるつもりでいた彼女はそう自分に言い聞かせた。

Alice は自分の身に何が起きようとしているのかわからなかったために、初めはおずおずと、だが、決心を固めて、今までとは違った態度で人生に対処しようとしていた。彼女は黙ったまま、薬局の店員と歩いた。しかし、暗い場所をゆっくり歩いているときなど、手を伸ばして、男の上着のひだにそっと触った。家に帰り着いても、彼女は薬局の店員と直ぐに別れたくなかった。彼を呼び戻して家の前の暗いポーチで一緒に座っていてくるように頼みたい気持ちであった。しかし、彼女は思い直した。“It is not him that I want. I want to avoid being so much alone. If I am not careful I will grow unaccustomed to being with people.” (p. 101) と、彼女はこれからの人生を如何に過ごせば良いのか不安を募らせるのであった。

Ned がワインズバーグを去ってから、ついに 11 年の歳月が経ち、Alice は 27 歳になった。その年の初秋に、Alice はどうしようもないくらい不安な気分におそわれた。薬局の店員と会うのが耐えられなくなって、ある晩、散歩に誘いにきてくれた彼を追い返してしまった。

㊦ある雨の夜、Alice は仕事から帰宅すると、突然裸になって外に飛び出したい衝動に駆られ、一つの冒険をした。その時彼女は、相手は誰でもいい、Ned 以外の男性に身を任せたいと思いつめて、歩道をおぼつかない足取りで歩いて行く男に声をかけた。ところがその男は老人で、耳が遠い様子で「何でしょうか？何とおっしゃいましたか？」という声に、Alice は我に返り、崩れるように地面に倒れた。自分の犯したことに気がついて動揺したあまり、その男が行ってしまっても、起き上がる勇気もなかった。Alice は、這うようにして部屋に戻ると鍵をかけ、なおその上に鏡台を引きずってきて戸口をふさいだ。ベッドに入り枕に顔を埋めて泣いた。このワインズバーグにおいてさえも、多くの人々は一人で生きて、一人で死んでいかなければならないのだという事実、自分を果敢に直面させようとした。短編“Adventure”は、ここで終わっている。

Ⅲ. 分析

①の部分は、この短編の導入部である。主人公 Alice Hindman は現在 27 歳であるが、如何なる人物であるかをもう少し具体的に見てみよう。

Alice Hindman, a woman of twenty-seven when George Willard was a mere boy, had lived in Winesburg all her life. She clerked in Winney's Dry Goods Store and lived with her mother, who had married a second husband.

Alice's step-father was a carriage painter, and given to drink. His story is an odd one. It will be worth telling some day.

At twenty-seven Alice was tall and somewhat slight. Her head was large and overshadowed her body. Her shoulders were a little stooped and her hair and eyes brown. She was very quiet but beneath a placid exterior a continual ferment went on. (p. 95)

Alice の異様な風貌描写によって、これから始まる物語には、読者にサスペンスを与える仕掛けが窺える。物語の主人公 Alice は 27 歳で、Winney 衣料品店に勤めている。彼女はとてもおとなしく物静かな女性であるが、心はいつも激しく波立っていたという描写がある。ところが、次の段落は、いきなり Alice の年齢が 16 歳まで遡っている。

When she was a girl of sixteen and before she began to work in the store, Alice had an affair with a young man. The young man, named Ned Currie, was older than Alice. (p. 95)

Alice は現在 27 歳であるが、Cut-back の手法で、16 歳まで遡って、彼女の少女時代から現在までが Chronological order に語られる、所謂 Form

of Retrospection の物語である。この作品で取り扱われた Time Span は 11 年間という長い期間である。

上記に引用した ‘She was very quiet but beneath a placid exterior a continual ferment went on.’ から、この物語の語り手は、物語の外側にありながら、登場人物の心を見通して述べていることがわかる。即ち、Omniscient Point of View（全知の視点）という手法によって語られている。故に、Ned の言動のみならず、内面をも読者に知らせることが出来るのである。

ところで、27 歳の Alice は、「背が高くて、どちらかという痩せているほうだった。身体の割に頭が大きかった。ちょっと猫背で、髪と眼は茶色だった。とても物静かな女だったが、そのおとなしい外面の下では、心がいつも波立っていた」のである。この一節から推測可能なことは、27 歳になった Alice には甘い楽しい夢は遮断されており、「おとなしい外面の下では、心がいつも波立っていた」のは、むしろ「全ての軽快な楽しい夢や幸せを諦めてしまっはいるが、心の奥底では、こんな筈ではなかった、幸せを掴みたい、寂しい、やりきれない、この場所から抜け出したい」という感情が満ち溢れているようである。しかし、Cut-back の手法で、16 歳まで遡った Alice を見ると、「その頃の Alice はとても可愛い少女だったので、Ned Currie は抱きしめてキスをした」と、ある。16 歳の Alice には甘い楽しい夢がある。Alice が 16 歳の年の晩秋に、Ned が都会の新聞社に職を変えて立身出世をしようと Cleveland に行ったとき、彼女も一緒に行きたいと一生懸命に彼に懇願する。

“I will work and you can work, … I do not want to harness you to a needless expense that will prevent your making progress. Don’t marry me now. We will get along without that and we can be together. Even though we live in the same house no one will say anything. In the city we will be unknown and people will pay no attention to us.” (p. 96)

世間知らずで、無鉄砲で、純粋な愛一筋に生きようとする Alice の一途な気持ちに、Ned は感動した。

Ned Currie was puzzled by the determination and abandon of his sweetheart and was also deeply touched. He had wanted the girl to become his mistress but changed his mind. He wanted to protect and care for her. (p. 96)

しかし、それまでは、体の関係を結びたいと思っていたことは事実であり、彼は単に自分の carnal desire を満たしたいだけであった。これは一種の性的倒錯 (sexual perversion) である。しかし、彼は恋人の思い詰めた大胆な態度に困惑しながらも、ひどく感激して、気持ちが変わったのである。彼女に対して carnal desire を満たすという感情を抑制 (suppression) し、彼女を保護したいと思ったのである。そして、彼は職を見つけ次第戻ってくるので、それまでワインズバーグで待っているように恋人を説得するのである。

“You don’t know what you’re talking about, … You may be sure I’ll let you do no such thing. As soon as I get a good job I’ll come back. For the present you’ll have to stay here. It’s the only thing we can do.” (p. 96)

⑧の部分は、Ned がワインズバーグを去る前の晩に Alice を訪ね、貸馬車屋で馬車を借りて、町の外へ出かけていった。翌日は離ればなれになってしまうことを考えると寂しさと悲しみが込み上げてきて口もきけないほどであった。月明かりの中で Alice と Ned は肉体的にも結ばれたのである。

Ned は Alice を恋人として大事に思っているが故に、体の関係を結びた

いという感情を抑制 (suppression) し、彼女を保護したいという気持ちになった筈であるのに、肉体的にも結ばれてしまったのである。彼が彼女と体の関係を結びたいという感情を抑圧 (repression) したわけではないので、当然の成り行きと言わねばならない。肉体的にも結ばれたことによって、二人の間は更に強い絆で結ばれたと感ずるのである。

It did not seem to them that anything that could happen in the future could blot out the wonder and beauty of the thing that had happened. “Now we will have to stick to each other, whatever happens we will have to do that.”
(p. 97)

今後何が起きようと二人は絶対に離れてはいけぬ、と彼は彼女に明言する。

㊦の部分では、Ned がクリーヴランドで職がなく、シカゴに行くことになる。寂しくて、毎日のように Alice に手紙を書いていたが、そのうちに都会での生活に慣れてしまい、下宿先で知り合った女性に心を奪われてしまった、ということが読者に報告される。

㊧の部分では、Alice の生活状況や彼女の内面が描写されている。

Alice が 22 歳になり、Winney 衣料品店に勤めることになった。Ned がワインズバーグを離れて、既に 6 年になるが、彼女は彼を信じて彼の帰りを待ち続けている。早朝から夜遅くまで働き、2、300 ドル貯まったら彼に会いに行こうという決意をし、貯金を始めるが、彼からは音信不通であるために彼の本心もつかめず、やがて貯金が癖になり、何か欲しいものがあったら買わずに貯金をするようになってしまったのである。

Alice を精神分析的に見ると、典型的な Anal character の持ち主であることに気付く。*Encyclopedia of Psychology* によると、Anal stage については、次の通りである。

According to Freud, the phase of child development in which the expulsion of feces and the manipulation of the child's own body are of primary interest. On average, the anal stage includes the second and third years of age. In the early part of the stage, the interests of the oral stage are increased by interest in locomotion, and in bodily and manual activity. Among the physical activities is defecation, a function that a child at first performs relatively without control, and on impulse. In social relations, the power aspects of his parents and his own power begin to be perceived and exercised in an all-or-nothing form. In the later anal stage, locomotion and body and hand movements are refined. Defecation comes under the control of the child himself and of his parents. A distinction is made between the exercise of power toward the child's parents, and the perception of their power. In this stage, the child learns to work, to cooperate, to emulate, and to resist. According to Freud, K. Abraham, and Fenichel, regression to the early anal stage can lead to paranoia, masochistic perversions and pregenital conversion neuroses, and fixation; and later regression to the late anal stage can lead to compulsive neuroses, sadistic perversions, and milder forms of pregenital conversion neuroses. Instead of specific neurotic symptoms, a certain deformation of personality – the“anal character” – can result. Freud includes pedantry, stinginess and frugality among the characteristics of this disordered personality.⁵

Sigmund Freud や Karl Abraham や Ott Fenichel によると、性格形成や精神疾患は Pregenital stage の Anal stage への定着と大きく関連している。大人の几帳面、儉約、吝嗇、物事へのこだわりなどの執着的な性格の特徴は、Anal stage における幼児期の排便・排尿に対する両親の躰と関係がある。

即ち、Libido が Anal stage に定着するという事は、糞便や尿を保持する快感への固着を意味しており、「糞便や尿」と「‘儉約’や‘貯蓄’や‘対象を失うのではないかという恐れや不安’」との無意識的な同一視がみられるのである。

具体的に Alice に焦点を当てて見てみよう。

She became attached to inanimate objects, and because it was her own, could not bear to have anyone touch the furniture of her room. The trick of saving money, begun for a purpose, was carried on after the scheme of going to the city to find Ned Currie had been given up. It became a fixed habit, and when she needed new clothes she did not get them. Sometimes on rainy afternoons in the store she got out her bank book and, letting it lie open before her, spent hours dreaming impossible dreams of saving money enough so that the interest would support both herself and her future husband. (p. 98)

Alice は無生物にも愛着を感じるようになり、自分の部屋の家具などが赤の他人によって触られることに耐えられないほど嫌であり、目的のために貯金をしていたが、やがて欲しい物も買わずに貯金をするようになり、貯金が癖になってしまったのであるが、これは取りも直さず、Alice の性的エネルギーが Pre-genital stage の Anal stage に定着している証左である。

Ned がワインズバーグを出て行く前の晩に Alice を訪ねて、馬車を借りて町の外に出かけ、月明かりの牧草地で肉体的に結ばれて、更に別れ際に Ned が Alice に言った “Now we will have to stick to each other, whatever happens we will have to do that.” (p. 97) という言葉は Alice にとっては至福を意味している。しかし、現実には Ned は Alice の側にはいないし、彼からの手紙も既に途絶えていることを考えると、Ned が Alice に言った言葉

は今では彼女を押しつぶしてしまうほどの重さでのし掛かって彼女を苦しめている。Alice が如何に彼を愛してしようとも、まるで一点の明かりもない暗闇の中で彼の実体を求めて、否幻の彼を求めて彷徨い歩いているようなものである。自分のものであれば無生物にも愛着を感じたり、蒐集欲であったり、貯金が趣味あるいは癖であるのは、明らかに彼女の特徴的な性格、所謂、肛門性格特有の几帳面さや儉約、吝嗇あるいは所有物への執着が表面化した結果である。

⑤の部分の Alice の言動を理解するためには、彼女の精神構造を見なければならぬ。彼女のエス (Id) は無意識的で常に快樂追求を望み、自我 (Ego) にその欲求の充足を迫る。然るに、無意識的な良心的自我であるところの超自我 (Super-ego) は Ned 以外の男に目を向けることを厳禁とする指令を自我に出す。そこで、自我はエスと超自我との間に立って現実を吟味し、調停に当たる。その結果、明るい昼間においては、自我は超自我の指令を認めて、Ned 以外の男には目を向けようとしない。しかし、夜の暗闇では、超自我よりもエスの方が無意識的に自我を大きく支配するために、本能的な欲望が表面化するのである。故に、Alice が 25 歳になった年に、自分の母親が再婚したために、人生の孤独に一層怯え、ワインズバーグ・メソヂスト教会の一員になったのである。Alice は薬屋に勤めている中年男性と知り合いになり、一緒に家まで歩いて帰るとき、暗い場所になると手を伸ばして、その男の上着のひだにそっと触ったりしたのである。それは、正にエスの力に屈した自我の姿である。

“It is not him that I want. I want to avoid being so much alone. If I am not careful I will grow unaccustomed to being with people.” (p. 101) と、彼女が自分に言い聞かせているのは、正にエスと超自我の間に立って苦しみや焦りや苛立ちや carnal desire に揺れ動く疲れ切った自我の姿である。

Ned に操を立てるつもりでいた彼女は、自分の内面に少しずつ変化が生じていたのである。(‘Without realizing what was happening, Alice was trying

feebly at first, but with growing determination, to get a new hold upon life.’ (p. 101)) 今までは、彼女の心には Ned の存在しかなく、彼だけを見て、彼だけを一途に愛してきたのであるが、現実には何一つ報われない己の姿に嫌気がさして、少しずつ内面が変化してきたのである。それは、言わずもがな、愛されたいという感情である。誰でも良いので誰かに、Ned 以外の男に、愛されたいという欲求である。この姿も又、エスと超自我の間で板挟みになって疲れ切った自我の姿である。

Alice は 27 歳になった。Ned を慕い、愛し続けて実に 11 年間という長い間貞節を守り、他の男に見向きもしなかったのは、Alice にとって Ned がそれ程素晴らしい男であったかということ、それは全く違う。これは、彼女のリビドーが *Pregenital stage* の *Anal stage* に定着していることによって形成された *Anal character* によるものである。即ち、Alice には肛門性格特有の固着欲求あるいは固執傾向があるからであろう。普通に考えれば、女性の愛を簡単に踏みにじった男がいたとした場合、彼女は彼を憎み、早く忘れてしまいたい筈である。しかし、Alice は一旦愛してしまった Ned をどんなことがあっても憎むことが出来ないという性格の持ち主であり、彼を失うことによって得体の知れない不安を予測できたが故に、彼女は彼を 11 年間も裏切らなかつたのである。不安は人間にとって普遍的な避けることが出来ない心理現象で、欲求不満や内的葛藤が適切に処理できないために不安が生じたのである。

㊦この作品の最終場面で、Alice は一つの「冒険」をした。

Alice と Ned は 11 年前に恋愛をしたが、彼は 1 年も経たないうちに別の女に心を奪われてしまい、Alice のことを忘れてしまったのである。しかし、Alice は 11 年間という長きに亘り、Ned を愛し続けているのである。Alice は *Anal character* の持ち主であるが故に Ned への執着心が強くて、欲求不満や内的葛藤から、自らを即ち己の心身を、解放させられなかつたのである。

Sherwood Anderson は「冒険」の中で Alice という女性の悲劇性を露わに表現しているのので、引用させていただく。但し、少し長くなるので、三つの段落に分けて、彼女の精神構造をみる手筈である。

And then one night when it rained Alice had an adventure. It frightened and confused her. She had come home from the store at nine and she found the house empty. Bush Milton had gone off to town and her mother to the house of a neighbor. Alice went upstairs to her room and undressed in the darkness. For a moment she stood by the window hearing the rain beat against the glass and then a strange desire took possession of her. Without stopping to think of what she intended to do, she ran downstairs through the dark house and out into the rain. As she stood on the little grass plot before the house and felt the cold rain on her body a mad desire to run naked through the streets took possession of her.

Winney 衣料品店で働いている時の Alice の精神構造は、超自我の支配下であり、自我は非常に常識的な言動をしている。しかし、夜の9時に店を出て家路につく頃になると、エスが頭をもたげてきて自我と超自我との間に割って入り葛藤が始まる。母親も継父も外出して家には誰もいなかったことが Alice の寂しさを助長させ、carnal desire への感情を増幅させたのであるが、ここには正に自我を我が物顔で支配するエスの存在がある。

She thought that the rain would have some creative and wonderful effect on her body. Not for years had she felt so full of youth and courage. She wanted to leap and run, to cry out, to find some other lonely human and embrace him. On the brick sidewalk before the house a man stumbled homeward. Alice started to run. A wild, desperate mood took possession

of her. “What do I care who it is. He is alone, and I will go to him,” she thought; and then without stopping to consider the possible result of her madness, called softly. “Wait!” she cried. “Don’t go away. Whoever you are, you must wait.”

Alice は Ned だけを愛し続けて、11 年という長い間貞節を守ってきたのだが、初秋の雨の中を裸のままで町の通りを駆け抜けたという欲情がこみ上げてきたのは、取りも直さずエスの力である。裸になって、暗闇の中で、Alice は見知らぬ男に “Wait! Don’t go away. Whoever you are, you must wait.” と、声をかけたのであるが、これは、彼女のエスの力によるものである。

The man on the sidewalk stopped and stood listening. He was an old man and somewhat deaf. Putting his hand to his mouth, he shouted. “What? What say?” he called.

Alice dropped to the ground and lay trembling. She was so frightened at the thought of what she had done that when the man had gone on his way she did not dare get to her feet, but crawled on hands and knees through the grass to the house. When she got to her own room she bolted the door and drew her dressing table across the doorway. Her body shook as with a chill and her hands trembled so that she had difficulty getting into her nightdress. When she got into bed she buried her face in the pillow and wept brokenheartedly. “What is the matter with me? I will do something dreadful if I am not careful,” she thought, and turning her face to the wall, began trying to force herself to face bravely the fact that many people must live and die alone, even in Winesburg.”

(p. 102-3)

その男に“*What? What say?*”と聞き返されて、彼女は我に返ったのである。即ち、彼女の自我はエスの支配から超自我のそれに転換したのである。彼女は這うようにしてやっと帰り着き、ベッドに入り、枕に頭を沈めて泣くのであるが、その姿こそ強力なエスと超自我との間で板挟みになって苦しみ、疲れ切った哀れな自我の姿である。

Alice の悲劇は、彼女が Ned と恋愛をしたことに端を発する。しかし、少なくとも、彼らが肉体的にも結ばれた時から約 1 年間は彼からの手紙に支えられて、彼女は至福の境地であった筈である。こうした彼女の幸福が、知らず知らずのうちに、悲劇へと落ちて行ったのである。

この短編の冒頭で、現在 27 歳の Alice はとてもおとなしく物静かな女性であるが、心はいつも激しく波立っていた (*She was very quiet but beneath a placid exterior a continual ferment went on.*)、とあるが、「心はいつも激しく波立っていた」のは、彼女が仕事に追われていたからでもなければ、また密かに人生に生き甲斐を感じていたからでもない。これは、愛を、しかも異性の愛を求めて止まない彼女の精神構造における強力なエスの存在によるものである。エスの欲求に対して、Ned 以外の男性の愛を拒絶する超自我の力によって、辛うじて平静を保っている自我の姿である。

これは、まるで、Thomas Hardy (1840-1928) の *Tess of the D'Urbervilles* の主人公 Tess が知らず知らずのうちに悲劇に陥っていくのと同じように、“Adventure” の主人公 Alice もまた時が経つにつれて少しずつ悲劇へと近づくのである。Alice に視点を置くと、ここに典型的な対象喪失 (object loss) があることに気づくのである。

小此木啓吾氏は、対象喪失とは端的に、近親者の死や失恋を始めとする、愛情、依存の対象の死や別離を指し示すとし、その著書『対象喪失』で次のように述べている。

とりわけ男性と女性の愛情関係は、別れという結末を告げる途上で、

この種のお互いの内的な対象喪失体験が積み重なって、最後に外的な人間関係としての別れを迎える。その心理過程でお互いのあいだに、愛と憎しみの情が、複雑に入り混じったアンビバレンスに苦しむ体験がくり返される。⁶

また、悲哀の作業について、同氏は次のように述べている。

「悲哀」とは、愛する対象を失うことによってひきおこされる一連の心理過程のことである。フロイトは、相手を失ってしまったと言う事実を、知的に認識することと、失った相手を心からあきらめ、情緒的にも断念できるようになることとは、決して同じではないという。もはや相手がいなくなってしまった、いくら会おうと思っても会うことができない。このことは、頭ではよくわかっている。しかし、どうしても会いたいという思慕の情は、決してわかっただけで消えるものではない。そしてまたその対象が自分にとって大切なものであればあるほど、その対象に依存していれば依存しているほど、われわれはそれを失った苦痛に耐えることができない。それはなにかのまちがいだ、そんなことはありっこないという、現実否認の気持も強くなる。あるいはまた、まだどこかに生きているのではないか、もう一度探し出せるのではないか、なんとかして取り戻したい、という気持にかられて、さまざまな空しい努力を企てる。それでも無駄だとわかると、どうして行ってしまったのかと、自分を見棄てた対象をうらんだり、責めたりする気持にもなる。なんとかして対象を失うまいとするこれらの様々な情緒体験の中で、最終的には、対象を取り戻そうとする試みが不毛であり、自分にはとてもそれは不可能だと心からわかるとき、激しい絶望が襲い、すべてを投げ出した悲嘆の状態に陥る。⁷

Ned は既に、10 年も前に Alice のことを忘れてしまっていて、Alice の方も、自分の所には彼は戻ってこないだろう、と思いながらも、彼女の心の中では彼に対する思慕の情が脈々と募っているのである。Alice は一体いつになったら彼を忘れられるのか、そして彼以外の男性を心身ともに愛する日がやってくるのであろうか、誰にもその回答はわからない。彼女は対象喪失を噛みしめながら、これから先の人生を歩んでいくのであろう。

IV. 結論

11 年前に Alice と Ned は恋愛をしたが、彼が立身出世を夢見て都会に行くことになる。出発の前の晩に二人は肉体的にも結ばれたのである。“Now we will have to stick to each other, whatever happens we will have to do that.” (p. 97) と、彼は彼女に言ったが、1 年経った頃には、彼は都会の生活に慣れてきて、同じ下宿先の女性と親しくなってしまう、Alice のことを思い出すことも殆ど無くなってしまったのである。何週間かが、そして何ヶ月、何年かが、あっという間に経ち、11 年間も過ぎてしまったのである。Alice は Ned がもはや自分のところに戻っては来ないだろう、と思いはするが、憎むことも恨むことも出来ずに、寂しさに耐えきれずにいるのである。Alice が Ned を忘れられないのは、彼がそれほどに素晴らしいからではなく、単に彼女の性格に起因していることに他ならない。所謂、Alice の Libido、即ち、性的エネルギーが Pre genital stage の Anal stage に定着しているからであり、故に Anal character の持ち主であるからである。

Ned が仮に都会での生活に憧れることもなく立身出世を夢見るような男でなかったならば、Alice の人生はどのようなものであったらうか。彼女の性格は Anal character であるために、おそらく良妻賢母として楽しく人生を全う出来る可能性大であったと思われる。しかし、現実は然に非ず、Michigan State University で American Thought and Language を教え *Louis Bromfield, Critical Studies in American Literature* の著者でもある David

D. Anderson は、いみじくも次のように述べている。

Alice Hindman, of “Adventure,” finds nothing. Desperately wanting to love another lost being like herself, she runs naked into the rain, humiliates herself, and finally realizes that she, like so many others, must live and die alone in Winesburg.⁸

初秋の夜の暗がりの雨の中を裸になって通りに出て、追い詰められた悲痛な寂しさ故に、Alice が愛と carnal desire を求めて、見知らぬ男に声をかけたのである。その男は老人で少し耳が遠かったために、老人の聞き返した声に、彼女は我に返ったのである。人間は誰も一人で生まれ一人で死んで行かねばならないのだとしみじみと悟ったのである。彼女は底知れぬ孤独感を覚えたのである。

Alice を描くにあたり、Sherwood Anderson 自身の母親の面影 (Imago) が影響しているようである。不平ひとつ言わずに洗濯の賃仕事に励み、愛情の深さと忍耐と自己犠牲を持った母親を Anderson は非常に尊敬していたのである。

一方、Ned については、Anderson の無責任な父親の姿が認められる。Ned を都会の生活に憧れさせ、立身出世を夢見させた、当時の時代背景、即ちアメリカの物質主義の金ぴか時代 (Gilded Age) こそ、Alice を悲劇に追いやった原因とみなすことも可能である。

蛇足ではあるが、“Adventure” の読者の一人として、またこの短編を論文に選んだ筆者として、願わくは、Alice が Ned を一日も早く忘れて、ワインズバーグ・メソヂスト教会の一員の男性と恋愛をし、前向きに明るく人生を送ってほしい、と願っている。

Notes

- 1 小園敏幸 『英米文学研究』第 21 号（梅光女学院大学英米文学会、昭和 60 年 12 月 25 日発行）、p. 121. 参照。
- 2 Letters, Newberry Library, 1919.
- 3 小園、*op. cit.*, p. 121.
- 4 Sherwood Anderson, *Winesburg, Ohio* (New York: The Modern Library, 1995), p. 96.
以下、同書からの引用は全てページ数を括弧に入れて本文中に記す。
- 5 *Encyclopedia of Psychology* Editors H. J. Eysenck, London and W. Arnold, Wurzburg R. Meili, Berne (London: Search Press, 1972) Volume One, p. 52.
- 6 小此木啓吾 『対象喪失』（東京：中央公論新社、2004）、p. 36.
- 7 *Ibid.*, p. 49.
- 8 David D. Anderson, *SHERWOOD ANDERSON —An Introduction and Interpretation—* (New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc. 1967) p. 46.

D・H・ロレンス『恋する女たち』を ユング心理学で読み解く（I） —「自己」の探求としての「結婚」—

森 岡 稔

はじめに

D・H・ロレンス (David Herbert Lawrence, 1885—1930) の『恋する女たち』 (*Women in Love*) は、1920年、ニューヨークで私家版の限定出版という形で出版された。そのような形で出版されたのは、戦争中であったこともあるが、出版社が出版をためらったことが主たる理由である。なぜ出版社が出版をためらったかという点、前作の『虹』 *The Rainbow* (1915) の性描写が問題とされて発禁処分となっていたからである。『恋する女たち』は『虹』の続編ともされ、ブラングエン家 (The Brangwens) の二人の姉妹、グドルーン (Gudrun Brangwen) とアーシュラ (Ursula Brangwen) のそれぞれの恋愛を描いている。グドルーンの相手は、炭鉱王のジェラルド・クリッチ (Gerald Crich) であり、アーシュラの相手は、視学官のルパート・バーキン (Rupert Birkin) である。¹ ロレンスはこの二組の関係を描くことによって、「自己」² から疎外された「自我」を浮き彫りにしている。また二組の関係に加えてルパートとジェラルドの男性同士の精神的・肉体的な結びつきも描き出している。³ 登場人物の人物造形は、アーシュラは、ロレンスの妻のフリーダ (Frieda) を、グドルーンは、キャサリン・マンフィールド (Katherine Mansfield) を、バーキンはロレンスを、ジェラルドはマンスフィールドの夫、ジョン・ミドルトン・マリー (John Middleton Murry) をモデルにしていると考えられる。⁴

この論考は、登場人物たちがユングの「個性化理論」の中の人生のゴー

ルである「自己」に向かって自己実現していくことに成功あるいは失敗していく過程を考察するものであるが、論考の大部分は、二組の男女の関係に現れる「アニマ」・「アニムス」⁵のあり方を中心に論じていくものである。この論考はユングの基礎的な理論を紹介するのに紙面を費やしたため、紙面の都合で全31章中、第3章までを考察する。

1. C.G. ユングと D・H・ロレンス

1.1. ロレンスはユングに影響を受けたのか

D・H・ロレンスは、はたして C.G. ユング (Carl Gustav Jung, 1875—1961) の思想に影響を受けたのだろうか。これまでユング心理学を使ってロレンスの作品を読み解く試みは見当たらない。ところが、「自己」・「自我」・「アニマ」・「アニムス」といった心の元型的内容が「生」の推進力となっているというユングの考え方が、ロレンスのそれと極めて類似していることに驚かされる。したがって、ロレンスの作品をユング心理学で読み解くことは有意義であろう。これほど考え方が類似しているにもかかわらず、ロレンスとユングとの関連についての研究がなされなかったのは、ロレンスがユングの影響を受けた直接の証拠が皆無であったことにもよる。ところが、ロレンスがユングから影響を受けた明らかな証拠として、1918年、12月5日にキャサリン・マンズフィールドに送った手紙を見つけることができた。ロレンスがユングに影響を受けたと思われる数少ない証拠であるとともに、ロレンスが身近な「グレート・マザー」（ここでは、the Magna Matter と呼んでいる）について説明しているので、長い引用する。

To Katherine Mansfield, 5 December 1918

Middleton 1918 · 12 Thursday

My dear Katherine

I received your letter this morning. I want to write a few little things I

have on my mind. First, I send you the *Jung* book, borrowed from Kot⁶, in the midst of his reading it. Ask Jack not to keep it long, will you, as I feel I ought to send it back. —Beware of it—this Mother –incest idea can become an obsession. But it seems to me there is this much truth in it: that at certain periods the man has a desire and a tendency to return unto the woman, make her his goal and end, find his justification in her. In this way he casts himself as it were into her womb, and she, *the Magna Mater*, receives him with gratification. This is a kind of incest. It seems to me it is what Jack does to you, and what repels and fascinates you. I have done it, and now struggle all my might to get out. In a way, Frida is the devouring mother. It is awfully hard, once the sex relation has gone this way, to recover. If we don't recover, we die.⁷

(Italic, emphasis mine)

親愛なるキャサリン様——

わたしはあなたの手紙を今朝受け取りました。私は心に浮かんだことをいくつか書きたいと思います。まず第一に、コットが読んでいる真っ最中であるけれども、彼から借りたユングの本をお送りします。でも返さなければならぬと思っているので、あまりジャック⁸にそれを持ち続けなないようにお願いします。ここにある母親との近親相姦という考えにとりつかれないように気をつけてください。でもその中には多くの真実があると思います。ある時期になりますと、男性は女性に回帰し、女性を自分の最終目的とし、女性の中に自己正当化をはかりたいという欲望と傾向が出てくるものです。そのようにして男性は自らをいわば女性の子宮の中に投げ入れ、女性は太母（マグナ・マータ）として喜んでこれを受け入れるのです。これは一種の近親相姦です。このことこそジャックがあなたにしていることであり、それがあなたに反発し魅了するところであるように思

われます。それは僕がしてきたことであり、僕は今そこから全力で抜け出そうとしています。ある意味でフリーダは呑み込む母親です。いったん性的関係がこうした方向に進むと、元に戻すのは非常に困難です。しかし、もし私たちが元にもどさないと、我々は死ぬのです。

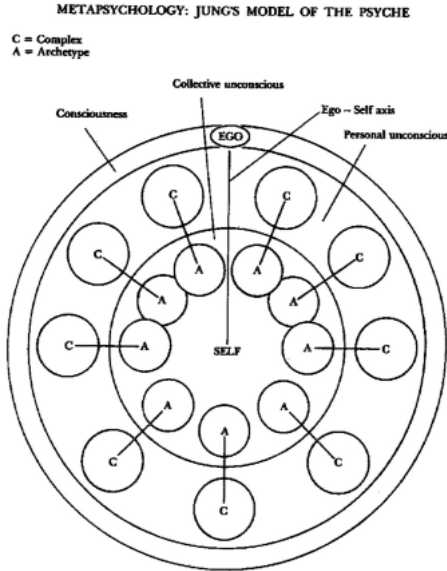
ロレンスがコット (Kot) から借りた本というのは、『恋する女たち』の出版が1920年であることや、手紙の日付が1918年であることから、時期的にはライプチヒのフランツ・ドイティケ社から1912年に出版された『リビドーの変容と象徴』だと考えられる。英訳だとすると、1916年のニューヨークから出版されたものである。⁹手紙にもあるように、『恋する女たち』の創作過程において、ロレンスが大きくユングから影響を受けたと推測される。

1.2. ロレンスがユング心理学の影響を受けて『恋する女たち』に何を盛り込んだのか

ロレンスの芸術と人生における生涯の課題は、人間の内面に「全体性＝自己」を求めることにあった。ユングが神話の中に「元型的象徴」を見出したように、ロレンスも原初的な「象徴的幻想」を月、森、水、動植物と結び付けながら作品の中で描き出している。しかし、この「集合的無意識」を源泉とする「象徴的幻想」は自然への憧憬を表す場合がある一方で、自然への憧憬とは対蹠的な現代の病理的な「破壊的要素」を表す場合もある。ロレンスは、これを得意としており、とくに現代人が本来の「生命の源」とつながりを失ってしまった様子を描き出す。人間と自然との一体的結びつきが解体してしまったのは、「生命の源」である「全体性＝自己（集合的無意識）」から「自我」（意識）が疎外されてしまったことにその要因がある。そこでロレンスは、この現代人が「生命の源」である「無意識」の

力を借りて、「自我」に栄養分を与えて「生命」を回復することを懸命に訴えるのである。

Figure 1



左の図はユングのこころのモデルである。¹⁰「自己 SELF（集合的無意識）の中心」の周りに「元型（アーキタイプ A）」があり、その周り「コンプレックス C」がある。「コンプレックス C」のある層は、「個人的無意識 Personal Unconscious」である。一番外側の「意識 (Consciousness)」の層の中にその中心の「自我 (EGO)」があり、「自我 (EGO)」と「自己 SELF」は軸で連結されている。この軸

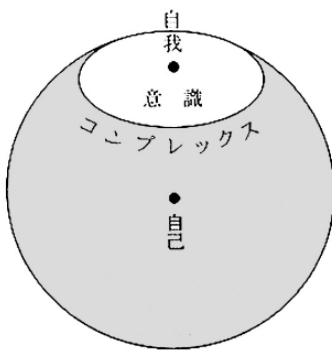
を「自我—自己軸」と呼ぶ。「集合的無意識 (Collective unconscious)」についてもう少し説明を加えなければならない。ユング派の心理学者、A・スティーヴンス (Anthony Stevens, 1933—) は次のように「集合的無意識」を説明している。

ユングは、個人的な無意識の下にはより深くより重要な層があり、後に、彼はそれを集合的無意識と呼んだが、そこには可能性として人類のすべてが含まれていると考えた。彼は分裂病の患者の妄想や幻覚を研究し、それらの中には、世界各地の神話や民話に見出されるものと同じ象徴やイメージが含まれていることを発見し、全ての

人間には共通する力強い心の基盤が存在し、その基盤の上に個人は自分の私的な人生経験を築きあげるのだと結論づけた。¹¹

上記の文は、「意識」の下の基盤に「集合的無意識」であることを説明している。人間のころには階層的に、上部に意識的な「自我 (EGO)」があり、その下に「個人的無意識」、さらにその下には「集合的無意識」があるとされている。集合的無意識の中心にある「自己 (SELF)」にむかって、意識と無意識の統合をはかるのが、「個性化」である。「自我—自己軸」というと、「自我」は、「自己」をめざすわけで、それが人生における「個性化過程」だと言える。そこで今度は、ユング心理学の「個性化」について次の図を使って詳しく説明したい。

Figure 2



左の図にあるように心の全体の中心に「自己」がある。その上層に「意識」があり、その中心に「自我」がある。ユングは、対立物である意識と無意識の相補性に注目していた。¹²我々はたえず、意識の中心の「自我」と「無意識」とのバランスをとりながら「高次の全体性」へと志向する努力をする。意識の状態が一応安定していても、あえてその安定を崩し、そ

こを起点として高い段階の統合性へと向かおうとする。「個性化過程」とは、無意識の内容を意識化しつつ、自分の「ころ」を統合して自己実現に向かうことである。したがって、人は一生の間に、無意識内容の中の「本能的な行動パターン」であるところの「影」、「グレート・マザー」、「アニマとアニムス」、「ペルソナ」、「老賢者」といった「元型」群を実生活の中で

経験しながらそれらの理解を深め、「個性化」を実践していく。ゴールの「全体性」をもつ「自己」に到達することが「自己実現」の達成である。

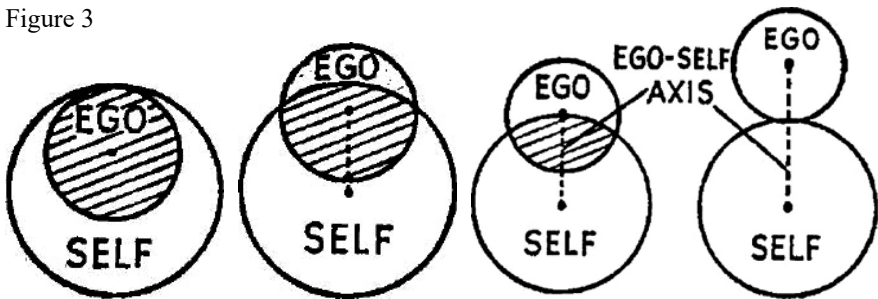
「自我—自己軸」という無意識の成り立ちについての命名は、ユング派の心理学者、エーリッヒ・ノイマン（Erich Neumann, 1905 – 1960）によるものである。今述べたように「自我—自己軸」は「個性化過程」を示している。

The ego develops a sense of independence from the Self, while in fact remaining intimately related to it — a relationship which Jung’s Israeli colleague, Erich Neumann, called the *ego-Self* axis. In a way, the Self is to the ego what the parent is to the child, or, in the great world religions, what God is to man, for the ego is, in a manner of speaking, the Self’s representative ‘on earth’ (i.e. in physical reality) . Individual development of the ego-Self axis is represented diagrammatically in Figure 3. At first the ego exists only in *potentia* as a component of the Self. Then, as maturation proceeds, the ego gradually differentiates itself out from the Self. The perpendicular line connecting them represents the ego-Self axis, the vital link which sustains the integrity of the personality. The shaded areas of the ego represent the relative degree of ego-Self identity persisting at stages of the developmental process.

自我は自己との間に密接な関係を保ちながら、次第に自己から独立心を発達させていく。この関係をユングのイスラエル人の同僚、ノイマンは、自我—自己軸と呼んだ。ある意味で、自己の自我に対する関係は親の子に対するようなもの、あるいは、世界の宗教においてみれば神の人に対するようなものである。なぜなら自我は、ひらたく言えば、自己の「地上における」（すなわち物質的現実における）代表者であるからである。自我—自己軸の発達、Figure3のよ

うに図式化される。はじめ自我は、自己の一成りとして可能性のみが存在する。次に、成長が進行するにつれ、自我は次第に自己から識別されてくる。自我と自己を結合している垂直線は、自我—自己軸であって、人格の統合を支える強力な結合である。自我の影になっている部分は、発達過程のその段階で保持されている自我—自己、同一視の相対的程度を示す。¹³

Figure 3



『恋する女たち』の登場人物の中には「自我—自己軸」がしっかりしている者もいれば、そうでない者もいる。この「個性化」が「アニマ・アニムス」を通して推し進められていくべきであるが、『恋する女たち』の登場人物たちは、いろいろな諸条件、人間関係、環境などに阻まれて「アニマ・アニムス」が十分に機能しないので「個性化」が順調に進んでいかないことに注目したい。

これから、『恋する女たち』のプロットに従い、小説の中で「アニマ・アニムス」が「個性化」を目指して、どのように機能しているかを見ていくことで、この小説を読み解いていきたい。ただし、この論考は先に述べたように紙面の都合で、全31章のうちで、第1章から第3章までを論ずる。

2. 第1章 姉妹 Sisters

2.1. 第1章のあらすじ

第1章のはじめで、ブランゲン家のアーシュラとグドルーンはベルドーヴァの父の家で、刺繍をしたり、絵をかいていたりしながら結婚について話をしている。グドルーンは数年間美術学校に通い、アトリエ生活をして帰郷したばかりであった。この時アーシュラは26歳。25歳のグドルーンは、ふさわしい人が現れれば、結婚してもいいと言う。それは一種の「経験」であるからだと言う。アーシュラは、結婚によって家庭を持ち、古臭い生活をしていくという雰囲気を考えると、憂鬱になる。グドルーンが「結婚が一種の経験」であるというのに対し、アーシュラは、むしろ「経験の終り」だという消極的な結婚観を持っている。二人は、重苦しい雰囲気から逃れるために、針仕事をやめて地元の結婚式を見に出かけることにした。そしてグドルーンはジェラルド・クリッチに出会って、たちまち30歳前後のジェラルドに魅了される。ジェラルドは、若く、陽気な、微笑を浮かべた狼のようで、輝く美しさと男らしさを備えていた。一方、アーシュラはそこにいたハーマイオニ・ロデイス (Hermione Roddice) というクリッチ家の友人の一人が気になっていた。というのは、ハーマイオニは、州の視学官のルパート・バーキンの恋人だったからである。ハーマイオニはバーキンと結婚したかったのだが、バーキンは気がすすまない。バーキンとアーシュラは学校の関係で顔見知りである。芸術家のグドルーンはハーマイオニにロンドンの社交界で二度会っている。第1章で、アーシュラ、グドルーン、ハーマイオニ、バーキン、ジェラルドといった主な登場人物は出そろった。

2.2. 「対立物の結合」

ここで、注目しなければならないのは、グドルーンの結婚観である。彼女は、結婚が「一種の経験」だと考えている。彼女による人生における結

婚の位置づけは、「不毛」な様相を示している。キリスト教では、「結婚」とはユング心理学でいうところの「対立物の結合（coniunctio）」である。ユング派の分析家であるジョン・A・サンフォードは著書『見えざる異性』の中で次のように述べている。

A proper Christian understanding of marriage, for instance, is based on the archetypal image of the *Coniunctio*. The church regards the marriage relationship as a representation on the human level of the divine mystery of the union of Christ with the soul, which has been the church's particular formulation of the archetype of the union of the opposites.

結婚についてのキリスト教の正当な理解の仕方は、「対立物の結合」という元型的なイメージに基づいて理解することでした。キリスト教では、男女の結婚を人間的なレベルの中に象徴として現れてくる神的な結合、つまり、人間の魂とイエス・キリストとの神的な結合の神秘を象徴したものとして理解してきました。人間の魂とイエス・キリストとの結合、これこそまさしく、対立物の結合というユング的な元型をキリスト教的に定式化したものでした。¹⁴

結婚のイメージこそ、私たちの内なる生命エネルギーが渴望する「対立物の結合」である。すなわち、完全な人間になるには男性と女性の結婚以外にはない。結婚はグドルーンの言うような俗的な「一種の経験」といった低レベルの問題ではなく、聖的な意味が結婚には込められている。これから論じる「アニマ」・「アニムス」を通じた「個性化」を成就するためには、「結婚」という「対立物の結合」を抜きにすることはできない。グドルーンの結婚に対する認識の甘さがのちに悲劇を招く。

3. 第2章 ショートランズ Shortlands

3.1. 第2章のあらすじ

アーシュラとグドルーンはベルドーヴァの家へ帰り、結婚式の参列者一同はショートランズのクリッチ家の屋敷に集まった。屋敷はウィリー・ウォーター（Willey Water）という細長い湖に面していた。女性たちは大はしゃぎで歩きまわり、男性たちは落ち着いていくつかのグループに分かれて雑談したり、タバコを吸ったりしていた。ジェラルド・クリッチは彼の父親が休んでいる間に、ホスト役をつとめていた。クリッチ夫人が男性たちの中に入って来て、バーキンと話を始める。クリッチ夫人はお客の多くを知らないで落ち着かないと言う。バーキンは知らない人がいても何も問題ないという。バーキン自身も知っているのはジェラルドだけだという。バーキンと夫人との話題がジェラルドのことに移る。バーキンは話を聞きながら、ジェラルドが少年のころ銃の偶発事故で弟を殺したことについて、ジェラルドに対し、まるで「カイン」のようなイメージをいまく。だが、バーキンの全体を考えずにそういった即断することはいけないと思い、すぐに頭の中でそのイメージをかき消す。召使が昼食の合図のドラを鳴らしても皆が従わないので、ジェラルドがほら貝を手にとって耳をつんざくような音を出すと、皆は食堂に移動する。ジェラルドの行動的な面が表されている。ハーマイオニとジェラルドは「競争心」の話をする。国家、愛国心、政治経済など、根底にあって人を動かす「競争心」のことである。食事が終わり、男性たちは外に出た。今度はバーキンとジェラルドが話しよう。ジェラルドは、全ての人間が社会の中で、互いに「のどを搔き切るような」競争をしあっているという。バーキンがジェラルドのそのような考え方を批判すると、二人の中に敵意が芽生えるが、同時に奇妙な愛情が芽生える。

3.2. バーキンとジェラルドの「影」の関係

バーキンはジェラルドの起こした事故のことを考える。銃の偶発事故はあくまで偶発事故であるが、もっと深いところではあらゆるものが関わりあっており、宇宙的、運命的なものが作用しているとバーキンは結論づける。バーキンは、このように宇宙と人間のことを結びつけて物事を考えるタイプである。一方、ジェラルドは世俗の世界に生きる人間である。ジェラルドとハーマイオニが「競争」について論争する中で、「競争心」が人間の進歩を促すという発想をジェラルドがもっていることが明らかにされていく。ジェラルドは次のように言う。「しかし、競争心をまったく取り除いてしまうわけにはいかないでしょう？それは生産や進歩を促すのに必要な誘因の一つなんだから（“But you can’t do away with the spirit of emulation altogether?” said Gerald. “It is one of the necessary incentives to production and improvement.” *WL*, p. 28)」。¹⁵ ジェラルドは炭鉱主であることを裏書きするかのように「競争心」を賛美する。彼は、産業主義・機械主義の権化のような象徴であるが、バーキンは、「並はずれた人間なら、ありのままの自分になって意のままに行動できる（“Anybody who is anything can just be himself and do as he likes.” *WL*, p. 32)」、「ほくが望みたいのは、おのれの中にある純粹に個人的なもの、誠実に行動する基になるものを大事にすることだ」¹⁶（“I should like them to like the purely individual thing in themselves, which makes them act in singleness.” *WL*, p. 33)」というほど、「自由主義者」「生命主義者」である。ジェラルドは、そんな自由主義的な考え方は、幻想で、競争社会の中にいる人間というものは、「皆互いにのどを掻き切りたがっている」という。ジェラルドは「人は食うか食われるかの競争社会の中で暮らしている」とあくまで主張するがバーキンはそのように言うジェラルドの不安感を見逃がさない。

“You seem to have a lurking desire to have your gizzard slit, and imagine

every man has his knife up his sleeve for you,” Birkin said. “How do you make that out?” said Gerald. “From you,” said Birkin. There was a pause of strange enmity between the two men, that was very near to love. (*WL*, p. 33)

「どうやら君は自分の咽喉を切られたいという潜在的な欲望を持っているようだ。そして、ほかの人間はみなナイフを袖の下に隠して君をねらっている。そう思いこんでいるようだ」とバーキンと言った。「どうしてそれがわかる？」とジェラルドは言った。「きみのようすからわかるよ」とバーキンは言った。話がとぎれ、二人の男のあいだには奇妙な敵意が感じられた。その敵意は非常に愛に近いものだった。(『恋する女たち』、p.34)

バーキンとジェラルドの関係は、互いに、ユング心理学の元型「影」を「投影」しあう関係である。では、ユング心理学の元型「影」とは何か。「投影」とは何か。

影の内容は、簡単に言ってその個人の意識によって生きられなかった反面、その個人が認容しがたいとしている心的内容である。それは文字通り、その人の暗い影の部分を作している。われわれの意識は一種の価値体系を持っており、その体系と相容れぬものは無意識下に抑圧しようとする傾向がある。¹⁷

次に大切なものとして、投影 (projection) の機制が考えられる。自分の内部にあるコンプレックスを認知することを避け、それを外部の何かに投影し、外的なものとして認知するのである。・・・すなわち自分のコンプレックスを他人に投影して自我の安全をはかるわけである。・・・投影によってわれわれは自分のコンプレックスを

認知し、それと対決していけるとさえ考えられる。そしてそのようなもの（影）が自分のコンプレックスに根ざしていたことを悟るのである。これを「投影の引きもどし」（withdrawal of projection）という。（『ユング心理学入門』、pp.75—76）

「影」とは、「自分になりたくないと思うもの」、「苦手なもの」であり、無意識下に押し込めているものである。「影」は、「意識」が油断した隙をみて、無意識の障壁を越えて自分の中に入り込んでくる。私たちは「影」に対して恐怖や怒りなどの感情を覚え、本能的にそれを他者に「投影」する。上の説明によると、「投影」は、自らのコンプレックスに直面することを回避するため、防衛機制として他者に「影」を投影する。無意識下に他者に投影されたものを自分の「影」だと認識し、ネガティブな「影」と和解することが「投影の引き戻し」である。そうであるならば、「投影」「投影の引き戻し」というのは、自分を高次の段階に引き上げるためのむしろ肯定的なステップだと考えられる。

「影」はもともと自分のものであるから、互いの「影」を演じるバーキンとジェラルドは、「憎しみ」とともに「愛」を感じるのは当然である。「投影の引き戻し」とは、自分の中にある感情を相手に映している投影に気づき、「原因は自分の中にある」ことを悟って投影の仕組みを受け入れていくことである。「投影」の意識化ともいえる。このように「投影」の原因が自分の中にある「影」であることを知ることになるのだから、本能的にバーキンとジェラルドは、互いに「憎しみ」とともに「愛」を感じるのである。これまで批評家は少なからず、互いに本能的な「影」の関係にあるバーキンとジェラルドの関係を「同性愛」に見立ててきた。だが、以上のようにユング心理学的見地からは、二人の関係を「同性愛」という枠づけで論じることは、一面的な見方のように思われる。「自我」が「影」を同化したり内面化したりすることによって、「影」との統合をはかっていく

ことが「個性化」を促すわけであるから、「自己実現」という人間の本源的な要請に応じる二人の関係を「同性愛」に矮小化してはならない。¹⁸

4. 第3章 教室 Class-room

4.1. 第3章のあらすじ

アーシュラが初等植物学の授業をしている。終りに近づこうとしていたところで、思いがけなくもバーキンが教室に入ってきた。授業はハシバミの花穂をスケッチさせる授業だった。視学官のバーキンは生徒のスケッチを見て、雌花を赤く、雄花を黄色く塗るようクレヨンの使い方を示唆する。そこに、ハーマイオニ・ロディスがドアのところに現れる。彼女はバーキンの車が外に止まっているのを見たから教室に入ってきたという。ハーマイオニはバーキンの仕事ぶりを見ようと思った。ハーマイオニはアーシュラに授業の邪魔にならないかと聞くと、アーシュラはかまわないと言う。バーキンはハーマイオニに花の受粉のことを説明する。ハーマイオニは妙に興奮して、赤い子房のことを「小さな赤い炎」とつぶやいた。授業が終わり、子供たちは開放された。ハーマイオニは、しばらく、ぼーっとして座っていたが、立ち上がってアーシュラの方に近づく。ハーマイオニは、アーシュラの妹グドルーンがベルドーヴァ (Beldover) に戻ってきたことを知ったと言う。ハーマイオニは二人の姉妹をブラドルビー (Breadalby) の彼女の家に招待したいという。ハーマイオニはグドルーンのことを好きだし、彼女の美術作品も気に入っていると言う。実際に、彼女は木彫りの鶴鴿 (せきれい) を二つ持っており、作品には本能のひらめきのようなものがあるという。アーシュラをそっちのけに、ハーマイオニとバーキンが教育論議を始める。知識と動物的本能についてである。ハーマイオニは知識 (自意識を含めて) が過剰であることは本能や子供たちが自発的に振舞う能力を破壊するのではないかと言う。自意識と精神を混同しているハーマイオニに対して、バーキンは意地悪そうに、「問題は精神があり余るか

らではなくて、乏しいからだ」という。彼はハーマイオニの動物主義的な意見は、彼女の頭の中で組み立てたことであり、本当の情熱と動物的本能への愛ではないという。アーシュラは、憎み合っている二人を見て驚く。

4.2. 「アニマ」と「アニムス」

ハーマイオニは、真の喜怒哀楽、真の深い同情という豊かな感情への理解が不足している女性である。ユング心理学では、「アニムス」に振り回されている女性である。第1章でハーマイオニについての記述があり、ここでは「彼女は男に憑りつかれた女で、彼女を支えているのは、男性的な世界だった (“She was a man’s woman, it was the manly world that held her.” *WL*, p. 16)」と記述されている。この場合の「男に憑りつかれている」というのは「『アニムス』に憑りつかれている」と考えればよいだろう。作品では、このようにユング心理学における「アニムス」と「アニマ」という元型が生々しく現出してくる。

ユングは、男性の人格における無意識の女性的側面を「アニマ」という元型として規定した。「アニマ」は、全ての男性が持つ女性的な性質である。男性の有する未発達な「関係の原理」であるエロスでもあり、異性としての女性に投影されることが多い。ユングは「アニマ」のほかに、女性が持つ男性的元型を「アニムス」と名付けた。「アニムス」は時々、論理性や強さを見せるものの、「アナイマ」と比べると、劣等な元型なので未熟なかたちで発現される。「アニマ」・「アニムス」は、内面心理に生起する「理想の異性像」であり、プラトン哲学でいうイデア界に存在する理想的な異性のイデアでもある。人間は、不完全な自分を意識し、それぞれの性において欠如している内的な「異性のイメージ（女性性・男性性）」を憧憬して恋慕する。性的・精神的な成熟を迎える思春期頃から始まって、自らの「アニマ」・「アニムス」のイメージに近似する異性を追い求めるようになっていく。「アニマ」・「アニムス」は、男女の恋愛や結婚、性愛に深く関係す

る元型であり、私たち個々人の異性に対する感情生活や性行動を根底で規定する「集合的無意識」の中にある。私たちは精神的な内界において、半ば自動的に「アニマ」・「アニムス」との肉体的・精神的合一を望み、不完全な自己に欠けている性的要素を異性と一体化することによって相補的に満たそうとする。人は、心の内奥にある「アニマ」・「アニムス」と対面し、目の前の異性を通し、自身の内面と向かい合うこととなる。目の前の異性に不満をもったり、惹かれたりするの、それが自身の中にあるからだということを本来は気づかなければならない。恋愛においては、「アニマ」・「アニムス」を意識できないまま振り回されるのではなくて、その恋愛に存する個人的な意味を読み取り、自身に馴染ませ、最終的にすべてをひっくめて生きることが大切である。言い換えれば、目の前の人と一緒に生きながら、己の中身も生きることを目指すべきなのである。他者とともに、「個性化」という自己実現を意識的に実践していくよう努力していかなければならない。ユングが、「より自分らしいあり方」すなわち「自己」に到達する「個性化」をととても重要視したことはいうまでもない。¹⁹

ハーマイオニは、知性に満ちているが意識過剰なため、生気がなく、神経を病んでいる。自分自身は、教養、身なり、思想の面で他者を圧倒し、自分への批判はありうるはずがないと考えており、かなり自信過剰に思われる性格である。ところが彼女の「魂」は、自分が攻撃や嘲笑にさらされているという疑心暗鬼におののいている。第1章にそのことが書かれている。

Even walking up the path to the church, confident as she was that in every respect she stood beyond all vulgar judgment, knowing perfectly that her appearance was complete and perfect, according to the first standards, yet she suffered a torture, under her confidence and her pride, feeling herself exposed to wounds and to mockery and to despite. She always felt

vulnerable, vulnerable, there was always a secret chink in her armour. She did not know herself what it was. It was a lack of robust self, she had no natural sufficiency, there was a terrible void, a lack, a deficiency of being within her. (*WL*, p. 16)

教会への小道を歩いているときでさえ、自分の身なりが第一級の基準に照らしても、完璧であることをよくよく承知し、あらゆる点で、すべて卑俗な批判を超越した立場にあるという自信を持っていたのだけれども、やはり彼女はうわべの自信と誇りの内側で、苦悩を味わい、おのれが中傷やあざけりや侮辱にさらされているのを感じとっていた。つねに彼女は傷つきやすい、傷つきやすいと感じていた。彼女の鎧（よろい）にはいつも人目につかぬ割れ目があるのだ。彼女自身はそれがなんであるか気づいていなかった。それが何であるのか気づいていなかった。それはたくましい自我がないことなのだ。彼女には自然な充実感がない。彼女の内部には恐ろしい空洞、欠陥、生命力の欠乏があるのだ。

ハーマイオニは一見しっかりとした強い「自我」がありそうであるが、実は無意識を制御できない脆弱な「自我」であるため、ヒステリックに「自我」の強さを演じ、そして誇示したがる。さらにハーマイオニは倒錯しており、自分が実際もっていない性質のものを人に見せたがる。ことさら感情を強調したり、女性らしい受容性を見せつけたりするが、それらは彼女が最も欠乏しているものであり偽物の姿である。ハーマイオニはバーキンに言う。「子供らはそっと自然のままにほうっておくほうがいいんじゃない？子供らは動物、粗野で、野性的で、なんでもいい、そういうものであった方がいいんじゃないの、自意識が強く、自発的に振舞うことができなくなるよりはね (“Is it better to leave them untouched, spontaneous? Hadn't they better be animals, simple animals, crude, violent, *anything* rather than this

self-consciousness, this incapacity to be spontaneous?” *WL*, p. 41)」。だが、彼女のこの発言は彼女の本心ではない。「アニムス」に振り回されている彼女は、女性らしい感情と官能の領域がほとんど欠落している。彼女の「疎外された自我」と全体性の象徴である「自己」との間の亀裂を覆い隠そうとして、わざと自分の考えとは全く反対のことを発言する行為となっている。また、彼女は「女性」であることをどう表現してよいかわからず、得意の「知性」で作上げた「偽の女性の感情」を「本物の女性の感情」の代理として差し出さなければならない。それを見抜いているバーキンも容赦なく、ハーマイオニを非難する。

‘You are merely making words,’ he said; ‘knowledge means everything to you. Even your animalism, you want it in your head. You don’t want to BE an animal, you want to observe your own animal functions, to get a mental thrill out of them. It is all purely secondary--and more decadent than the most hide-bound intellectualism. What is it but the worst and last form of intellectualism, this love of yours for passion and the animal instincts? Passion and the instincts--you want them hard enough, but through your head, in your consciousness. It all takes place in your head, under that skull of yours. Only you won’t be conscious of what ACTUALLY is: you want the lie that will match the rest of your furniture.’ (*WL*, p. 41)

「君はただ言葉をならべているにすぎないよ」と彼は言った。「知識は君にとってすべてを意味するんだ。君の動物主義にしたって、君は頭の中でそれを望んでいるんだ。君は動物になることは望んでやしない。君自身の動物的功能を観察し、そこから精神的なスリルを得たいと望んでいるんだ。そんなことはすべて純粹に第二義的なことだ—どんなに偏狭な主知主義よりも退廢的だ。君のこの情熱と動物的本能への愛は、主知主義の中でも最悪最低の形式以外の何物で

もない。情熱と本能一なるほど君は熱心に欲求している。だが、それは君の頭を通じて、君の意識の中でのことなのだ。それはみな、君の頭の中で起こるのだ、君のその頭蓋骨の下でね。ただ、君は事実が何であるか意識したがるだけだ。君は嘘が欲しいんだ、君のほかの家財道具に見合うような嘘がね」

ハーマイオニは主知主義によって、動物的本能を捕捉し、自分の中に取り込もうとしている。バーキンが指摘するまでもなく、ハーマイオニ自身も自分が「本物の女性性」を欠乏していることは分かっている。だからこそ、自分の中から「本物の女性性」を引き出してくれる男性との関係を求めるのである。その男性とは彼女のアニムスを上手に受け取ってくれる「女性的なバーキン」である。強い男性では、その「男性性」と彼女の「アニムス」と競争になる。男性的自我を持ちながら、繊細な女性的性質も発達させて合わせ持つバーキンのような男性がハーマイオニにとって必要な男性である。第1章にそれが書かれている。

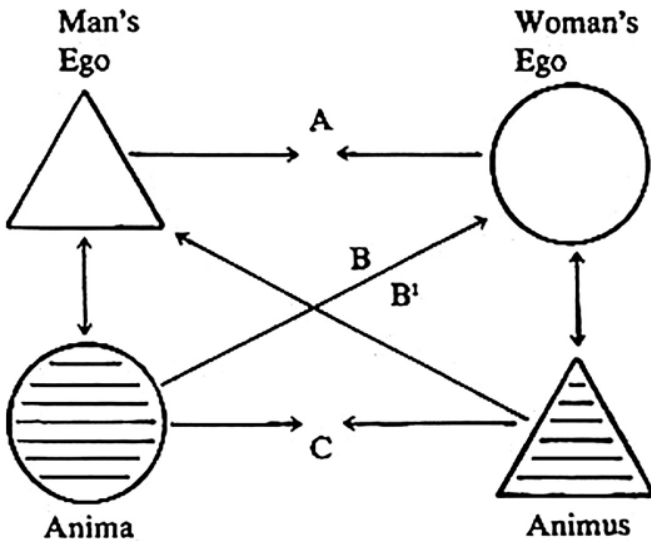
She wanted someone to close up this deficiency, to close it up for ever. She craved for Rupert Birkin. When he was there, she felt complete, she was sufficient, whole. (*WL*, pp. 16-17)

彼女はだれかこの欠乏を埋めあわせ、永久に埋め尽くしてくれる人がほしかった。彼女はルパート・バーキンを求めて憂き身をやつしていた。彼がそばにいるときは、彼女は完全無欠になった感じがし、充足し、全一であった。

ハーマイオニはバーキンに気に入ってもらおうよう美しさに磨きをかけるが、バーキンはハーマイオニから離れようとする。ハーマイオニはバーキンを意志の力で縛ろうとしているからである。彼女は彼を崇拜するが、そ

これは愛のためではなく利己的な目的だからである。パーキンと同一化することによって全体性的な「自己」に達しようとするが、その「自己」は「個性化」の「自己」ではなく、「エゴの神」としての「自己」である。「自我肥大」といってもよい。ハーマイオニは無意識との連携をとることはせず、ただ意識を拡張することによって、疑似的な「自己」を手にしただけなのである。それがパーキンには手に取るようにわかるからこそ、彼女から距離を置こうとするが、彼女は必死で追いかける。ハーマイオニの「アニムス」が追い求めているのは、下図のC線の関係である。

Figure 4



この図を説明すると、男女がたがいに肯定的な「アニマ」・「アニムス」を投影し合う場合には、私たちは「恋」という状態となり相互に魅了され合う。上のA線は、Ego（自我）相互の意識的なレベルでの関係である。BおよびB'はそれぞれのアニマ・アニムスを相手に「投影」している線

である。最も引きつけ合う力、磁力とも言うべき強力な力は、C線である。C線は、女性のアニムスと男性のアニムスが無意識の中で互いに相互関係をむすぶ状態で、通常、「恋におちた状態」である。²⁰

ハーマイオニがバーキンを追い求めるのは、他の男性よりも「アニマ」を豊かに含んだバーキンにハーマイオニの「アニムス」を投影しているわけであるが、結果的に、ハーマイオニの「アニムス」とバーキンの「アニマ」を結ぶC線は実現していない。というのは、上に述べたように、ハーマイオニの恋愛の目的が「自己」ではなく「自我」の強化と他者に対する優越感と支配権であり、ハーマイオニのバーキンに対する愛は、「自我愛」というレベルのものにとどまっているからである。到達しようとしているのは疑似的な「自己」であり、「自我肥大」に他ならない。真にバーキンの「アニマ」と向き合うことがなく、ただひたすら意識の拡張にはげんでいる。したがって、ハーマイオニは悲劇的にも「個性化」に結びつかない恋愛をしようとしているのである。では、「個性化」に結びつく「愛」とは何か。

4.3. 「個性化」に結びつく「愛」における「アニマ」・「アニムス」の役割

「アニマ」・「アニムス」は元型であり、この無意識の存在を無視することはできない。「アニマ」も「アニムス」も私たちの人生から容易に消え去ることのないパートナーである。これら無意識の存在を否定し、拒絶し、無視すれば、それらは、たちどころに牙を向き、その否定的な側面を露わにする。逆にそれを受け入れ、理解し、関係ができあがると、それらは積極的な側面を見せ始める。では、無意識の中の「アニマ」・「アニムス」を共に活かしていくにはどうしたらよいのか。初めに手掛けることは、現実の異性とまず対話して、理解を深めていくことである。対話をするだけで初めて、私たちは、「真実の自分」と「真実の他人」を観察することができる。文学は、多くの場合そういった対話を記述しているのである。理解し合うには、いろいろな方法で自分自身の考え方を述べ、かつまた相手の言うこ

とも注意深く耳を傾ける必要があることは言うまでもない。対話をすることによって、相手を理解するということは、自分の無意識と向かい合い、無意識の要素を意識化していく第一歩である。それは自らの人格を多様にし、豊かにする。アニマの場合、無意識の中にあって意識化されることを求めている。すべての元型は、「アニマ」に付着していると言ってもよいので、アニマは「生命の元型」「集合的無意識の代表」といっても言い過ぎではないように思われる。「アニマ」が属する「集合的無意識」は「内界」においては客観的に実在している。宗教的には「霊的世界」と呼ばれているが、夢、空想、幻像、偶然のひらめきなどはアニマの産物と言ってもよく、それが意識と統合されれば、心の成長と発達にとってはこの上ない恩恵となることは言うまでもない。

このように「アニマ」・「アニムス」は、「集合的無意識」の擬人化である。したがって、「アニマ」・「アニムス」の心理的な存在意義は、「自我」と「集合的無意識」とを結びつける働きをすること、いわば、「意識の世界」と「内なるイメージの世界」との間に橋をかけることにある。したがって、「アニマ」・「アニムス」を理解することは、すなわち「無意識」についての理解を促進することにつながる。現代人の場合、物質主義に取り込まれている時、「内なる世界の現実性」をまともに理解する必要性すら感じることがないように思われる。「アニマ」・「アニムス」が生身の人間に投影されたり、「投影の引き戻し」もされなかったりする。そのため、男女の関係がぎくしゃくすることがあるが、その場合、無意識との連絡をする「アニマ」・「アニムス」に関心が払われないうことによって、「アニマ」・「アニムス」が機能不全に陥っていると考えられる。

ハーマイオニ、それとこれから論じていくジェラルド、グドルーンがその状態だといえる。ハーマイオニの場合、「知性（意識）」を信じるあまり、「意識」による「無意識」の理解が頓挫している。「無意識」を無視すれば必ず、「無意識」の世界からのしっぺ返しがかかる。「内なる世界」は「外の

世界」に対応する一方で、「自律する世界」でもあるから、その暴れ方も尋常ではない。「外界」に適応するときと同じような態度で、「内界」に接し適応することが必要である。²¹

「内界」は「想像力の源泉」である。生命のエネルギーを生み出すところでもある。「生命の元型」である「アニマ」を理解することによって、人生は豊かなものになり、深みを増す。実はハーマイオニも本能的にそれを知っているからこそバーキンを求めるが、あまりにも知識偏重になるあまり、「個性化」の機会を逃している。『恋する女たち』の男女の目標が「人生と恋」から「人生と結婚」に発展するのは、世間的な制度的な結婚への妥協ではなく、「救済としての結婚」をアーシュラとバーキンは本能的にさとしたからである。一方、グドルーンとジェラルドは小説の最後まで「救済としての結婚」の意義を見出さなかった。彼らは「魂の伴侶」としてお互いを認識し合わなかったのである。

おわりに

人は「アニマ」・「アニムス」と対面し、目の前の異性を通し、自身の内面と向かい合う。「アニマ」・「アニムス」を意識し、相手の異性の中にある個人的な意味を読み取り、自身に馴染ませ、最終的にそれを異性同士が「共に」生きる。つまり「個性化」という自己実現の達成をパートナーたちが互いに意識的にも無意識的にも追求し、努力するのである。ユングは、「より自分らしいあり方」すなわち「自己」に到達する「個性化」をめぐる、「アニマ」「アニムス」という「対立物の結合（コニウンクティオ）」が重要であることを見抜いていた。本稿は、『恋する女たち』をユング心理学で読み解くための準備として、「アニマ」・「アニムス」、「意識」・「無意識」、「自我—自己軸」についての説明と、「ハーマイオニとバーキンの関係」を見ることに費やされた。『恋する女たち』の中におけるジェラルドとグドルーン、バーキンとアーシュラの関係は、今回扱った3章までのところで

は、本格的に現れて来ず、3章以降に展開していくので、更に続く拙論の中で細かく見ていきたい。

ユングは「アニマ」のほかに、女性が持つ男性的元型を「アニムス」と名付けた。「アニムス」は、論理性や強さを持つものの、あくまで劣等な元型なので未熟な形で発現されることが時々ある。人間は、「アニマ」・「アニムス」の機能として、不完全な自分を意識し、それぞれの性において欠如している異性の「アニマ」「アニムス」を憧憬し、恋慕する先天的・遺伝的要素を持っている。『恋する女たち』のハーマイオニは、典型的に「アニマ」・「アニムス」の機能を示していた。だが、それは彼女の「アニムス」がバーキンの「アニマ」とともに「個性化」へ向けて健全に発展するものではなく、「アニムス」が暴走して、いわゆる「自我肥大」の形になってしまった不幸な例として提示されている。

「アニマ」・「アニムス」は、男性と女性の恋愛関係や結婚関係を決定づける元型であり、私たち個々人の「異性に対する感情生活や性行動」を根底において規定する「集合的無意識」の元型である。私たちは「内界」において、本能的に「アニマ」・「アニムス」との肉体的・精神的合一、すなわち「対立物の結合（ユニオンクティオ）」を望む。この場合の「対立物の結合（ユニオンクティオ）」は、不完全な自己に欠けている性的要素を異性と一体化することによって相補的に満たそうと努力することであった。

次回の論考では、「結婚」というものを、「制度としての結婚」や「幸福を求める結婚」としてではなく、魂（無意識）の部分での結婚、すなわち「救済としての結婚」として捉えていきたい。相手に投影されたイメージと現実とははっきりと区別し、無意識内の内容を少しずつ丁寧に統合していく作業が「個性化」の内容であり、これが真の「愛」の営みである。また、「アニマ」によって掻き立てられる「エロス（生きる衝動）」が人間の生命力の源泉であることも見逃せない。「救済としての結婚」のテーマは、

次の論文（Ⅱ）も含めた後の論文群に回したい。男女の関係は、「個性化」に向かって二項対立から統合へ向かう「ユニオンクティオ」の実践であり、男女はそれぞれの「アニマ」と「アニムス」を投影し、統合し合って、お互いが「自己」に到達して人格を完成する。「アニマ」・「アニムス」を通じた「個性化過程」が『恋する女たち』全編の中で次々と展開されていく。

Notes

- 1 視学官とは、教育行政として学事の視察と事務をつかさどる官吏で学事の連絡や指導・助言を行う職である。
- 2 ユングはこころの全体性を「自己」としている。「自我」はその表層である。
- 3 ルパートとバーキンのこの関係をホモセクシャルと限定するのは早計である。
- 4 Richard Aldington, *Portrait of a genius, but ... : the life of D. H. Lawrence, 1885-1930* (London : Heinemann , 1950), p. 98.
- 5 「アニマ」も「アニムス」も元型であり、「アニマ」は、男性の人格における無意識の女性的側面を「アニマ」、女性の人格における無意識の男性的側面を「アニムス」だと考えられる。
- 6 通称 Kot と言われた S.S. Koteliansky のこと。ロシアのキエフ大学からイギリスへ経済学を勉強しに来た官費の留学生だったが、そのままイギリスにとどまり Russian Law Society に勤めていたロレンスの若い友人の一人である。
- 7 *The selected letters of D.H. Lawrence*. Compiled and edited by James T. Boulton (Cambridge: Cambridge University Press, 1997), p. 163. 日本語訳は、『D . H . ロレンスの手紙』伊藤整他訳（東京：彌生書房、1980年）、213頁を参考に拙訳をつけた。
- 8 ジョン・ミドルトン・マリー（John Middleton Murry）のこと。
- 9 英訳は、C.G. Jung. *Psychology of the Unconscious: A Study of the Transformation and Symbolism of the Libido. A Contribution to the History of the Evolution of Thought*. trans. by Beatrice M. Hinkle (New York: Moffat Yard, 1916). 邦訳は C.G. ユング著『変容の象徴』野村美紀子訳（東京：筑摩書房 [ちくま学芸文庫]、1992年）がある。
- 10 図は、Anthony Stevens. *On Jung* (London: Penguin, 1999) 2nd ed. p.29. アンソニー・

- スティーヴンス『ユング：その生涯と心理学』佐山薫子訳（東京：新曜社、1993年）、p.38.
- 11 Anthony Stevens, *Jung* (Oxford: Oxford University Press, 1994), p.14. A. スティーヴンス『ユング』鈴木晶訳（東京：講談社、1995年）、p.67.
 - 12 (『ユング心理学入門』、p.221) の図から引用した。
 - 13 Anthony Stevens. *On Jung* p.67. アンソニー・スティーヴンス『ユング：その生涯と心理学』、pp.91-92. 本論考の Figure3 と *On Jung* の Figure3 と偶然ながらナンバーが一致した。
 - 14 John A. Sanford *The Invisible Partners* (New York: Paulist Press, 1980), p.113. 以下、(*The Invisible Partners*, 頁数) と記す。訳書は、ジョン・A・サンフォード『見えざる異性：アニマ・アニムスの不思議な力』長田光展訳（東京：創元社、1995）、p.201. 以後、(『見えざる異性』、頁数) と記す。
 - 15 D.H. Lawrence. *Women in Love* (Cambridge : Cambridge University Press , 1987), p.28. 以下この本からの引用は、(*WL*, 頁数) と記す。
 - 16 「おのれの中にある純粋に個人的なもの、誠実に行動する基になるもの」とは、とりもなおさず、「集合的無意識」の元型「自己」のことである。
 - 17 河合隼雄『ユング心理学入門』（東京：培風館、1997）、p. 101 を参照した。以下、(『ユング心理学入門』、頁数) で表す。
 - 18 (『ユング心理学入門』、pp.101—112) を参考にし、バーキンとジェラルドの関係を考察した。
 - 19 アニマ・アニムスについては、(『ユング心理学入門』、pp.193—218) に基本的な考え方が述べられている。それを参考に簡潔に「アニマ」・「アニムス」を定義づけた。
 - 20 (『見えざる異性』 p.27.) を参考にハーマイオニとバーキンの関係を考察した。この図の関係は、これ以後のアーシュラとバーキン、ジェラルドとグドルーンの関係を考察する上でも参考になる。
 - 21 内面に入っていきやり方に、ユング心理学ではアクティブ・イマジネーション(能動的想像法) という方法もあるが、ここでは追究しない。

The Merchant of Venice 再読

—— 人肉裁判の法廷で男装の Portia が説く「慈悲」の意味 ——

堤 裕美子

I

今回の拙論で取り上げる喜劇 *The Merchant of Venice* (1598 年) は、William Shakespeare (1564-1616) が悲劇 *Julius Caesar* (1599 年) を執筆した前年であると推測され、優れた喜劇や歴史劇を執筆した時期である。この作品もまた、他の作品と同様にプロットの基盤となる種本が存在し、そのプロットは全て、おとぎ話のように単純で明解な物語なものばかりである。しかしながら、福田恒存 (1912-1994) の言葉を借りれば、単純な型の面白さというものは、単純であればあるほど、型にはまったものであればあるほど、くりかえし聴いて飽きることがない。¹ 従って、この喜劇の分かりやすいプロットの構成こそが、四百年にわたりこの喜劇が世界各国で上演されてきた理由のひとつであると言えよう。しかしながらその一方で、この喜劇はまた、John Drakakis (1944-) が Arden 版の序文で、“arguably Shakespeare’s most controversial comedy”² と言わしめるような興味深い要素も持っていることも事実である。その要素を具体的に挙げるとすれば、代表的なものとして真っ先に取り上げるべきものは、ユダヤ人高利貸し Shylock を巡るその演出と解釈の変遷であろう。種本において、古典的な劇作品における典型的な悪役として単純明快にその悪徳さが強調されて上演され、Shakespeare の作品においてもその流れを継承したはずの Shylock が、時を経る間に、社会の中で虐げられてきた人間の代表としてその苦悩を吐露し、ついには観客の涙を誘うような重要な存在として捉えられるようになっていったことは有名である。また、この作品の題名にもなっている Venice の商人 Antonio と、彼を窮地に追い込むきっかけを作ったにも

関わらず、彼があくまで深い愛情を最後まで失うことのない若者 Bassanio との関係については、限られた台詞のやり取りから *queer reading* と呼ばれる考察が行われるなど、作品解釈をめぐる振幅は大きかった。

Shylock 同様、今回焦点を定める Portia という登場人物もまた、これまでの上演の歴史の中で演じる女優たちを悩ませるような側面があったことで知られる。例えば Shakespeare の作品を演じた役者たちによる上演回顧録や作品解釈を集めた *Players of Shakespeare 1* (1988) では、悲喜劇を問わず様々な役を演じてきた名女優 Sinead Cusak (1948-) が、彼女のエッセイの冒頭を “I failed when I played Portia.”³ という言葉で書き出し、読者に衝撃を与えていることから伺い知ることができる。ちなみに Portia は、Shakespeare の数々の魅力的なヒロインの中でも、物語の最後には幸運を手に入れる喜劇のヒロインであり、とりわけ、自分の置かれた環境や人間関係に積極的に取り入り、自分の手で運を切り開いていく能動タイプである。そのような Portia が遺憾なく才能を振るう有名な場面のひとつが、用意周到に男装の手筈を整え、若き法学博士に扮して法廷の場面に潜入し、夫の恩人の命を救う人肉裁判の場面であろう。

The Merchant of Venice は「Bassanio の箱選び」「Shylock の人肉裁判」「指輪の挿話」という三つの裁判によって構成されている、と考える説がある。⁴そして、これら三つの裁判において、Bassanio に正しい箱を選ぶために工夫を凝らすのも Portia であり、人肉裁判で契約書を不履行にするのも法学博士に扮した Portia であり、夫の誠実さを試す指輪の挿話では Venice で Bassanio から言葉巧みに指輪を取り上げ、Belmont に帰っては指輪を持っていない Bassanio に対して頑としてその弁解を聞き入れず夫としての彼を懲らしめるのも Portia である。つまり、この喜劇の基盤をなしている全ての裁判に関する判決を確定し、一切の主導権を握っているのはすべて Portia なのである。

Portia を演じた Sinead Cusak は、Portia の求婚者に対する冷酷な態度

と、慈悲のスピーチを雄弁と語る Portia の間に違和感を覚えたと述べているが、本拙論の目的は、Portia の一貫した解釈を許さない様々な言動を、Erik H. Erikson (1902-1994) のアイデンティティ論を通じて考察することである。劇の中で Portia が見せる変化を Erikson のアイデンティティ論に沿わせるようにして追いながら、とりわけ、人肉裁判の法廷の場面で男装した姿で慈悲についての有名なスピーチを行う Portia の姿とその台詞に、精神分析的視点からの意味付けを行うことを目指してみたいと思う。以下の論考では、第二章で、劇の始まりにおける主要な登場人物の「困惑」を取り上げ、Erikson の説く青年期のアイデンティティの揺らぎを追う。第三章では、箱選びのエピソードを中心に、求婚者による箱選びから得る Portia の学びを取り上げる。そして第四章では、法廷の場面で Antonio の命を救おうと画策する Portia の、法学博士という男装と慈悲のスピーチについて考察を行いたいと思う。

II

Shakespeare の他の作品に関する拙論では、これまでも何度か登場人物や作品への考察に Erikson が提唱するアイデンティティ論を引用してきた。⁵ Erikson は Shakespeare の *As You Like It* (1600) に出てくる「人間の人生における七つの段階」の台詞からヒントを得て、「人間の八つの段階(乳児期・幼児期・児童期・学童期、思春期青年期・青年期・壮年期・老年期)」を説いたことで知られている。⁶ ちなみに、今回取り上げる *The Merchant of Venice* のプロットの展開において、常に重要な役割を果たしている Portia や Bassanio は、結婚適齢期に達し、成年期への突入を目前に控えた、大人として成熟しつつある青年期の若者たちである。そしてこの作品の冒頭は、そのタイトルになっている Venice の商人 Antonio が二人の友人を伴って登場するのであるが、彼が舞台に現れて最初に口にする台詞は、作品に Erikson のアイデンティティ論を重ねる十分なきっかけを内包して

いる言葉である。

In sooth I know not why I am so sad,
 It wearies me; you say it wearies you;
 But how I caught it, found it or came by it,
 What stuff 'tis made of, whereof it is born,
 I am to learn; and such a want-wit sadness makes of me,
 That I have much ado to know myself. (1.1.1-6)

作品の冒頭で Antonio の感情を支配しているのは “want-wit sadness”、自分でも理由の分からない悲しみという負の感情である。この台詞の後で、Antonio と共に登場した Salarino や Salanio が、Antonio の精神的疲弊の理由は、彼の事業が心配だからだろうと推測して気遣うが、彼は自分の仕事は順調で満足していると否定している。ちなみに Antonio は、種本では Bassanio の親代わりという役割が明確であるが、Shakespeare は自作においてこの役割を取り去っている。このことによって、Antonio の年齢は、貿易商として成功している職業的背景から Bassanio よりもおそらくは少し年長であろうが、かといって年齢や家族構成がほのめかすような台詞や場面設定がなされていない。つまり、Antonio の年齢設定を不確かにすることで、Bassanio と彼の年齢を比較的近い設定にしているのである。この変更がもたらした効果として、Antonio の最初の一声は、作品全体の雰囲気象徴する台詞となっていると言えるのではないだろうか。そして特に、この作品を Erikson のアイデンティティ論を軸として考察する場合、その雰囲気とは、登場人物のそれぞれが、主筋と副筋における様々な人間関係を通じて自分自身を問い、時には関係する人物を合わせ鏡のようにすることで自分自身を認識し、最終的には自分が所属する共同体の中の自身の立場をわきまえ、自己を確立していく過程における種々の不安であると言え

る。

このような不安は、作品の冒頭では Antonio の精神的な窮地や、Bassanio のような現実な経済的困窮という形をとって、具体的に示されていく。例えば、Antonio が精神的な八方塞がりの状態に陥っているのに対して、Bassanio は Portia の自分に対する恋心をほぼ確信しており、彼女に求婚したいにもかかわらず、それを阻んでいる原因について、自己反省を含めて次のように語るのである。

'Tis not unknown to you, Antonio,
How much I have disabled mine estate
By something showing a more swelling port
Than my faint means would grant continuance. (1.1.122-25)

Bassanio は、自分の経済的な破綻を招いた原因は、他の誰でもない自分自身の、財力を超える派手な生活への欲望を抑える力がなかったからだと認めている。経済的困窮という分かりやすい形ではあるが、Bassanio にとって、自分の理想とする姿と現状は甚だしくかけ離れており、しかも自分の経済的困窮状態は自分の将来の幸福への保証も遠ざけていることを嘆いており、Bassanio は今の自分の状況には全く満足していないことが分かる。

Erikson は、*Identity: Youth and Crisis* (1968) の中で、アイデンティティの危機とは、“personal sameness” (人格的同一性) と “historical continuity” (歴史的連続性) という二つの感覚を喪失することであると述べている。⁷ 言い換えれば、Erikson の考える個々人のアイデンティティとは、人格的同一性と歴史的連続性の二つの感覚が織りなしてゆくものであると言える。

これを踏まえて登場人物の様子を見る時、この劇の冒頭では、Antonio は、自分では掴みきれない理由によって自己コントロールを失い精神的疲弊を覚え、いわば抑うつ状態であるし、Bassanio にしても、理想の女性に

出会い、その女性に求婚するにふさわしい理想の自己像を思い描きながらも、近づくことができない焦りを抱えている。主要な登場人物の精神的な疲弊や焦燥が矢継ぎ早に提示される展開となっている。二人とも“personal sameness”に関する安定性を完全に失ってしまっている。

作品の筋をリードし、今回の拙論で焦点を当てる Portia もまた、その例外ではない。彼女の作品における本音として挙げる第一声は、“By my troth, Nerissa, my little body is aweary of this great world.” (1.2.1-2) である。彼女にとって、目の前に広がる世界は自分を伸び伸びと成長させてくれる希望を提示してくれるかわりに、彼女に重荷を負わせているのである。

Portia の場合には“awearry of this great world”と嘆いている理由が明確に二つ述べられている。一つめは、結婚を控えた若い女性でありながら、父親を亡くしている点である。本来であれば健在しているはずの家族が欠けているという感覚は、過去・現在・未来にわたって途切れることなく連続したアイデンティティが脆弱であるという不安感に他ならない。特に、家長制が根強いエリザベス朝時代においては、女性の独立的立場が歓迎もされなければ保証もされていなかったため、父親の不在は、Erikson のいう歴史的連続性に対する安定した感覚が得難い状況であることを示す。実際に、Portia のそばに常に寄り添っているのは侍女の Nerissa で、彼女を保護する後見人のような存在は作品には登場してこない。

二つめの原因は、Portia の結婚相手が父親の遺言によって決められていることである。夫選びに彼女の選択権の余地がないのである。このことは Portia のアイデンティティ確立への不安や孤独感を更に強めている。父親の遺言で定められた Portia の夫選びの方法は極めて奇抜なものだ。

Portia の父親は、それぞれに格言のついた金銀鉛の三つ箱を残し、求婚者は三つの箱の中からひとつだけ選ぶことができ、もしその中に Portia の絵姿が入っていれば、Portia の気持ちに関わらず夫になることができるといふ遺言を残してこの世を去ったのである。このことは Portia の運命に重

くのしかかっているように見える。現に彼女は次のように述べている。

But this reasoning is not in the fashion to choose me a husband. O me, the word 'choose'! I may neither choose who I would, nor refuse who I dislike, so is the will of a living daughter curbed by the will of a dead father. Is it not hard, Nerissa, that I cannot choose one, nor refuse none? (1.2.20-25)

このように、夫を選ぶことも拒むこともできない自分の運命を Portia は心から嘆き悲しむ。彼女は自分のことを死んだ父親の意思に支配された娘と形容している。父親の遺言は娘の Portia の自由を奪ってしまっているのである。この遺言は、娘の Portia にとっては忌まわしいものに他ならない。しかし、視点を変えて Erikson の理論に照らし合わせる時、どんな見方ができるだろうか。

Erikson は、青年期とは、「児童期と成人期の間に位置する心理的モラトリアムである」と主張している。モラトリアムとは、ラテン語の「遅延」という言葉が語源である。Erikson の唱える心理的猶予期間とは、未熟さの延長と早熟性の複合体なのだが、この猶予期間の中で、若者が役割実験を自由に行うことによって、社会のどこかに活動の場を見つけるのであるという。⁸ さらに、この猶予期間は、すべての社会と文化において制度化されており、その社会の価値から逸脱しない限りで見習い修行や冒険的行動と一致するのだという。⁹ Portia の父親の遺言は、若者達にとって、この冒険的行動を起こす引き金として機能しているように思われる。

父親亡き後の Portia の身の上について説明する、Bassanio の台詞は次の通りである。

In Belmont is a lady richly left,
And she is fair and, fairer than that word,

Of wondrous virtues. Sometimes from her eyes
 I did receive fair speechless messages.
 Her name is Portia, nothing undervalued
 To Cato's daughter, Brutus' Portia. (1.1.161-66)

Portia について語られる時、外見や性格より先に遺産についての説明が真っ先に来ることはよく注目されることであるが、この財産、外見、性格という順序は人間同士がお互いを判断したり評価しようとする時に一番分かりやすいものの順序とも言うことができる。つまり、Portia の評判はそのままの順序で世間に広められており、Portia は父の遺産を受け継いでいることで、妻として考慮されるべき美しい外見や性格の良さについて注意を向けられる前に、その莫大な遺産が注目を集めてしまっているということである。

さらに、Bassanio は Portia について次のように付け加えている。

Nor is the wide world ignorant of her worth,
 For the four winds blow in from every coast
 Renowned suitors, and her sunny locks
 Hang on her temples like a golden fleece,
 Which makes her seat of Belmont Colchis' strand,
 And many Jasons come in quest of her. (1.1.167-172)

“golden fleece” とはギリシャ神話に伝えられる秘宝のひとつである。本来であれば得難い宝であったが、ギリシャの女神達の加護によって王子 Jason が見事にそれを獲得する。世界中から Portia を自分の妻にしようと数々の求婚者が訪れていると Bassanio は述べるが、当の Bassanio もまた、Jason が女神 Hera や Madia に助けられて金色の羊毛を手に入れたように、

Antonio の経済的加護を受けて Portia を手に入れたいと英雄気分にかけている。Bassanio は Portia を golden fleece という秘宝に例え、自分自身をその秘宝を手に入れる Jason に重ね合わせる下りには素晴らしい巧妙さが伺える。このような行動は先に述べた青年期におけるアイデンティティの確立期に於いて観察することが可能だと Erikson は述べている。

こうした観点から作品を眺め直す時、Belmont における Portia を巡る箱選びもまた、世界各国から求婚者達が、結婚という成人期への突入をその延長線に見据えつつ、青年期のモラトリアムの中で許された最後の冒険的行動に挑んでいる姿そのものであると言える。従って Portia の側からしてみれば、夫選びに関して自分の意思の介入が許されていないことは抑圧以外の何ものでもないように思われるが、自身では気づかないながらも、Portia は父親の遺言によって守られているのである。例えば Portia は、一度会ったことのある Bassanio のことが忘れられないのだが、恋心に捉われた Portia は、青年期について “Such a hare is madness the youth, to skip o’er the meshes of good counsel the cripple.” (1.2.19-20) と形容し、青年期の価値判断や行動力は成熟さが欠けているだけではなく、これに加えて社会的規範もやすやすと超える瞬発力と、後戻りできない過ちも恐れないものであると語っている。

Erikson は、青年期におけるモラトリアムの期間は、どの社会においてもその存在が許されてひとつの制度のように存在しているのが見受けられると主張しているが、Portia の夫選びはこのような青年期のエネルギーの暴走を食い止めようとする父親の箱選びの遺言によって守られていると言える。実際、父親が残した箱選びに臨む求婚者への条件からは、父親の娘を守ろうとする知恵が込められている。亡き父親の娘を気遣う遺言において、求婚者に課された具体的な条件は、アラゴン王によって次のように語られる。

I am enjoined by oath to observe three things:
 First, never to unfold to anyone
 Which casket 'twas I chose; next, if I fail
 Of the right casket, never in my life
 To woo a maid in way of marriage;
 Lastly, if I do fail in fortune of my choice,
 Immediately to leave you and be gone. (2.9.9-15)

つまり、Portia を妻として迎えたいと求婚する者に対して、箱選びに失敗したら、その後は他の娘と結婚しないよう覚悟を決めさせているのである。父親はこの条件を設けることにより、ただの遺産目当てではなく、本当に Portia を妻として迎えたいという気持ちがあるのかどうか求婚者に心得させているのである。箱選びの方法によって、Portia は自分の運命を支配されているように感じるのかもしれないが、実際には父親によって守られているのである。そしてそれは図らずも Nerissa が口にした次のような言葉からも明らかだ。

Your father was ever virtuous, and holy men at their death have good inspirations. Therefore the lottery that he hath devised in these three chests of gold, silver and lead, whereof who chooses his meaning chooses you, will no doubt never be chosen by any rightly but one who you shall rightly love. (1.2.26-31)

Portia 自身が Nerissa の言葉にどれだけ賛同しているか明確に述べられていないが、ともかく、Portia もまた父親の遺言に守られていると認識してはいないながらも、求婚によって成人期に向かってアイデンティティの確立を迫られているのは明らかである。

ちなみに Erikson は、青年期についてこの他にも「成人としてのコミットメントをすることが延期された期間ではあるが、しかしそれは単なる延期期間を意味するものではない。それは、社会が行動の自由を選択的に許容し、青年が挑発的な遊戯的行動を行う時期である」とも説いている。Portia 自身も、求婚する若者たちも、箱選びという一見遊戯的冒険に興じるように見える一方で、思慮深い父親の遺言が、Erikson の唱える「社会の選択的な許容」として機能しているのである。このような構造の中で、*The Merchant of Venice* における青年たちは、それぞれにどのような冒険的行動を体験し、そしてそこから何を得ているのだろうか。

III

自分の結婚相手が父の遺言によって定められている Portia は、自分の運命を呪いながら、“It is a good divine that follows his own instructions: I can easier teach twenty what were good to be done than to be one of the twenty to follow mine own teaching.” (1.2.14-17) と述べるが、この台詞は予言的で、Portia は実際に、自分の元に押し寄せる求婚者たちの箱選びの様子を見ることによって、この予言を成就していくことになる。作品では最初にモロッコ王が求婚に現れるが、モロッコ王が最初に3つの箱を見た時の台詞は、“This third, dull lead, with warning all as blunt:” (2.7.8) で、正解の鉛の箱に対して“dull”や“blunt”という一般的な価値観をかぶせてしまっている。鉛の箱に記されている言葉は“Who chooseth me must give and hazard all he hath.”なのであるが、三つの箱の格言を吟味する時のモロッコ王の言葉は次の通りである。

I will survey th'inscriptions back again.

What says this leaden casket?

‘Who chooseth me must give and hazard all he hath.’

‘Must give’, for what? For lead? Hazard for lead?
 This casket threatens: men that hazard all
 Do it in hope of fair advantages.
 A golden mind stoops not to shows of dross;
 I’ll then nor give nor hazard aught for lead. (2.7.14-21)

モロッコ王は自分の心を「黄金の心」と呼び、三つの金属の世俗的な価値にあてはめてしまい、鉛の箱に対しては高慢さが出てしまい、途中で真実を突いておきながら、最後にもう一度鉛の箱を検討する時、“Isn’t like that lead contains her? ’Twere damnation / To think so base a thought; it were too gross / To rib her cerecloth in the obscure grave.” (2.7.49-50) と考えてしまい、その真意が導く結論にたどり着くことができず、鉛の箱を選択肢から外してしまう。途中で格言の真意を捉え、正しい箱を選びそうになったにも関わらず、最終的な判断の際には、外見や周囲からの評価に気を取られてしまい、箱選びに失敗してしまうのだ。

モロッコ王の箱選びの判断は、銀の箱に対しても別の意味で典型的な考え方を見せている。モロッコ王は銀の箱を目の前にして、次のように述べる。

What says the silver with her virgin hue?
 ‘Who chooseth me shall get as much as he deserves.’
 And weigh thy value with an even hand.
 If though be’st rated by thy estimation
 Thou dost deserve enough: and yet, enough
 May not extend so far as to the lady. (2.7.22-28)

鉛の箱に対しては自分の価値が上だと感じて高慢な判断力を示す一方

で、銀の箱の格言の下で自分の価値を自問した時、モロッコ王は Portia に会った時に述べた、自分自身に関する数々の自信に満ちた言葉とは裏腹に、「自分はこの女性を手に入れるほどにも立派だとは言えない」と考え銀の箱を候補から外そうとする。そして、改めて三つの箱の格言を確認する時、モロッコ王は銀の箱に対して“Or shall I think in silver she’s immured, / Being ten times undervalued to tried gold? / Oh, sinful thought!” (2.7.52-54) と述べ、世間一般の価値観を引き合いに出して、銀の箱を候補から外す。

最終的に、一般世間の価値観に頼って決断するモロッコ王の選択結果は、当然の流れとして金の箱を選ぶことになる。モロッコ王は金の箱の格言を読んだ時、こう叫ぶのである。“Who chooseth me shall gain what many men desire.’ / Why, that’s the lady; all the world desired her.” (2.7.37-38) モロッコ王の考え方は「それこそこの女性だ、全世界が探し求めている」というひと言に象徴的に集約される。彼は自分自身に対する自信に欠けていて、世間の価値判断に頼って金の箱を選ぶに至り、Portia を妻とすることなく Belmont を去るのである。自分自身に対する自信がなく、世間の価値判断に頼る男は Portia の夫になることができなかつたのである。

次に現れるのはアラゴン王であるが、アラゴン王が三つの箱を見た時の台詞もまた“... Fortune now / To my heart’s hope! Gold, silver and base lead.” (2.9.18-19) であり、運を頼りにしつつも、正しい答えである鉛の箱をすでに“base”と差別的に呼んでいることで、自分の考えが運を遠ざけていることを示すのである。アラゴン王の鉛に対する解釈はモロッコ王よりも甚だしく、鉛の箱に対して“You shall look fairer e’er I give or hazard.” (2.9.21) とまで言っただけ、外側の美しさにだけ気を取られている判断力の浅ましさを象徴している。自分に対して自信が持てなかつたモロッコ王は、世間が抱く金の価値観に自分の最終決定権を委ねたが、高慢すぎるアラゴン王は、これとは対照的に金の箱を選ぶ者について次のように述べる。

‘What many men desire’: that ‘many’ may be meant
 By the fool multitude that choose by show,
 Not learning more than the fond eye doth teach,
 Which pries not to th’interior, (2.9.24-27)

「愚かな衆は見せかけだけで物を選び、それ以上、深く見極めようとしない」と、アラゴン王は、金を好む群衆をかえって見下している。それはさらに自己肯定を超えて優越感にまで達する。

I will not choose what many men desire,
 Because I will not jump with common spirits
 And rank me with the barbarous multitude. (2.9.30-32)

アラゴン王は、群衆が望むようなものを自分は欲しがらないと述べる。群衆の心に迎合するような生き方はしないからだと言う。一般的な人間の考えに同調しないことがアラゴン王の信条であるが、かえってその考え方からは正義や正誤の判断が抜け落ちてしまうことになる。それ故に、彼の優越感は正しい箱を選ぶ判断力には至らないのである。もっとも銀の箱を前にした時のアラゴン王は確信と喜びに満ちている。

‘Who chooseth me shall get as much as he deserves.’
 And well said too; for who shall go about
 To cozen Fortune and be honourble
 Without the stamp of merit? Let none presume
 To wear an undeserved dignity. (2.9.35-39)

アラゴン王は「己にふさわしくない栄華の衣を誰にもまとわせはせない」

と述べているが、「この栄華の衣」とは Portia のことを象徴的に示唆し、この栄華の衣をまとうのに値する存在は自分であると豪語していると言える。高慢なアラゴン王にとって、Portia はひとりの女性、人生の伴侶である前に、栄華を誇る衣服や宝飾品と同等の意味しか映っていないかのようである。

果たして、このように鉛の箱を選ばなかったモロッコ王とアラゴン王はそれぞれに次のような教訓を受け取ることになる。金の箱を選んだモロッコ王に関しては次のような言葉が与えられる。

All that glisters is not gold,
 Often have you heard that told.
 Many a man his life hath sold
 But my outside to behold.
 Gilded timber do worms infold.
 Had you been as wise as bold,
 Young in limbs, in judgement old,
 Your answer had not been inscrolled,
 Fare you well, your suit is cold. (2.7.65-73)

上の文言に羅列されている「輝くものは必ずしも金とは限らない」、「金箔が施されているが虫が救っている木材」「勇気に等しい知恵があれば」「若き五体に老いた思慮がありさえすれば」といった言葉は、どれもよく見聞きする忠告である。そして、モロッコ王が金の箱を選んでしまった経過はモロッコ王に特化した個人的な間違いではなく、誰もが陥りがちな誤りであることが分かる。モロッコ王が最終的に金の箱を選ぶまでの彼の台詞に、観衆や読者はその間違いに気づく事はあっても、自分は絶対にモロッコ王のような判断をしないと切り切る事はできないと感じはしないだろうか。

アラゴン王に対しても同じではなかろうか。銀の箱を選んだ際のアラゴン王が読み上げる教訓もまた、次のようなものである。

The fire seven times tried this;
 Seven times tried that judgement is,
 That did never choose amiss.
 Some there be that shadow's kiss;
 Such have but a shadow's bliss. (2.9.62-66)

確かにアラゴン王は高慢で他人よりも自身に対する自信と優越感に満ちており、その高慢さが最終的な判断を誤らせてしまったことは傍から見れば明らかである。しかし、「自分にふさわしいものを受け取るだろう」という格言を他の二つと比べて絶対に選ばないと断言できるだろうか。実際 Portia は、アラゴン王が去った後で、次のような台詞を口にする。“Thus hath the candle singed the moth. / O, these deliberate fools! When they do choose, / They have the wisdom by their wit to lose.” (2.9.78-80) 一見すると辛辣に求婚者を非難しているように受け取れるこの台詞に対して、アーデン版の註によれば“the wisdom by their wit to lose”には“inadequate reasoning and defective wisdom”という説明が加えられている。¹⁰「不十分な推察」と「至らぬ知恵」により、モロッコ王もアラゴン王も、そしておそらくはこれまで Portia の元に訪れた求婚者たちは間違った選択をしてきたのであろう。

しかし果たして Portia の“deliberate fools”という言葉は、彼女の求婚者に対する蔑みの言葉であろうか。むしろ、Portia はこれまでの間違った箱を選んで彼女を妻に迎えることを逃して来た求婚者達に対して単純な嫌悪感を見い出していただけではなく、彼らの間に大した差はないと感じ始めていたのではないだろうか。つまり、“Thus have the candle signed the moss”という言葉には、大差なく同じ間違いを犯してしまう求婚者達に対する同

情と落胆の気持ちが込められているのではないだろうか。人は往々にして、重大な決断をしなくてはいけない時、「不十分な推察」と「至らぬ知恵」によって正しい選択に辿り着けないものであることを、Portia は気づき始めていたのではないだろうか。そうでなければ、恋する Bassanio の箱選びの場面で、音楽による正解のヒントを音楽隊に歌わせるような手だてを講じるに至らなかったはずである。Portia は自分の愛する Bassanio に「若き肉体に年老いた知恵」や「七度鍛え上げられた判断力」が備わっているとは考えがたかったのだと思われる。Erikson は、青年期の人間は、理想化と失望のプロセスを繰り返す中で、他人の影響から少しずつ離れ、自分が自分の人生の主人公になっていくことに努めようとするのだと説いている。¹¹ Portia は、Bassanio が正しく鉛の箱を選んだ時、その喜びを次のように表している。

O, love, be moderate, allay thy ecstasy,
 In measure rain thy joy, scant this excess.
 I feel too much thy blessing; make it less
 For fear I surfeit. (3.2.111-14)

このように、喜びに手放しで有頂天にならぬよう自分自身に慎重になるように言い聞かせている Portia には、モロッコ王の自信の欠如やアラゴン王の高慢による失敗が教訓となり、どんな時にも慎重さや落ち着きを自身に課そうとする姿が見て取れ、自分を客観視し余裕を保とうとする、人生において必要な姿勢を身につけたことが見て取れる。ここには、劇の冒頭で父親の遺言に縛られ世界が重くのしかかっていると嘆いていた受身の Portia は、存在しない。実際 Portia は、Bassanio の妻になり新しい人生のステージに踏み込む自分の現状と理想の姿を、次のように述べるのである。

Happy in this, she is not yet so old
 But she may learn; happier than this,
 She is not bred so dull but she can learn.
 Happiest of all is that her gentle spirit
 Commits itself to yours to be directed,
 As from her lord, her governor, her king.
 Myself, and what is mine, to you and yours
 Is now converted. (3.2.160-67)

Erikson は、青年期において理想像そのままに振る舞う「同一化」のプロセスから、自分についての最終的決定権を自分で行使するという「同一性」の行為を行えるようになることが大切な発達プロセスだと唱える。¹² Portia は自分がいかなる人間であるか認識し、どのような人間として人生を歩んでゆきたいか決心もつづくに至った。他者との親密性を築いてゆく心構えができた段階、すなわち青年期を終えて入る成人としたの段階に入ったのが Portia だと言えよう。それは次のような台詞の中にも明確に表現されている。

… I was the lord
 Of this fair mansion, master of my servants,
 Queen o'er myself; and even now, but now,
 This house, these servants and this same myself,
 Are yours, my lord's. I give them with this ring
 Which, when you part from, lose or give away,
 Let it presage the ruin of your love,
 And be my vantage to exclaim on you. (3.2.167-74)

この台詞に至るまでの Portia の変化や成長を整理すると、劇の冒頭で父親の遺言によって結婚相手が定められていることを嘆いていた Portia は、求婚者たちの箱選びの失敗から人の未熟さを学び、それを己の学びとして理想とする女性像を抱くに至る。そしてこの時、夫となる Bassanio が Belmont に来る際に金銭的援助をした恩人 Antonio が、そのために借りた借金を返すことができず命を落とす危機にあることを知る。この窮地を救うために、Portia は男装し、法学博士として法廷の場に乗り込み、詭弁ともいえる法解釈によって Antonio の命を救うことになるのだが、この一連の過程は、青年期を終える準備の整った Portia の、Erikson の唱えるモラトリアムで許された遊戯的冒険を行う場面を象徴的に表しているように思われる。次章では、Portia の異性装が象徴する意味を、Erikson の理論と、エリザベス朝における異性装への見解を重ね合わせて考察し、探ることにする。

IV

異性装を思いついた心情を、Shakespeare は Portia に何と言わせているだろうか。法学博士という異性装は、彼女にとって爽快でありまた刺激的な試みであるようだ。Portia は、格好いい男性の振る舞いの数々 “wear my dagger with the braver grace” (3.4.65)、“speak between the change of man and boy/ With a reed voice” (3.4.66-67)、“turn two mincing steps/ Into a manly stride” (3.4.67-68)、“speak of frays/ Like a fine bragging youth, and tell quaint lies” (3.4.68-69) を上手に演じてみせると言う。更に、“… I have within my mind / A thousand raw tricks of these bragging jacks / Which I will practice.” (3.4.76-78) と述べて、今まで自分が見知ってきた男性としての魅力を完璧に表現してみせる試みに心を高揚させている。女性でありながら男装をして法廷に忍び込み、あらかじめ相談して得た法解釈で法廷の結末を変えようとする Portia の試みは大胆だが、この法廷の場面における Portia を

Erikson の試論に照らして考えてみたいと思う。

もともと Shakespeare の時代には、女性が舞台上上がることが許されておらず、少年俳優が女性の役柄を演じていたが、エリザベス朝における女性の男装もまたとても奇抜なことであり、許されていなかった。四百年前の Elizabeth I の治める England では、プロテスタントが国教化されたことに伴い、女性には、婦徳と呼ばれる「従順・寡黙・貞節」という三つの徳をもって夫に尽くす生き方が望まれた。¹³ 当時の England の社会は、この婦徳を女性に広めるため、「教訓本」や「女性論」を出版し、これと同時に「服装法」を制定し、女性が身に着ける衣服について、細かな規定を定めた。¹⁴ England の町や村では、服装を見れば、その人がどんな階級でどんな仕事をしているかまで一目瞭然だったのである。ところが、このような England 政府の思惑から大胆にもあざ笑ひ、奇抜な色彩やデザインを用いて、ファッションとして男装を楽しむ女性も存在した。¹⁵ 彼女たちは、政府からして見れば、束ねようとする秩序を乱す危険人物であった。

しかし、このように異端視されていた女性の男装は、Shakespeare の他の作品でも何人か登場する。男装したヒロインを登場させ、恋に悩んだり困難を乗り越えたりする魅力的な人物を描く Shakespeare の意図には、どんなものがあったのだろうか。

女性の男装は、当時最盛期に達していたルネッサンスの思想に照らし合わせてみれば、視覚的に復元された人間の理想の姿とも言える。Plato は『饗宴』の中で人間の性には本来三つの種類があり、男、女、男女（おめ）と言われる両性具有が存在したと説いている。その姿は人間が背中合わせに結合したような外見で、体はひとつ、頭と手足が二人分ずつあったのだという。このように、本来の人間の姿は、もともと二つの性がひとつになり、それで完成された形だったが、神の怒りに触れて引き剥がれてしまい、それ以来、人間は失われた半身を探し求めるようになり、それが、私たち人間が恋愛をしたり他人を愛するようになった始まりなのだという。¹⁶

England のルネッサンスにおいてギリシャ神話のモチーフが芸術作品に多く用いられるようになり、*The Merchant of Venice* においても Portia はギリシャ神話で秘宝として扱われている金色の羊に例えられる。更に Portia に求婚する Bassanio は、自分を英雄 Jason になぞらえ、Antonio に対しては、Jason の窮地を助けたギリシャの神々であるかの如く、救いの手を求めているのである。

父親に結婚相手を選ぶ方法を定められ、それを嘆き悲しんでいた Portia が、箱選びに臨む求婚者たちを通して学んだことは、人間は誰もが惑わされやすく、不完全な存在であるということだった。誰もが完璧ではないと悟った上で、自分が愛する人が箱選びをする時には、音楽に悟りの歌詞をのせて応援をした。そして、共に人生を歩むことに決めた夫の恩人を救うため、男装して法廷の場に赴いた Portia は、ユダヤ人 Shylock に、Antonio に慈悲をかけてやるよう説得するのである。Portia は言う。“The quality of mercy is not strained: / It droppeth as the gentle rain from heaven / Upon the place beneath.” (4.1.178-79) 男装をした女性が、人の命が奪われようとしている法廷の場で訴えるのは正義ではない。正しいことを相手に突きつけるだけでは、我々人間の成長は成り立たないのである。土に染み入る雨粒によって草木が育つように、我々人間も成熟してゆくのだと Portia は訴えている。男装した女性 Portia は、Plato の説く完全な人間の姿をした状態で、“It is an attribute to God himself, / And earthly power doth then show likest God’s / When mercy seasons justice.” (4.1.191-193) とも述べる。法廷が求める正義をも超える大切なものが存在し、それは「慈悲」で、この慈悲がそばにあってこそ、正義も意味を成すのだと説く。

結局 Portia の説得は Shylock の心には届かず、Portia は用意しておいた法解釈を持ちだして、Shylock が Antonio の命を奪うことを止めることに成功するのであるが、法廷において、Erikson のいう一時的な冒険的体験を終えて Belmont に戻った Portia の耳には、Gratiano の “We’ll play with

them the first boy for a thousand ducats.” (3.2.214-15) という言葉が飛び込んで来て、成年期の世界がすでに始まってしまったことを感じざるをえない。しかし Portia は Antonio に “Since you are dear bought, I will love you dear.” (3.2.312) と声をかける。Portia は、法廷という冒険を体験し、加えて Erikson のいう青年期特有の恋愛つまり、相手に自分を投射して自己確立を試みる段階を無事に終えていることが伺える。それは、法廷の場面で Portia が言った、“It is twice blest: / It blesseth him that gives and him that takes. / Tis mightiest in the mightiest;” (4.1.180-82) から分かるように、成年期における親密さを築く過程に積極的に関わっていかうとしているからである。

Notes

- 1 ウィリアム・シェイクスピア、福田恒存訳『ベニスの商人』（東京：新潮社、1967）、p. 150.
- 2 Introduction of *The Merchant of Venice: The Arden Shakespeare Third Series*. ed. by John Drakakis (Bloomsbury: London, 2011) 1. 本論文の台詞の引用は本書による。
- 3 Sinead Cusack, “Portia in *The Merchant of Venice*”, *Players on Shakespeare* 1, ed. by Philip Brockbank (Cambridge: Cambridge P, 1988), p. 29.
- 4 Alice N. Benson, “Portia, the Law, and the Tripartite Structure of *The Merchant of Venice*”, *Shakespeare Quarterly* 30, 1979, pp. 359-70. 参照。
- 5 Erikson のアイデンティティ論を基に、これまでに *Comedy of Errors*, *Twelfth Night*, *Hamlet*, *As You Like It* における主人公への考察を行った。
- 6 Erik H. Erikson, *Childhood and Society* (New York: Norton, 1963), pp. 247-69. 参照。
- 7 Erik H. Erikson, *Identity: Youth and Crisis* (New York: Norton, 1968), p. 17.
- 8 *Ibid.*, p. 156.
- 9 *Ibid.*, p. 157.
- 10 *The Merchant of Venice: The Arden Shakespeare Third Series*. p. 287.
- 11 鎌幹八郎『アイデンティティの心理学』講談社現代新書 1020（東京：講談社、

- 1990), pp. 61-62. 参照。 Erik H Erikson, *Identity: Youth and Crisis*, p. 159. 参照。
- 12 鑑幹八郎、p. 62-3. 参照。
 - 13 楠明子『英国ルネッサンスの女たち— Shakespeare 時代における逸脱と挑戦—』
(東京：みすず書房, 1999) pp. 19-23. 参照。
 - 14 *Ibid.*, p. 13. 参照。
 - 15 *Ibid.*, pp. 30-32. 参照。
 - 16 プラトン『響宴』久保勉役 (東京：岩波文庫、1952), p. 78.

メランコリーからの脱出

—— フロイト理論から見えるトウェインと
エンジェル・フィッシュたちの関係 ——

鈴木 孝

序

マーク・トウェイン (Mark Twain, 1835-1910) は、L.M. モンゴメリー (Lucy Maud Montgomery, 1874-1942) の代表作『赤毛のアン』 (*Anne of Green Gables*, 1908) を読んだあと、秘書を介して彼女に次のような賛辞を送っている。‘In “Anne of Green Gables” you will find the dearest + most moving + delightful child since the immortal Alice.’ 『赤毛のアン』 が出版されてわずか数か月後のことである。トウェインの晩年に見られた、ある種奇妙とも思える振る舞いを思い起こしてみると、アンという少女のかわいらしさをあのアリスと比較してみせたこの賛辞は、実に興味深い問題をはらんだものとして浮かび上がってくることとなる。というのも、ちょうどこの頃のトウェインは、「アクアリウム・クラブ」 (Aquarium Club) なる私的なクラブを設立し、自ら「エンジェル・フィッシュ」 (Angel-fish) と名付けた 10 歳から 16 歳ぐらいの少女たちをそのメンバーにして親交を深めていたからである。アンは 11 歳の少女という設定、『不思議の国のアリス』 (*Alice's Adventures in Wonderland*, 1865) のモデルとなった少女アリス・リデル (Alice Liddell) は当時 10 歳であった。

クラブの設立が、最愛の妻オリヴィア (Olivia Langdon Clemens, 1845-1904) を失くして 1 年ほどしてからであったことから、悲嘆に暮れたトウェインがそのさみしさを埋めるべく、そうした少女たちを自分の孫のようにかわいがることがその目的だったとも言われているが、果たしてそれだ

けなのであろうか。本稿では、70歳を過ぎた老人トウェインが夢中になった少女たちをめぐるこうした環境を、精神分析的に解釈することによって見えてくる彼の少女愛に関する考察を試みてみたい。

1

彼は自伝の中で、そのエンジェル・フィッシュたちのことを次のように説明している。

The accident I refer to, was the advent of Dorothy Butes, fourteen years old, who wanted to come and look at me. Her mother brought her. There was never a lovelier child. English, with the English complexion; and simple, sincere, frank and straightforward, as became her time of life. This was more than two years ago. She came to see me every few weeks, until she returned to England eight months ago. Since then, we correspond.

My next prize was Frances Nunnally, schoolgirl, of Atlanta, Georgia, whom I call Francesca for short. I have already told what pleasant times we had together every day in London, last summer, returning calls. She was sixteen then, a dear sweet grave little body, and very welcome in those English homes. She will pay me a visit six weeks hence, when she comes North with her parents Europe-bound. She is a faithful correspondent.¹

これに続けて次々と少女の名前、その少女の特徴、彼女とどこで出会ったか、一緒に何をしたか、などを列挙していったトウェインはそのあとこう述べている。

All the ten schoolgirls in the above list are my angel-fishes, and constitute my Club, whose name is “The Aquarium,” and contains no creature but these angel-fishes and one slave. I am the slave. The Bermudian angel-fish, with its splendid blue decorations, is easily the most beautiful fish that swims, I think. So I thought I would call my ten pets angel-fishes, and their Club the Aquarium.²

また別の箇所には次のような説明も見られる。

I suppose we are all collectors, and I suppose each of us thinks that his fad is a more rational one than any of the others. Pierpont Morgan collects rare and precious works of art and pays millions per year for them; . . . As for me, I collect pets: young girls—girls from ten to sixteen years old; girls who are pretty and sweet and naïve and innocent—dear young creatures to whom life is a perfect joy and to whom it has brought no wounds, no bitterness, and few tears. My collection consists of gems of the first water.³

つまりトウエインは、そうした年齢の少女たちを“collect”し、エンジェル・フィッシュと呼び、アクアリウム・クラブなるものを結成していたということになる。その少女たちとトウエインは、頻繁に手紙のやりとりをしたり、自宅へ呼んだり、トウエインが登壇する講演会の場に招待したりしていたらしい。最初に名前が挙げられたドロシーとの手紙のやりとりが始まったのが1907年、トウエインの自伝によればドロシーが彼にとっての最初のエンジェル・フィッシュということになる。実は彼女の前にもすでに少女との付き合いそのものは始まっていたらしく、少女たちとの書簡集を編集したクーリー（John Cooley）によれば、それは1905年12月頃にまでさかのぼり、その頃からトウエインが亡くなる直前までやりとりされた手

紙の数は300通にも達するという。⁴『赤毛のアン』を絶賛したのが1908年。そのときまさに、トウェインはそうした少女たちとの付き合いのまっただ中であつたわけである。

さてトウェインは、なぜこうした、ある意味奇つ怪とも言える行動を取つたのだろうか。少女たちとの付き合いに、彼は一体何を求めたのだろうか。その行動に、果たしてどのような意味が隠されているのだろうか。

2

エンジェル・フィッシュとの交際に関する先行研究は大きく二つに分かれている。例えばヒル (Hamlin Hill) は、次のような解釈を試み、少女たちとの付き合いの中にセクシャルな意味を読み取っている。

The strange emotional mixture in his attitude toward young girls was paternal enough to suggest that they were surrogates for his daughters but implicitly sexual enough to reflect the image of the sweetheart whose memory obsessed him until the end of his life.⁵

And, finally, Albert Lee, an employee of Robert Collier who as in Bermuda in March, claimed that he knew

some story ... which ... is something very terrible that happened in Bermuda shortly before M. T.'s death ... It is something unprintable ...

It is difficult to interpret what such scanty evidence implies. But it is at least possible that Clemens' jealousy erupted into an overt expression that frightened or offended the Allens. Perhaps Helen, the last of the fifteen-year-old surrogates for lifelong sweetheart Laura Wright, was the object of

improper comments or even actions.⁶

一方、このエンジェル・フィッシュたちとの交際をトウエインがなんらかの代用と考えていたとする解釈も数多く見られる。例えば、娘たちの代理を求めたとする解釈を提示しているのがスカンデラ＝トロンプリー (Laura E Skandera-Trombley) であり、ライストラ (Karen Lystra) である。

I would offer a less sensational interpretation of Clemens's fascination with young girls than Hill's allegations. It appears that Clemens's meetings and correspondence with his bevy of Angelfish were an attempt to form another chorus of substitute daughters for whom he could spin tales. Ideally, Clemens could then go and write his fiction and return to read his efforts aloud to them, reenacting those halcyon days of Quarry Farm and Farmington Avenue.⁷ (下線部筆者、以下同。)

But the Angelfish also served a compensatory function. These young girls may have reminded him of Susy, his favorite, whom he could further idealize in her early death. They may have recalled his own lost youth or fed some lifelong nostalgia for the honesty and simplicity of childhood, especially as it had appeared in the Hartford years when his three daughters were young. But their most immediate context concerned his late-life relationships with Clara, who was home only sporadically, and with Jean, who had disappeared into the exile of her illness. Clemens appears to have tried to fill a deep emotional hole with fictive kin; Lyon as surrogate wife and the Angelfish as surrogate children. In many ways, his strategy was both ingenious and workable.⁸

また、前述のクーリーの解釈もスカンデラ＝トロンプリー やライストラ同様、セクシャルな意味ではなく、トウェインが若かりし頃に経験したプラトニックな恋愛との関連を探ったものとなっている。

As Clemens observed in his notebook and dictations, he suffered from loneliness and longed for school-age girls who would write and visit him like grandchildren and remind him of his daughters when they were younger. Beyond that, Clemens was probably in love with his memory of himself as a boy or young man. He overcame his sense of loss and fulfilled his formula for happiness by surrounding himself with young women. His angelfish behavior was certainly unusual, even obsessive, but it was also the final expression of a lifelong love affair with teenage years.⁹

不適切な関係、セクシャリティーの存在を否定するこれらの解釈に共通しているのはいずれも、エンジェル・フィッシュたちが、トウェインの娘たちの代理として機能していたということ、そしてそうした少女たちとふれあうことでトウェインは、自分の娘たちがまだ小さかった頃の楽しい生活を再現しようとしていた、という点になるだろうか。もう少し突っ込んだ解釈としては、不適切な関係にはなかった、プラトニックな、みずからの若かりし頃の実らなかった恋の思い出とのつながり、ということになるだろう。

3

では、トウェイン本人は、この少女たちとの交際をどのように考えていたのだろうか。“The accident I refer to . . .” から始まるひとつめの引用の前に、彼は自伝の中で次のように語っている。

After my wife's death, June 5, 1904, I experienced a long period of unrest and loneliness. Clara and Jean were busy with their studies and their labors, and I was washing about on a forlorn sea of banquets and speech-making in high and holy causes ... I had reached the grandpapa stage of life; and what I lacked and what I needed, was grandchildren, but I didn't know it.¹⁰

彼の自伝は、自由連想に基づく口述筆記という特殊な形で構成されており、それがこの自伝の大きな特徴となっている。その特徴ある展開を重視するならば、ここで露わにされたトウエインの心境が、エンジェル・フィッシュたちとの付き合いに何らかの形でつながっていったのではないかと考えてもおかしくはない。ここで言及されている娘たちは次女と三女である。長女スージーは 1896 年、この口述筆記がされる 12 年前に病気で亡くなっている。いずれにしても、この残ったふたりの娘ともどうやらあまりうまくいっていない様子が見て取れる。ライストラの指摘にもあるように、事実、当時のトウエインはその娘たちとは別居中であり、彼女たちはあまり父親に会いに来ることもなかったという。そうしたことから推測すれば、やはり、こんなことが言えるだろう。トウエインが少女たちと付き合い始めたのは、娘たちの代わりを求めたからだ、と。

引用の中で本人は「孫、と表現はしているものの、アクアリウム・クラブに男子が一切含まれていない以上、「私には孫が必要だったのだ」というトウエインの言葉をそのまま鵜呑みにするわけにはいかないだろう。彼の心境としては、むかしのまだ小さかった頃の娘たち、すなわち今のトウエインにとってみれば孫のような年代になるあの頃の娘たちとのかつての楽しかった日々を取り戻したいという思いから、エンジェル・フィッシュたちを集めたのではないかと、トウエイン本人の説明からも一応はそ

う言えるかもしれない。

しかしながら、ここでとくに注目したいのは、この引用で見た「孫が必要だったのだ」という、エンジェル・フィッシュを求めたトウェイン本人の理由が、「妻を亡くしたあとで」という言葉から始まっているという点である。それだけではない。この日の口述筆記の冒頭もまた、次のように、妻への言及から始まっているのである。

One day at Riverdale-on-the-Hudson Mrs. Clemens and I were mourning for our lost little ones. Not that they were dead, but lost to us all the same. Gone out of our lives forever—as little children.¹¹

さらに言えば、この記述のあとには、実際にこの世を去ってしまった長女スージーの死を文字通り“mourn”する5ページにもわたる長い詩が挟まれている。その詩のあとに「孫が欲しい」という箇所が来て、さらに最初の引用である「エンジェル・フィッシュ」の話へと続いていくことになるというわけである。妻と歩きながら、娘たちの成長に伴い失ってしまったものを嘆き悲しんだと始まるこの日の口述筆記、さらには、これから10人のエンジェル・フィッシュが列挙されようとするその直前に、最愛の妻を亡くしたことへの言及があること、そしてそのあいだに、長女の死を悼む長い詩が挿入されていること、そうしたことから考えてみると、トウェインのエンジェル・フィッシュを集めるという行為には、妻の死や娘の死が、単にさみしさを埋めるためといったものではなく、もっと重要な意味を持ったものとして関係しているのではないか、と思われてくるのである。

とりわけ最愛の娘であるスージーを失ったことを重視し、その代わりの

存在をエンジェル・フィッシュたちに求めた、とする先行研究は確かに少なくない。しかしここでは、妻と娘の「死」そのものにもう少し焦点を当てて、エンジェル・フィッシュとの関係を探ってみたいと思う。愛する人を亡くすという出来事に注目してみたとき、それに直面した人間の精神障害に関してジークムント・フロイト (Sigmund Freud) が考察した論文、「喪とメランコリー」が重要な示唆を与えてくれるように思われる。その論文の中でフロイトは、喪とメランコリー (鬱病) というふたつの情動を比較している。どちらも、愛するものを亡くすなどの特定の出来事をきっかけに生まれるものではあるが、喪の方は「喪の仕事」というのを通じてやがてその出来事から被った苦しみに解放され、正常な状態に戻るのに対して、メランコリーの方は、その仕事に失敗してしまったがために発病するものである、とフロイトは説明している。¹² 続けてフロイトは次のような、メランコリーの特徴を挙げている。

メランコリー の心的な特徴をあげてみると、深刻な苦痛に貫かれた不機嫌さ、外界への関心の喪失、愛する能力の喪失、あらゆる行動の抑止と自己感情の低下などがある。この自己感情の低下は、自責と自己への軽蔑として表現され、ときには妄想的に自己の処罰を求める欲求にまで高まることもある。¹³

さらに続けてフロイトは言う。

喪では、外界が貧困になり、空虚なものとなる。ところが鬱病では、貧しくなるのは自我そのものなのである。鬱病の患者はみずからの自我を、価値のないもの、無力で、道徳的に咎められるべきものと表現するのである。患者はみずからを責め、みずからを罵倒し、追放され、処罰されることを期待さえしているのである。患者はだ

れの前でも卑下する。自分にかかわりのあるすべてのことについて、それがかくも卑しい人格とかかわりをもつのは悲しむべきことだと嘆くのである。

患者は自分に起きた変化についてうまく判断できない。そして過去にまで自己批判の刃を向け、自分はこれまで善き人であったことがないと咎めるのである。¹⁴

つまり、フロイトの目を通して見ると、トウェインはメランコリー患者となる。

例えば、魂の不滅など信じていなかった、というトウェインが、病床に伏せ死ぬのが怖いとおびえる妻オリヴィアを気遣って、悩み、迷いながらもみずからのそうした考えの翻意をほのめかしていたというのだが、¹⁵『マーク・トウェインのラブレター』(*The Love Letters of Mark Twain*)を編纂したウェクター (Dixon Wecter) によれば、それはその場限りの、死が目前にまで迫っていた妻に対する取り繕いに過ぎず、結果的にそうした振る舞いが、トウェインに大きな後悔の念を引き起こすことになったと指摘している。¹⁶ 次女クララは、父親のそのときの心情を妻宛の手紙の中に読み取り、次のように語っている。

He wrote another of his self-censuring letters based on the idea that some of his frankly expressed criticism of Mother's religious faith, might have caused mental suffering sufficient to bring on her serious illness.

“ I do love you so, my darling and it so grieves me to remember that I am the cause of your being where you are. I WISH — I WISH — but it is too late. I drove you to sorrow and heart-break just to hear myself talk. If ever I do it again when you get well I hope the punishment will fall upon me the guilty, not upon you the innocent.”¹⁷

さらに、『マークとリヴィ』(Mark and Livy)の著者ウィリス(Resa Willis)はこうしたトウェインの心情を次のように解釈している。

Clemens had spent much of his life blaming himself for often uncontrollable incidents that took place in his life. He condemned himself for their firstborn son Langdon's death at nineteen months of diphtheria and of their favorite daughter Susy's death at twenty-four of spinal meningitis. Now he added his wife's homelessness and death to his list of self-recriminations. After her death, in an attempt to expiate his self-induced guilt that he had made his wife homeless, he wrote her brother Charles Langdon to assure him that he had not spared any expense or consideration in caring for her.¹⁸

ウィリスはさらに、ペイン(Albert Bigelow Paine)の自伝からノートブックの記載を引用した上で次のように指摘する。

In his notebook Clemens chided himself, "I was full of remorse for the things done & said in these 34 years of married life that hurt Livy's heart." He blamed himself for staying too long in her room the night died and for all the hurtful things, real or imagined, he said to her over years.¹⁹

その死を悼む長い詩を書いた最愛の娘を病気で失ってしまったときも同様に、トウェインは、まさにフロイトがメランコリーの特徴として挙げた、「自責と自己への軽蔑」や「妄想的に自己の処罰を求める欲求」に満ちあふれた文章、みずからの自我は「価値のないもの、無力で、道徳的に咎められるべきもの」であり、「みずからを責め、みずからを罵倒し、追放され、

処罰されることを期待さえしている」と語っているかのように見える文章を数多く残している。²⁰

You & Clara are making the only sad voyage of all the round-the-world trip. I am not demonstrative; I am always hiding my feelings; but my heart was wrung yesterday. I could not tell you how deeply I loved you nor how grieved I was for you, nor how I pitied you in this awful trouble that my mistakes have brought upon you. You forgive me, I know, but I shall never forgive myself while the life is in me.²¹

I have spent the day alone—thinking; sometimes bitter thoughts, sometimes only sad ones. Reproaching myself for laying the foundation of all our troubles and this final disaster in opposing Pamela when she did not want Annie to marry that Webster adventurer. Reproaching myself for a million things whereby I have brought misfortune & sorrow to this family … Yes, & I have been searching for letters—fruitlessly. I have no letter that Susy wrote me—oh, not so much as a line … I wish she had written something to me—but I did not deserve it.²²

5

1896年に娘スージーを亡くしてメランコリーになりかけていたトウェインは、その8年後に妻を亡くし、本格的にその病を発症した、とでも言えるだろうか。いずれにしてもトウェインは、妻を亡くしたそのわずか1年ほどのちに最初のエンジェル・フィッシュを集め始めた。その時期に、トウェインが手紙の中で頻繁に吐露していた自責の念にいまだ苛まれていたとするならば、フロイトの言う「喪の仕事」に一度は失敗してしまった

トウェインは、少女たちとの交際を通じてその仕事に再挑戦し、メランコリーを解消しようとしていた、と言えるのではないだろうか。残念ながらフロイト自身は、このメランコリーがどのようにして終結していくのかについては、この論文では明確に触れていない。しかしながら、フロイトの次のような説明は、トウェインのこの「喪の仕事」への再挑戦という解釈に対して、十分な論拠を与えてくれるように思われる。

鬱病患者が語る自己への多様な非難の言葉に忍耐強く耳を傾けていると、こうした言葉のうちでもとくに強い非難の言葉が、患者の人格にあてはまることはごく稀であることに気づく。わずかな修正を加えてみればその多くは、患者が愛する人、かつて愛した人、または愛そうとして愛せなかった人に該当するものではないかという印象を払いのけることができなくなるのである。そして実際の状況を調べてみればみるほど、この推測は確認されるのである。自己への非難の言葉は、もともとは愛する対象に向けられるべき言葉であり、これが方向を変えて自我に向けられたものだと考えると、鬱病の病像の鍵が手に入るのである。

「自分のようなできそこないの女と結婚して、あなたがかawaiiそうだ」と語る妻は、それがどのような意味で言われたとしても、もともとは夫ができそこないだと告発しているのである。・・・こうした自己への非難は、愛情の喪失の原因となった愛情の葛藤を肯定する気持ちからも、否定する気持ちからも生まれることがある。

こう考えると、鬱病患者の態度は理解しやすくなる。語の古い意味で、彼らの愁訴は告訴なのである。彼らが自分を卑下して語るすべての言葉は、基本的に他者を指して語られているのであるから、それを語ることを恥じることも、隠すこともないのである。患者は品格の卑しい人物にふさわしい形で、周囲の人々に自分の謙遜や卑

下の気持ちを表明しているのではない。むしろ周囲の人々からひどく不当な目にあわされた人物であるかのように、これ以上ないほど苦しみ、自尊心を傷つけられているのである。・・・そして特定のプロセスを経ると、これは鬱病的な後悔の念に変わることがある。²³

さらに続けてフロイトは、

このプロセスを再構成するのは困難なことではない。患者は対象選択を行い、リビドーを特定の人物に固着させたのである。ところが愛する人から実際に侮辱されたり、失望を味わわされたりすると、それに影響されてこの愛する対象との関係が揺らいでしまう。ふつうであればリビドーをこの対象から引きあげて別の新しい対象に移すのであるが、さまざまな条件のもとでは別の反応が発生することがある。²⁴

と語っている。例えば、上に挙げた引用の「自尊心を傷つけられている」という表現、あるいは、「愛する対象との関係が揺らいでしま」ったとき、「ふつうであればリビドーをこの対象から引きあげて別の新しい対象に移す」のだというフロイトの説明にとりわけ注目してみれば、こうしたことが言えるのではないか。すなわち、妻や長女を亡くしたあとに繰り返し吐露される後悔の念、あるいはみずからを徹底的に卑下する表現などから考えられるように、トウェインは一種のメランコリーに陥ってしまった。このような自己批判は、フロイトによれば、「もともと愛する対象に向けられるべき言葉」が「方向を変えて」自己へと向かったものであり、それらは「これ以上ないほど自尊心が傷つけられている」ことを示している。そしてその結果、妻や長女という「愛する対象との関係が揺らいで」しまったトウェインだが、彼の場合はかろうじて「リビドーをこの対象から引きあげ

て別の新しい対象に移」そうとすることで、メランコリーからの脱出を図ろうとすることができた、その新しい対象がエンジェル・フィッシュたちであった、と。そう考えてみると確かに、彼女たちとの交際を通じて、自己卑下、自己批判からなんとか逃れようとするトウェインの姿が見えてくる。

By and by this knowledge came by accident, on a fortunate day, a golden day, and my heart has never been empty of grandchildren since. No, it is a treasure-palace of little people whom I worship, and whose degraded and willing slave I am. In grandchildren I am the richest man that lives to-day: for I *select* my grandchildren, whereas all other grandfathers have to take them as they come, good, bad and indifferent.²⁵

先の「孫が欲しい」という引用の直後のトウェインの言葉である。さらにもう一度、“All the ten schoolgirls” から始まる引用文も見ていただきたい。そこでトウェインは、自分は“slave”だと語っていた。大人の女性へと成長する前の、10歳から16歳の少女たち相手であれば、「実際に侮辱されたり、失望を味わわされたり」することもない。たとえあったとしてもそれはそれほど大きな傷を残すことにはならないだろう。先の引用に繰り返し見られる、本来であれば、人間存在そのものを否定する屈辱ともなるはずの“slave”という身分、役割に、自ら進んで甘んじるのだというトウェインの言葉、あるいは、彼女たちの中にあって自分は“the richest man that lives to-day”なのだという言葉は、少女たちとの付き合いが、当然のことながらトウェイン優位で進められるものであり、そういう付き合いが可能だからこそ、その結果として、傷つけられてしまったみずからの自尊心を取り戻すことができる行為になりうるのだ、ということを物語っているのである。

結

西部生まれのトウェインが、上流階級の典型だったとも言われる東部の令嬢に求婚したとき、相手の家族には財産目当てではないかという疑念まで持たれたという。²⁶ これまで見てきたフロイト理論の援用が妥当であるとすれば、それでもなんとかその令嬢を妻に迎えたトウェインではあったが、本人は最期まで、この結婚が自分にとって分不相応なものだったのではないか、という意識に苛まれていたとも言える。その意識が、妻の死を契機にして、愛する人からの侮辱や愛する人への失望という形で表面化したのかもしれない。彼は妻宛の手紙に「君はもっと立派な男の妻となるべきだったんだ—君の水準にもっと近い男の妻に」という言葉さえ残しているが、²⁸ それもまた、フロイトがメランコリー患者の特徴の一つとして挙げた「自分のようなできそこないの女と結婚して、あなたがかawaiiそうだ」と語る妻の例と完全に合致している。愛する娘や妻を次々と失くしてしまった晩年のトウェインは、少女たちを集め交際を始めた。そこにはセクシャルな意味があったとも言われ、またそれは、亡くした娘の面影、あるいは過ぎ去った娘たちとの思い出を追ったものだとも言われる。しかしながら、フロイトの理論を援用し、精神分析的な視点から改めてこの行動を考察し直してみても見えてきたのは、愛する人々を亡くした際に行う「喪の仕事」に失敗し、メランコリーとも言える症状に陥ってしまったトウェインが、大人へと成長する前のエンジェル・フィッシュたちと交際することで、そこからなんとか抜け出そうとする姿であった。

* 本稿はサイコアナリティカル英文学会第44回（平成29年度）大会（平成29年10月21日）で口頭発表した原稿に加筆修正したものである。

Notes

- 1 Mark Twain, *Autobiography of Mark Twain. Volume.3*. Ed. Harriet Elinor Smith (Berkeley: University of California Press, 2015), p. 219.
- 2 *Ibid.*, p. 221.
- 3 *Ibid.*, p. 202.
- 4 John Cooley, ed. *Mark Twain's Aquarium: The Samuel Clemens — Angelfish Correspondence, 1905-1910* (Athens and London: The University of Georgia Press, 1991), p. xvii.
- 5 Hamlin Hill, *Mark Twain: God's Fool* (New York: Harper & Row, Publishers, Inc., 1973), p. 128.
- 6 *Ibid.*, p. 261. ここで言及されたヘレン (Helen Allens) とは、エンジェル・フィッシュのメンバーの一人であり、ローラ (Laura Wright) というのは若い頃にトウエインが恋をした、しかしその恋は実らなかつた相手である。ロバート・コリアー (Robert Collier) は P. F. Collier and Son 出版社を経営し、トウエインの作品を安価な価格で出版しようと画策した。
- 7 Laura E Skandera-Trombley, *Mark Twain in the Company of Women* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1994), pp. 182-3. クワリ・ファーム (Quarry Farm) はトウエイン一家が 1870 年から 1889 年にかけて夏を過ごした場所、ファーマントン・アベニュー (Farmington Avenue) はハートフォード (Hartford) にあり、1874 年から 1891 年まで一家が過ごした家があった場所である。
- 8 Karen Lystra, *Dangerous Intimacy: The Untold Story of Mark Twain's Final Years* (Berkeley: University of California Press, 2004), p. 132. トウエインには子どもが四人いた。ただし、結婚してすぐに生まれた一人目の長男は 2 歳で病死している。あとの三人はすべて娘で、長女スージー (Olivia Susan "Susy" Clemens, 1872-1896)、次女クララ (Clara Langhorne Clemens, 1874-1962)、三女ジーン (Jane Lampton "Jean" Clemens, 1880-1909)。ライストラは、「ある伝記家は、クレメンズが潜在的なセクシャリティーに突き動かされたと非難した。その主張は的外れと言える。フロイトの無意識以降、潜在的なセクシャリティーを持たない大人などいないからである。・・・ペインはその当時まだトウエインと強いつながりがあったが、自分の娘ルーズ (Louise Paine Moore) がエンジェル・フィッシュの一員だったことに何の不安も抱いていなかったことも、それが子どもにふさわしい関係だったことを示している。さらに言えば、少女たちと交

わした手紙には、エロティックな内容などほとんどない。それらはおどけた調子ではあるが、みだらなやりとりなどではなかったのである。」と、ヒルの解釈に真っ向から反論している (*Ibid.*, p. 131)。

- 9 Cooley, *op. cit.*, p. 282.
- 10 Twain, *op. cit.*, p. 219.
- 11 Twain, *op. cit.*, p. 213.
- 12 ジークムント・フロイト「喪とメランコリー」『人はなぜ戦争をするのか：エロスとタナトス』中山元訳（東京：光文社古典新訳文庫、2008）、pp. 101-104. 参照。
- 13 *Ibid.*, p. 102.
- 14 *Ibid.*, p. 106.
- 15 Twain, *The Love Letters of Mark Twain*. Ed. Dixon Wecter (New York: Harper & Brothers Publishers, 1949), p. 348.
- 16 *Ibid.*, p. 345.
- 17 Clara Clemens, *My Father Mark Twain* (New York: Harper & Brothers Publishers, 1931), p. 251.
- 18 Resa Willis, *Mark and Livy: The Love Story of Mark Twain and the Woman Who Almost Tamed Him* (New York: Routledge, 2004), p. 7.
- 19 *Ibid.*, p. 10.
- 20 長女を亡くしたこの頃、彼は事業の失敗で多額の借金を抱えてしまい、その負債の返済に世界各国へ講演旅行に出かけている。それに同行したのは妻オリヴィアと次女クララ。長女のスージーは病気のために、また三女ジーンは学校の関係でアメリカに残り、2年後にイギリスで合流という予定であった。トウェインたちがイギリスについてまもなく、スージーの容態が悪化したとの知らせを受け、妻と次女が急いでアメリカへ戻ることになる。家族の願いも空しく、彼女たちがまだ船上にいる間に、スージーは亡くなってしまう。その前後に、トウェインは妻オリヴィアに手紙を書いた。
- 21 Twain, *op. cit.*, p. 317.
- 22 *Ibid.*, p. 320. このほかの例として、例えば「僕はわがままな理由でみんなとのやりとりをおろそかにしているように、スージーとのやりとりもおろそかにした。」(*Ibid.*, p. 322) や、「スージーは我々の家で死んだ—他の人の家ではなかった。隅々までよく知っていて大切にしていたところで死んだ。僕の罪でスージーを、貧民に、放浪者にするまではずっと暮らしていたところで死んだんだ。」

(*Ibid.*, p. 326) などがある。

23 フロイト、*op. cit.*, pp. 111-12.

24 *Ibid.*, p. 113.

25 Twain, *Autobiography of Mark Twain*, p. 219.

26 Willis, *op. cit.*, pp. 39-42.

27 Twain, *The Love Letters of Mark Twain*, pp. 318-9.

“The Bear” にみる少年の成長

有働牧子

序

ウィリアム・フォークナー（William Faulkner, 1897-1962）の“The Bear”は、1942年5月に *Saturday Evening Post* 誌に発表された。フォークナー作品の中でも特に高い評価を受けている狩猟物語であり、のちに短編集 *Big Woods*（1955）に収められた。この作品にはもうひとつのテキストがあり、長編小説 *Go Down, Moses*（1942）に収められたもので、そのテーマに合わせて1章が新しく加えられ、全5章からなっている。本稿では *Big Woods* 版について論じる。

フォークナーがインタビューで語っているとおり、この作品は彼自身の子どもころの経験を基にしている。

There used to be a bear like Big Ben in our county when I was a boy. He'd gotten one paw caught in a trap, and 'cause of that, folks used to call him Reel Foot, cause of the way he walked. He got killed too, though not so spectacularly as I killed him in the story of course ... (drawing on pipe reflectively.) I took Hogganbeck from a fella that worked for my father. He was about thirty, but had the mind of a fourteen-year-old. I was about eight or nine. 'Course, me being the boss's son, we always did what I wanted to do. It's a wonder we survived, some of the things we got into. It's a wonder ...¹ (下線筆者)

この発言を読んでいると、フォークナーが当時のことを懐かしく回想している様子が目に浮かぶようである。また、特に下線部から、彼は“The

Bear”を書くことによって当時を追体験していたとも考えられる。そして、「あんなことをしながらなぜ生き残ったのか不思議だ」という発言からは、作品において、当時の自分と同じくらいの年齢であるアイク（Ike, Isaac McCaslin）の言動を通して、その疑問を解明したかったのではないかという推測も可能である。

Harry Thomas は、“Like Isaac McCaslin, I am a white southerner who was dragged to the woods as a boy and taught to hunt”²と振り返りながら、アメリカ南部など習慣的に狩りをする地域の人々にとって、狩りとは単に楽しみであるだけでなく、少年や若者たちが大人の男としてのルールに合わせて“仕込まれる”時間でもあり、アイクにとってもそうであると指摘している（Whatever pleasures Ike may find in the woods, his time there also grooms him for his entry Southern ruling class manhood.³）。しかしながら、作品の中でアイクは、大人たちのルールややり方をそのまま受け入れているわけではない。彼は10歳にしてすでに使い方をマスターした銃やコンパスを置いてひとりで森に入り、周囲を驚かせるのである。フォークナーは、「精神年齢は14歳」のかつての使用人と一緒に、事実上子どもたちだけで森の中で過ごしていた思い出をもとに、大人のルールでは説明できない、生き残るために大切な何かを、アイクを通して描き出そうとしたのではないだろうか。本稿では、アイクが他のハンターたちと異なっている点に着目しながら、その独自の成長について考察したい。

1. 自然への挑戦

“wilderness”（自然）が重要な位置を占めるこの作品において、登場人物たちにとって狩りとは、動物ではなく自然との戦いを意味していた。

… he had heard the best of all talking. It was of the wilderness, the big woods, bigger and older than any recorded document … It was of the men,

not white nor black nor red but men, hunters, with the will and hardihood to endure and the humility and skill to survive, and the dogs and the bear and the deer juxtaposed and relieved against it, ordered and compelled by and within the wilderness in the ancient and unremitting contest according to the ancient and immitigable rules which voided all regrets and brooked no quarter …⁴

ここでは、人間に対して、自然に支配された動物たちが対置されている。人間が対峙しているのは、動物たちの背後に厳然と立ちはだかる自然なのである。人間が持つという「謙虚さや（狩りの）スキル」はそれまでの経験から生まれてくるはずのもので、過去を意味しており、「意志や大胆さ」はそれらのある程度振り払おうという現在を示唆している。その一方で、自然に関する「あらゆる後悔を帳消しにする」とか「いっさいの慈悲を許さない」という記述は、常に一新されている状態を表現している。つまり狩りとは、時間の流れの中で生まれて生きて死んでいく運命にある人間による、時間を超越した自然への途方もない挑戦なのである。

その中であって大熊オールド・ベン（Old Ben）は、他の動物と違って自然に支配されているのではなく、自然そのもののような存在だった。そのことは、次のような描写に顕著である。

… that doomed wilderness whose edges were being constantly and punily gnawed at by men with plows and axes who feared it because it was wilderness, men myriad and nameless even to one another in the land where the old bear had earned a name, and through which ran not even a mortal beast but an anachronism indomitable and invincible out of an old dead time, a phantom, epitome and apotheosis of the old wild life which the little puny humans swarmed and hacked at in a fury of abhorrence and

fear like pygmies about the ankles of a drowsing elephant; —the older bear, solitary, indomitable, and alone; widowed childless and absolved of mortality … (p. 13)

「子を持たず、死を免れている」ベンは、時間を超越した自然と同じである。さらに、自然が人間たちによって「ちまちまと齧られている」のと同じように、熊の足にも人間の罠によって負わされた傷があるのだった (the big old bear with one trap-ruined foot [p. 12])。ゆえに、アイクが対面を果たしたとき、それは「不動で、自然に固定された」ように見えたのである。

It did not emerge, appear: it was just there, immobile, fixed in the green and windless noon's hot dappling, not as big as he had dreamed it but as big as he had expected, bigger, dimensionless against the dappled obscurity, looking at him. (p. 30)

このように自然そのもののような大熊を相手取るのがいかに尊大不遜であるか、アイクは狩りに参加するようになってすぐに気がついてきた (To him, they were going not to hunt bear and deer but to keep yearly rendezvous with the bear which they did not even intend to kill. [p. 14])。言い換えれば、幼いアイクだけが“wilderness”を真摯に受け止め、その偉大さに恐れを抱いていたのである。

ところが大人たちは本気だったのであり、ライオン (Lion) という獠猛な犬の登場によって熊狩りは一気に勢いづく。ライオンは次のように描写されている。

It lay on its side while Sam touched it, its head and the gaunted body, the dog lying motionless, the yellow eyes open. They were not fierce and

there was nothing of petty malevolence in them, but a cold and almost impersonal malignance like some natural force. (p. 40)

ここから、ライオンもまたオールド・ベンと同じように自然を体現する生き物だったことがわかる。つまり、独力では到底自然に立ち向かえないハンターたちは、自然を体現するライオンを利用することによって、自然に立ち向かったのである。ここで思い出されるのは、作品の冒頭、ガイド役のサム (Sam Fathers) が人間よりはオールド・ベンやライオンに近い存在として描かれていたことである (only Sam and Old Ben and the mongrel Lion were taintless and incorruptible [p. 11])。ライオンを見つけ、狩りに同行させるまでに仕込んだのがサムであることも併せて考えると、ハンターたちは、自然に立ち向かっているように見えて、じつのところ自然対自然の戦いの傍観者でしかなかったのである。

2. アイクだけが成し遂げたこと

このような中で、少年アイクは、大人の中に一人だけ混じった子どもというせいもあってか、主張も反発もせずに大人たちの行動をつぶさに観察していた。先に述べたとおり、ベン狩りの無謀さに気づいていたことも含め、彼の優れた洞察力がうかがえる個所はいくつか見受けられるが、例えば次のような場面もそのひとつである。サムが飼っていた家畜が襲われ、皆で足跡を調べながら誰 (何) の仕業か話し合っていたとき、アイクだけはサムの様子をじっと観察していた。

Still Sam said nothing. The boy watched him while the men knelt, measuring the tracks. There was something in Sam's face now. It was neither exultation nor joy nor hope. Later, a man, the boy realized what it had been, and that Sam had known all the time what had made the tracks

… (p. 36)

このようにアイクは、大人たちの行動に惑わされず、どこに答えが隠れているのかを鋭い洞察力で見抜いていたのである。

この描写においてさらに留意すべきは、当時はその意味も分からず観察していたものを、後になって咀嚼し、理解している点である。一般的に、理解できないものや腑に落ちないものを与えられた場合、理解しないまま形骸的に固持し続けるか、そうでなければしばらくして忘却の淵に沈めてしまうことが多い。しかしアイクは少年時代に理解できなかったことをずっと覚えていて、しかもつねに理解に努めていたのである。ここにアイクと世間一般の人たち、ないしは他のハンターたちとの決定的な隔りがある。このことについて、コンプソン将軍 (General Compson) は次のように説明している。

“—And you shut up, Cass [McCaslin, Ike’s cousin],” he said, though McCaslin had not spoken. “You’ve got one foot straddled into a farm and the other foot straddled into a bank; you ain’t even got a good hand-hold where this boy was already an old man long before you damned Sartoris and Edmondses invented farms and banks to keep yourselves from having to find out what this boy was born knowing and fearing too maybe but without being afraid, that could go ten miles on a compass because he wanted to look at a bear none of us had ever got near enough to out a bullet in and looked at the bear and came ten miles back on the compass in the dark; maybe by God that’s the why and the wherefore of farms and banks.”
(p. 76)

ここでは、マキャスリン (McCaslin) を含む一般的な人間とアイクとの違

い、そして、アイクだけが持つ性質がいかに尊いものであるかが説明されている。サートリス家 (Sartoris) やエドモンズ家 (Edmonds) の人間が農場経営や銀行経営に従事したように、われわれは成長するにつれて何らかの知識やスキルを身につけ、創造的な仕事に打ち込みたいと思うものである。しかしそれは一方で、コンプソン将軍が指摘するように、もっと困難な課題から自分を遠ざけておくための口実に過ぎない。もっと困難な課題とは、下線部にあるとおり、「生まれながらに知っていて、恐れてはいるが怯んではないもの」を探すことである。コンプソン将軍は、アイクがそれを持っているといいながら何であるか明言していないし、このあと “I reckon you still ain’t going to tell what it is?” (p. 76) と聞かれたアイクもまた、答えることはできなかった。しかし、重要なのは、アイクがそのように明言できないものを避けることなく、「恐れながらも怯まずに」直視している点であり、アイク以外の大勢はそのことの困難さに圧倒され、「銀行」や「農場」などの分かりやすいものに逃避するのである。

こうした「生まれながらに知っているが明言できないもの」は、子どもがかつて享受していた母と子の二者関係を彷彿させる。当初、子どもは母と一体化した万能感に浸っているが、やがてそこへ父が現れる。彼から母との関係に禁止を突き付けられた子どもは、母への願望を断念せざるを得なくなる。しかし、このエディプス・コンプレックスをどう処理するかは、幼く無力な自我にとって容易な課題ではない。そこで、父親がエディプス願望の妨害者としてみとめられるようになったとき、自我は、これと同じ妨害者を自分のうちにもうけることによって、この抑圧に対して自分を強力にする。つまり、自力では自らの願望を達成することも抑えることもままならず、窮地に立たされた自我は、ほかならぬ妨害者の力を借りてその願望を抑圧するのである。こうして子どもは、自らを父が表す象徴あるいは「掟」と同一化することによって、母と自分の区別さえつかない当初の二者関係では確立し得なかった、主体としての自己を確立していく。この

「象徴の秩序の出現はつねに、当初の連続（一方が他方であり、その逆でもあるという二者関係）の断裂、すなわち異質性の力の介入を前提とする」⁵。しかし一方で、その代償として禁止され、切り離された（象徴化され得なかった）当初の対象を、ある御し難いものとして無意識の中に抱え込むことになる。というのも人間は「ひとたび享受した満足感は絶対に断念できない」⁶からであり、「二者関係は、たとえ象徴の世界に入り込むことによって主体性を引き受けたとしても、なおかつ人間につき纏う」⁷のである。

コンプソン将軍曰く、アイクは、名言こそできないが「生まれながらに知っていて、恐れているが怯んではないもの」を今もなお忘れてはいないという。つまり彼は、意識的にであれ無意識的にであれ、生まれて間もないころに嬉々として享受していたものの、今では逆に「御し難いもの」となった世界から目を背けていないのである。コンプソン将軍が言うように、だからこそ銃もコンパスも時計も持たずに深い森へ分け入り、結果的にそれが「熊のこれまでの神聖な匿名性のみならず、古くからあるすべてのルールと、狩る側と狩られる側との均衡が無効にされた状況」(a condition in which not only the bear's heretofore inviolable anonymity but all the ancient rules and balances of hunter and hunted had been abrogated [p. 28]) を受け入れることにつながり、オールド・ベンと対面できたのである。ちなみに、ライオンの登場によって熊狩りが勢いついてきたとき、ライオンに対抗心を燃やしたりせず次のような気持ちを抱くのも、アイクに「御し難さ」と向き合う能力があることの証拠である。

So he should have hated and feared Lion. Yet he did not. It seemed to him that there was a fatality in it. It seemed to him that something, he didn't know what, was beginning; had already begun. It was like the last act on a set stage. It was the beginning of the end of something, he didn't know

what except that he would not grieve. He would be humble and proud that he had been found worthy to be a part of it too or even just to see it too. (p. 49)

「御し難い何か」に目を向けることは、同時に、それを抱え込む原因になった自らの無力さを突きつけられることでもある。アイクは、「御し難さ」を見つめ、自身の無力さに正直だったからこそ、「自分の手で大熊を殺したい」という野望など抱かなかったのである。

3. アイクの「中動態的」行動

銃やコンパスを持たないというある意味で消極的な行為の果てにアイクが状況を受け入れ、熊に出会うことは、「中動態」の概念を想起させる。哲学者の國分功一郎は、かつては今のような「能動」と「受動」ではなく「能動」と「中動」の区別が存在していたことを明らかにしている。古代ギリシアには存在したとされ、今となっては忘れ去られてしまった中動態とは、フランスの言語学者エミール・バンヴェニストによると、次のようなものだという。

能動では、動詞は主語から出発して、主語の外で完遂する過程を指し示している。これに対立する態である中動では、動詞は主語がその座となるような過程を表している。つまり、主語は過程の内部にある。⁸

つまり、國分が解説しているように、「能動と受動の対立においては、するかされるかが問題になるのだった。それに対し、能動と中動の対立においては、主語が過程の外にあるか内にあるかが問題になる」⁹のである。

こうした中動態の世界に目を向けることによって立ち現れてくるのは、

人間の意志に対する疑問にほかならない。

能動態と受動態の対立は「する」と「される」の対立であり、意志の概念を強く想起させるものであった。われわれは中動態に注目することで、この対立の相対化を試みている。かつて存在した能動態と中動態の対立は、「する」と「される」の対立とは異なった位相にあるからだ。

そこでは主語が過程の外にあるか内にあるかが問われるのであって、意志は問題とはならない。すなわち、能動態と中動態を対立させる言語では、意志が前景化しない。¹⁰

こうして、現代に生きる私たちにとってはほとんど当然と見做されている「意志」なるものが揺らぎ始める。じつのところ意志とは、中動態が用いられていた古代ギリシアの世界には存在すらしなかった、比較的新しい概念なのだ。今の時代に一般的な、人間が意志でもって自らの行為を掌握し、ゆえにその行為に責任を持つことができるという考えは、じつのところ幻想でしかないのである。

実際に、この中動態が受動態に取って代わられた現代においても、中動態でしか説明できない事象は数え切れないほど存在する。たとえば、「給料がほしいので仕方なく働く」というありふれた事態も、強制か自発かという対立、すなわち、能動か受動かという対立ではなく、主体が過程の外にあるか内にあるか、すなわち能動か中動かで説明すべきものである。¹¹ 同じように、アイクの行動も「する」か「される」かでは説明できない。彼は、明確な意志のもとで戦略を練り、銃などを装備して能動的に森へ分け入ったわけでも、誰かに言われてそうしたわけでもない。ただ、直観に導かれるようにして——こう言ってよければ、無意識的な衝動に従って——一行動を起こしたのである。

It seemed to him that he could see them, the two of them, shadowy in the limbo from which time emerged and became time: the old bear absolved of mortality and himself who shared a little of it … . *So I will have to see him, he thought, without dread or even hope. I will have to look at him.* (p. 25)

ここでアイクは「そこから時間が出現し、時間になるところの中間地帯 (limbo)」をイメージしているが、精神分析学者の岸田秀は、「時間は悔恨に発する」と述べている。曰く、自らの欲望の抑圧と、それによる悔恨のなかで発明されたのが時間であるという。

要するに、人間はその欲望を抑圧することができるし、また抑圧しなければならないのである。そして、抑圧するかしないかは、いわば決断の問題であって、ある欲望を抑圧したとき、つねに、その欲望を満足させることができたかもしれない可能性はあったのである。ここから悔恨が生ずる。この悔恨がわれわれの関心を、満足されなかった欲望にしばりつける。そしてわれわれは、その欲望を抑圧した時点を過去として設定し、その過去と、それとは異なる時点としての現在、つまりその欲望を満足させることができたかもしれないチャンスを失ってしまった時点としての現在とのあいだに時間というものを構成した。¹²

このことを踏まえると、アイクが時間を超越した熊と自分を重ねているのは妥当である。アイクは、「御し難いもの」に向き合える力のおかげで、周りの大人たちと同じような、悔恨によって駆動される時間の流れには乗っていないはずだからである。本稿の第1章で、ハンターたちは「意志や大胆さ」で、ある程度過去を振り払おうとしていると指摘したが、アイク

はそうではないのである。この点から言っても、アイクの行動はきわめて中動的である。なぜなら彼は、森やオールド・ベンの中にほかならぬ自己——その内奥に潜む御し難さや、まだ時間の流れに乗っていないこと——を見てとり、それに引きつけられるようにして直感的に行動を起こしているからである。自然と対峙するなかで、戦いを自然同士のそれにすり替えてしまった他のハンターたちと違って、アイクは終始その過程の「内」にあったのである。

結び

アイクは他のハンターたちと違って、自らとるべき行為を知らないうちに他に明け渡し、自然でもって自然を制しようとすることはなかった。つまり、自然の中で起こる出来事に真に参与していたのはアイクだけだったのである。一見すると、使い方をも身につけた銃やコンパスを置いて行くというアイクの行為は、自然に圧倒され、最初から白旗を挙げたような行為にも見えるし、無謀極まりない行為にも見える。しかしそれは、自然やオールド・ベンと真摯に対峙するうちに起こったアイクの成長にほかならない。それは、自らの内に潜む御し難いものに向き合いながら、自分の無力さを受け入れたことを意味しており、発達心理学の見地からみても評価に値する成長である。しかも、先述のとおり、彼のその後から考察するに、無力だからといって何もしないわけではなく、当時は理解できなかったことや御し難いものを心に留め、つねに理解しようと努めていたのである。この姿は、フォークナーがノーベル文学賞受賞の際のスピーチ（1950年12月10日）で述べた信念とも通じるものである。

I decline to accept the end of man. It is easy enough to say that man is immortal simply because he will endure: that when the last ding-dong of doom has clanged and faded from the last worthless rock hanging tideless

in the last red and dying evening, that even then there will still be one more sound: that of his puny inexhaustible voice, still talking. I refuse to accept this. I believe that man will not merely endure: he will prevail.¹³

アイクは、“wilderness”の象徴であったオールド・ベン、ライオン、そしてサムらがこの世を去った2年後、再び森を訪れる。彼らの亡骸を埋めた場所に立ち寄りながら、アイクは、そこに今も彼らが死なずに息づいていることを悟る。

… there was no death, not Lion and not Sam; not held fast in earth but free in earth and not in earth but of earth, myriad yet undiffused of every myriad part, leaf and twig and particle, air and sun and rain and dew and night, acorn oak and leaf and acorn again, dark and dawn and dark and dawn again in their immutable progression and, being myriad, one: and Old Ben too, Old Ben too … (p. 94)

物語の最後にアイクに対置されるのは、無数のウサギに囲まれ、欲望に我を忘れたブーン (Boon Hogganbeck) の悲しき成れの果てである。このときの、ばらばらになった銃の銃身で銃尾を打ちつけるブーンの姿 (What he hammering with was the barrel of his dismembered gun, what he hammered at was the breech of it [p. 97]) には、自然 (ライオン) で自然 (オールド・ベン) を打倒しようとしたハンターたちの姿が投影されている。それとは対照的に、アイクは、御し難さに耐え、森などの環境に自己を見出しながら成長を遂げ、そして最後にはその環境の中で他者と共生を図りつつ生きていく道を選んだのである。「あんなことをしながらなぜ生き残ったのか不思議だ」と述懐していたフォークナーは、このようなアイクの成長と選択に真の「勝利 (prevail)」を見出したのではないだろうか。「不変の前進における、

暗闇、夜明け、暗闇、そしてまた夜明け」という表現からは、そうした成長の困難さと、それでも人は前進（勝利）できるのだという揺るぎない信念が感じられる。

※ 本稿はサイコアナリティカル英文学会第44回大会（2017年10月21日）での口頭発表を加筆修正したものである。

Notes

- 1 Utley, Francis Lee. et al. eds. *Bear, Man, and God: Seven Approaches to William Faulkner's "The Bear"* (New York: Random House), 1964. p. 129.
- 2 Thomas, Harry. "Hunting Stories & Stories Told about Hunting: What Isaac McCaslin Thinks He Learns in The Big Woods." *The Mississippi Quarterly*. June 22, 2007. p. 561.
- 3 *Ibid.*, p. 563.
- 4 Faulkner, William. *The Big Woods* (New York: Random House, 1955), p. 11. 以降、本書からの引用は引用末尾の括弧内に頁数を示す。
- 5 ルメール、アニカ『ジャック・ラカン入門』長岡興樹訳（誠信書房、1983年）、p. 126.
- 6 フロイト、ジークムント『改訂版フロイド選集5：性欲論』懸田克躬訳（日本教文社、1977年）、p. 215.
- 7 ルメール、*op. cit.*, p. 118.
- 8 國分功一郎『中動態の世界—意志と責任の考古学—』（医学書院、2017年）、p. 81.
- 9 *Ibid.*, p. 88.
- 10 *Ibid.*, p. 97.
- 11 *Ibid.*, p. 156-158. 参照。
- 12 岸田秀『ものぐさ精神分析（改訂版）』（中央公論社、1996年）、p. 220.
- 13 Faulkner, William. *Essays Speeches & Public Letters* (CHATTO AND WINDUS LTD. 1967), p. 120.

SYNOPSIS

Melville's *Pierre*: Resentment over Father's Love

Eitetsu Sasaki

This paper analyzes the sub-plot in which Isabel comes to dominate Pierre's psyche. The analysis clarifies this problem: what is Isabel's hidden motive in appearing before Pierre and consequently ruining his life?

As an illicit daughter betrayed and abandoned by her father, Pierre's licit father, Isabel retaliates against Pierre for having exclusively enjoyed parental love. Excluded from the mainstream society of mid-nineteenth-century New England as an orphan with an ambiguous identity race-wise and class-wise, Isabel augments her anger at Pierre, her half-brother who stays snug in his socially privileged position and uncritical of his environment. Isabel's rivalrous envy at her younger brother reminds us of the (mock-)sibling strife in the Biblical episodes, in Melville's other works, and also in Melville's own personal history.

SYNOPSIS

The Tragic Nature of Alice — A Psychoanalytical Consideration in “Adventure” —

Eriko Taira

Sherwood Anderson (1876-1941) is a writer who, throughout his novels, demands an answer to the question of what the most important and valuable things are. Born and raised in the transitional era from human labor to machinery, Anderson opposes to the tendency of the era where convenience matters more than the consideration of people. He tries to remind us that the unconsciousness gives us the most important message in our everyday lives.

“Adventure” is one of the twenty-two short stories that comprise *Winesburg, Ohio* (1919). Alice is the main character of this tale. As Anderson draws her life throughout the story, she longs for Ned, who left her to make money. Even after eleven years, Alice is unable to change her mind, and still waits for Ned. One rainy night, she suddenly takes off all of her clothes and runs out of her home.

Adopting the psychoanalytical theories of Freud, I focus on and consider Alice to analyze how the ‘object loss’ ---- meaning the loss of her lover, Ned ---- changes Alice, and explore what signification the “Adventure” gives to Alice and Anderson as well.

Through these Freudian analyses, it could be demonstrated that Alice is in the immature mental state of so-called ‘pregenital phase.’ In this way I investigate and draw conclusions, regarding what the adventure is for Alice.

SYNOPSIS

A Jungian Approach to D. H. Lawrence's *Women in Love* (I) — Searching for “the Self ” through Marriage —

Minoru Morioka

As the sequel to *The Rainbow*, *Women in Love* describes the love relationship of the two Brangwen sisters Gudrun and Ursula. Gudrun's partner, Gerald Crich, is the hereditary owner of a coal mine. Ursula's partner, Rupert Birkin, is a school inspector. In terms of Jungian psychology, Lawrence's portrayal of the complex relationships of these two couples adds up to a picture of the “Ego” alienated from the “Self.”

From the view point of Jung's “Individuation Theory,” I consider whether the characters in this story are successful or unsuccessful in their quests for “Self-Realization.” I have briefly explained the Anima-Animus theory and applied it to this story. This paper covers only the first three chapters. The rest will be dealt with in my papers to follow.

SYNOPSIS

An Essay on *The Merchant of Venice* Reconsidered: The Meaning of ‘Mercy’ by Disguised Portia

Yumiko Tsutsumi

In *The Merchant of Venice* by William Shakespeare, there are three critical scenes; “the choice of three caskets”, “the trial scene”, and “the ring plot”, where Portia turns to be a central figure. Forbidden at that time, some women wore men’s consumes. In his plays, Shakespeare reflected this contemporary trend so that actresses, including those performing as Portia, could disguise themselves as men.

Trying to save the life of Antonio, Portia wears the garment of a doctor of laws and goes to the trial. She demands Shylock show mercy on Antonio. When she delivers this impressionable speech, what messages, explicit or implicit, does Portia convey? I aim to find the meaning of mercy within the context of Erik H. Erikson’s theory of growth.

After witnessing the two suitor-kings choose the wrong caskets due to their greed and wrong self-estimation, Portia decides to help her lover Bassanio and his friend Antonio. I attempt to follow how Portia becomes a mature woman ready for marriage and accepted by society.

SYNOPSIS

Escape from Melancholia: A Freudian Analysis of Mark Twain's Acquaintance with 'Angelfish'

Takashi Suzuki

One year after losing his wife Livy (Olivia Langdon Clemens), Mark Twain established a personal club named the 'Aquarium Club,' a group of girls from around 10 to 16 years old. He named all of them 'Angelfish' whom he began to create deep friendships with. Some critics see sexual meaning in these relationships while others interpret it as a substitution for his own daughters. This was thought to be his method of reintroducing fun into life to replicate the time when his daughters were still young.

The loss of a beloved person and how it affects the state of mind is considered in Sigmund Freud's article "Mourning and Melancholia." In the article, Freud says "In mourning it is the world which has become poor and empty; in melancholia it is the ego itself. The patient represents his ego to us as worthless, incapable of any achievement and morally despicable; he reproaches himself, vilifies himself and expects to be cast out and punished. He abases himself before everyone and commiserates with his own relatives for being connected with anyone so unworthy."

To his wife in bed, Twain wrote some letters. These letters showed many of the actual features which Freud suggested as symptoms of melancholia. According to this and another explanation by Freud, "[O]wing to a real slight or disappointment coming from this loved person, the object-relationship was shattered," one of the results is "the normal one of a withdrawal of the libido from

this object and a displacement of it on to a new one.” It can be said that Twain transferred the object of his libido to “a new one,” his acquaintance with the ‘Angelfish,’ and succeeded in recovering his ego and pride.

SYNOPSIS

The Growth in “The Bear”

Makiko Udo

As for William Faulkner’s “The Bear,” there are two different texts, one contained in *Big Woods* (1955) and another in *Go Down, Moses* (1942). In this paper, I examine the former. It has often been indicated that Ike has learned the rule of manhood through hunting. However, he has done not only what he is allowed to do as an adult-to-be in the South, but also what he desires to do by himself. Applying those theories established by Freud, Lacan and Koichiro Kokubun, I examine how differently but genuinely Ike grows, unlike other ordinary hunters, through different approaches to hunting.

執筆者紹介

学術論文

(アメリカ文学)

佐々木英哲 桃山学院大学 国際教養学部 教授
サイコアナリティカル英文学会 理事・編集委員・運営委員

平 恵理子 元 都立高等学校 教諭

(イギリス文学)

森岡 稔 名城大学 非常勤講師
サイコアナリティカル英文学会 運営委員

堤 裕美子 佐野日本大学短期大学 准教授

(アメリカ文学)

鈴木 孝 日本大学 理工学部 教授
サイコアナリティカル英文学会 常任理事・運営委員

有働 牧子 熊本県立大学 非常勤講師
サイコアナリティカル英文学会 事務局長・運営委員

サイコアナリティカル英文学協会

[1974(昭和49)年7月20日創立]

サイコアナリティカル英文学会

[1983(昭和58)年4月1日改称]

初代名誉会長 大槻 憲二

第2代名誉会長 (初代会長) 今田 準造 (創立者)

1. サイコアナリティカル英文学会

〒752-0997 山口県下関市前田2丁目27-43

会 長：小園 敏幸 TEL 090-8297-0729

E-mail: kozono.toshiyuki@silk.plala.or.jp

事務局長：有働 牧子 TEL 080-1733-1554

E-mail: udou@pu-kumamoto.ac.jp

ホームページ：psell.sakura.ne.jp

2. 役員[任期3年:2017(平成29)年4月1日~2020年3月31日]

顧 問：林 暁雄

会 長：小園 敏幸

副 会 長：木村 保司、倉橋 淑子

常任理事：金丸 千雪、木村 保司、倉橋 淑子、小園 敏幸、
鈴木 孝、湯谷 和女、横田 和憲

理 事：石田美佐江、伊藤 太郎、金丸 千雪、木村 保司、
倉橋 淑子、小園 敏幸、佐々木英哲、鈴木 孝、
藤見 直子、町田 哲司、湯谷 和女、横田 和憲

会計監査：藤見 直子、松尾かな子

運営委員：有吉登志子、石田美佐江、有働 牧子、上滝 圭介、
佐々木英哲、鈴木 孝、中尾香代子、藤見 直子、
松尾かな子

論叢編集委員：飯田啓治朗、倉橋 淑子、小園 敏幸 (編集長)、
佐々木英哲、松山 博樹

事務局長：有働 牧子

サイコアナリティカル英文学会会則

第1節 総 則

第1条 本会は、サイコアナリティカル英文学会という。

第2条 本会は、本部を会長の本務校又は自宅に置く。
事務局については、別途理事会において決定する。

第2節 目的と事業

第3条 本会は、精神分析学の立場から、英米の言語及び文学を研究することを目的とする。

第4条 本会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

1. 学術研究会、講演会
2. 会誌の発行
3. その他、本会の目的を達成するために必要な事業

第3節 会 員

第5条 本会の会員は、次の通りとする。

1. 本邦大学課程またはそれに準ずる教育をうけた者及び相当教育機関の在籍者で、本会の目的に賛同する者を会員とする。会員は維持会員および一般会員で構成する。維持会員は会員の中の有志とする。
2. 本会に功績のあった者で会長が役員会に諮って推挙する者を名誉会員または賛助会員とする。

第6条 本会に入会を希望する者は、所定の申込書を事務局に提出し、理事会の承認を得なければならない。

第7条 会員は、本会の開催する学術研究会において研究発表をすることができる。

- 第8条 会員は所定の会費を納入しなければならない。
名誉会員は会費を納入することを要しない。
- 第9条 年会費は維持会員1万円（内、3,000円は寄付）、一般会員7,000円。
但し、大学院生は3,500円とする。
- 第10条 退会を希望する者は、退会願いを事務局に提出し、理事会の承認を得なければならない。

第4節 運 営

- 第11条 本会には役員として会長1名、副会長2名、会計監査2名、常任理事、理事及び運営委員、論叢編集委員若干名を置く。
尚、名誉会長及び顧問を置くことができる。
- 第12条 （理事） 理事は会員の推挙により選出する。
- 第13条 （常任理事） 常任理事は理事の中から推挙により選出する。
- 第14条 （会長） 会長は常任理事の中から推挙により選出する。
- 第15条 （副会長） 副会長は会長が常任理事の中から選任する。
- 第16条 （運営委員） 運営委員は会員の中から推挙により選出する。
- 第17条 （会計監査） 会計監査は会員の中から推挙により選出する。但し、2名のうち少なくとも1名は理事を兼ねることができない。
- 第18条 （『論叢』編集委員） 『論叢』編集委員は会員の中から推挙により選出する。
- 第19条 （役員会） 会長は必要に応じ役員会を招集する。
- 第20条 （理事会） 会長は原則として年1回理事会を招集する。
会長は前項理事会に必要なに応じ運営委員の出席を求めることができる。
- 第21条 （常任理事会） 会長は随時常任理事会を招集することができる。

会長は前項常任理事会に必要な応じ運営委員の出席を求めることができる。

常任理事会の決議事項は理事会の議を経て効力を発するものとする。

第22条 役員任期は3年とし、重任を妨げない。

第23条 本会の経費は年会費、寄付金その他を以って賄う。

第24条 本会は年1回総会を開き、役員決定、年会費決定、事務会計の報告等を行う。総会に続いて、学術研究会を開催し、会員の研究業績の発表及び討議を行う。

第25条 本会則の変更は、理事会の審議を経て総会に提出され、総会出席者の3分の2以上の賛成を得なければならない。

補則 本会則は昭和49年7月20日より施行する。

昭和49年12月1日 第1回大会 改正

昭和51年12月5日 第3回大会 改正

昭和52年12月4日 第4回大会 改正

昭和53年12月3日 第5回大会 改正

昭和54年12月1日 第6回大会 改正

昭和55年12月6日 第7回大会 改正

昭和57年12月4日 第9回大会 改正

平成3年11月9日 第18回大会 改正

平成8年10月19日 第23回大会 改正

平成9年10月4日 第24回大会 改正

平成12年9月30日 第27回大会 改正

平成14年10月5日 第29回大会 改正

平成16年10月5日 第31回大会 改正

平成23年10月22日 第38回大会 改正

平成27年10月3日 第42回大会 改正

付記

この規程の他に、名誉会長・顧問・名誉会員に関する内規を別に定める。

『サイコアナリティカル英文学論叢』 投 稿 規 程

1. 投稿論文は未発表のものであること。ただし、口頭発表はその旨を明記すれば可。
2. 内容は精神分析学の立場から、英米の言語及び文学を研究した論文であること。
3. 応募者は本学会会員であること。
4. 原稿（論文及び英文シノプシス、書評）は全て、パーソナルコンピューターによること。審査用として、プリントアウトしたものを4部（コピー可）提出し、英文によるシノプシス（200語程度）4部を添付すること。（書評の場合には、英文シノプシスは不要である。）

論文の書き方の大枠については、次の通りである。

- (1) 本文の後には、Notes の項目のみ設ける。Bibliography や Works Cited の項目は設けない。
- (2) 「注（註）」は Notes とする。
- (3) 短い引用文（Two sentences 以下）の場合は、Double quotation marks（“ ”）でくくって、地の文の中に入れる。その出典が地の文の中に明示されていない場合には、closing mark（”）の右上肩に番号を打って、Notes の中で出典を明示する。
- (4) 長い引用文は、地の文と区別し、indent し、この quotation と地の文との space は double space とする。
- (5) Notes には、次の略語を使用する。

ibid. 同一著者の同一著作に連続して言及する時に用いる。

op. cit. . . . 著者 (surname) と page number は必ず示す。

loc. cit. . . . 同一著書の同一頁から連続して引用する場合にのみ用いる。

(6) シノプシスには英文のタイトルとローマ字による執筆者の氏名を記入すること。

Notes の具体例は、次の 1 - 12 を参考にしてください。

Notes

1. Sherwood Anderson, *Poor White* (New York: B. W. Huebsch, 1920), p. 12.
以下、同書からの引用は全てページ数を括弧に入れて本文中に記す。
2. William James, *The Principles of Psychology* (New York: Henry Holt, 1890), p. 190.
3. *Loc. cit.*
4. *Ibid.*, p. 58.
5. Irving Howe, *Sherwood Anderson: A Biographical and Critical Study* (California: Stanford University Press, 1966), p. 124.
6. James, *op. cit.*, pp. 56 - 8. 参照。
7. Trigrant Burrow, *A Search for Man's Sanity* (New York: Oxford University Press, 1985), p. 561.
8. James, *op. cit.*, p. 205.
9. Howe, *op. cit.*, pp. 250 - 62. 参照。
10. *Ibid.*, p. 38.
11. Burrow, *loc. cit.*
12. 村上仁『異常心理学』（東京：岩波書店、1952）、pp. 56 - 7. 参照。

（但し、論文で扱う、所謂 Text に相当するものについては、例えば上記の Notes 1. のように「以下、同書からの引用は全てページ数を括弧に入れて本文中に記す」としても可。但し、その場合、例えば 15 ページであれば、(15) ではなく (p. 15) と表記すること。

あるいは、Text であっても他の引用と同様の表記の仕方でも可。)

5. 原稿の採否および掲載の時期は編集委員会が決定する。
6. 執筆者は編集委員から採用の連絡があり次第、電子メールによる添付ファイルにて原稿を事務局に送付すること。(またはフロッピーディスク、メモリースティック或いはCD等による提出も可。)
7. 採用論文の執筆者は論叢印刷費用の一部を負担する。詳細は内規による。
8. 原稿の締め切りは9月末日とする(厳守のこと)。
9. 論叢発行の際に、執筆者には抜刷30部が送られる。

付記

学会の依頼による執筆の場合は、この規程を適用しない。

この規程の他に、『サイコアナリティカル英文学論叢』に関する内規を別に定める。

サイコアナリティカル英文学会の 図書出版に関する規程

本学会は「著作が精神分析学の立場から英米の言語や文学を研究している」場合に、執筆者の申し出により可能な限りのサポートをする。(執筆者は本学会会員であること。)

1. 編集委員が著作の査読を行い、必要に応じて助言し、著作内容の一層の充実のために協力する。
2. 印刷会社については原則として執筆者が直接交渉するものとするが要望があれば、紹介等の便宜をはかる。
3. 完成本については、学会に献本するものとする。

編集後記

小園敏幸

サイコアナリティカル英文学会は、1974（昭和49）年7月20日に創設されて、今年44周年を迎えます。

今年度大会（第44回〔平成29年度〕大会）は、2017年10月21日（土）に、桃山学院大学で開催されました。当日は、超大型で強い台風21号の襲来と重なり、予定していた出席者数を大きく割ってしまいました。とは言え、施設設備の完備した桃山学院大学会議室での4名（佐々木英哲、有働牧子、飯田啓治朗、鈴木孝）の先生方による研究発表やその質疑応答は、過去の何れのそれらと比しても勝るとも劣らない素晴らしいものであったことを敢えて申し述べておきたいと思います。更に、桃山学院大学生協食堂「グリーンビュー」で懇親会を開催しましたが、研究発表に関する更なる質疑応答・美味佳肴・ワイン・ビールで盛り上がり、今年度大会も有終の美を飾ることができました。これも開催校の佐々木運営委員や手伝い学生による行き届いた働きがあったればこそであり、この場を借りて開催校の関係者各位に深謝申し上げます。

閑話休題、『論叢』第38号の発行日は、2018（平成30）年3月20日とします。

『論叢』第38号のために投稿された論文については、編集委員5名（飯田啓治朗先生、倉橋淑子先生、佐々木英哲先生、松山博樹先生、小園敏幸）が全ての論文に目を通すことを前提に、執筆者の論文に対する意図を汲み取りつつ、それを十分に発揮できるよう、文学作品が内包する意味を可能な限り理解しながら膨大な時間をかけて綿密に査読し、場合によっては執筆者に提言をしたことを付記します。

今号の掲載論文は何れも、精神分析的理論を援用し、作品の分析と技

巧を追求した学術論文です。イギリス文学は2名ですが、その1人は堤裕美子先生で、ご専門の William Shakespeare の作品について考察した論文です。もう1人は森岡稔先生で、今回は D. H. Lawrence の小説を扱っております。アメリカ文学は4名です。掲載順に見ていきますと、佐々木英哲先生は Nathaniel Hawthorne や Herman Melville がご専門で、今回は後者の作品を扱っております。平恵理子先生は Tennessee Williams がご専門ですが、今回は Sherwood Anderson の小説を扱っております。鈴木孝先生は Mark Twain がご専門で今回は Twain と Angel-fish との関係を扱っております。有働牧子先生は、ノーベル文学賞を受賞した William Faulkner がご専門で、今回取り上げた作品も難解であるが興味深いものがあります。

是非とも読者のご高見を承りたく、宜しくお願い申し上げます。

最後に、長年に亘り、本学会の機関誌『サイコアナリティカル英文学論叢』の印刷・製本を快く引き受けてくださっている啓文社に、また企画の段階からいろいろお世話になった同社の相良徹氏および有働牧子氏に、衷心より感謝を申し上げます。

サイコアナリティカル英文学論叢

——英語・英米文学の精神分析学的研究——（第38号）

発行者 サイコアナリティカル英文学会
会長 小園 敏幸

印刷所 (株)啓文社 〒861-3102 熊本県上益城郡嘉島町下六嘉1765
TEL 096(368)8100 FAX 096(369)2677

発行所 サイコアナリティカル英文学会
〒752-0997 山口県下関市前田2丁目27-43
会 長 小園 敏幸 TEL 090-8297-0729
E-mail : kozono.toshiyuki@silk.plala.or.jp
事務局長 有働 牧子 TEL 080-1733-1554
E-mail : udou@pu-kumamoto.ac.jp
ホームページ : psell.sakura.ne.jp

郵便局の青色の「払込取扱票」について
口座番号 : 0 1 5 0 0 - 9 - 2 8 9 4 9
加入者名 : サイコアナリティカル英文学会

2018（平成30）年3月20日発行